勇者？誰のことですか？

mama

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
勇者？誰のことですか？

【Ｎコード】
Ｎ４３３２Ｐ

【作者名】
ｍａｍａ

【あらすじ】
突然召喚されて私が勇者？無理です！人違いです！一般人です！
なんとか逃げきれました。
で、帰る方法探して頑張ります。
そんなこと言っている間に従姉至上主義の海が追いかけてきました。
（めざせハッピーエンド）
二人で帰れるよう頑張ります。（戻れるとは限りませんが・・・。）
そして、いつの間にか勇者がいなくなりました・・・。
チートな二人です。それでもよろしければ・・・。

＊題名変更しました

1

「お待ちしておりました勇者殿」

はぁ??なんですって?とんでもない名前が聞こえません?
スルースキルで♪

状況確認。まず自分のいる場所、中世の神殿っぽい。
立っている真下に円に文字か、魔方陣だろ〜なぁ。記録必要だろう。
よっしゃ、袋を持ってるってことは、携帯有りと。
スルーしたかったけど回り&声かけた人たち。
ふ〜っ、ここまできたら定番でしょう、神官&騎士ってことは王宮関係者?。

なぜと考える前に逃げ出す算段をと。このままだとそれこそ定番!
異世界トリップの王道になること間違いなし、最初に声かけた人グッジョブ!
落ち着いて話聞いてからだと逃げられない。
あまり、しゃべらないようにして低い声でと。

「わしに何用ですかのぅ」

「申し訳ありませんが、勇者殿ではありませんか」と神官長っぽい人。

「はて、なんのことですかのう、老い先短いわしがかのぅ、ひとちがいじゃろう。
帰らせてほしいのぅ、曾孫が待っておるでのぅ」
こんな感じで逃げ切れるとありがたいなぁ。今の私の姿は、杖を

ついた老人ですから。

「申し訳ありませんが、魔王を倒すまで無理です」
ここもお約束、たぶん倒せた人だけが帰れるんだろう。逃げる気満々じゃ二度と帰れないってことか。

「一応確認させていただきます」
なんですと？やばい？どんなんでくる？
玉？剣？場所？とよくあるパターンを想定するけど、見かけでごまかされて欲しかった～。

「こちらの石に触れてください」
なんだぁ？祭壇中央に占いの水晶の大きさの丸い石。これが光れば勇者かな。
これは、ごまかすもなにも無理か。

老人らしい動きで石の近くまで移動。見かねた近くの騎士が、手を差し出してくれたので
つかまってよたよたとね。
これは、わざとの動きじゃないよ！動きに制限があるからこうなるの！目も同じで老眼で
あまり見えてない。

さてと石、女は度胸と占い師風に灘回してみました。えへっ。

あれ？反応ない？

がっくり膝を折っている人たちの中から「勇者ではないなんて」と。

なんですと？マジで違うんですかい？人違い？はぁ？
これからどうしろと？

1（後書き）

＊初めての小説挑戦です。どうしましょう〜。展開決めずにスタートしました。盗作が怖いので似た作品があったら教えてください。すぐ止めますので。

2

神官長っぽい人から「申し訳ありません」と言われました。
そう言われてもねぇ。戻れないんだし、この変装がばれてもまずいし。
間違いと思ってもらえるなら多少優遇あるだろうし、状況聞いてみようかなと。
逃げることは決定事項ではありますけどね。
本当に勇者じゃないならいいけど。

「わしは、どうすればよいのかのぉ、わしのことは見たままご老人とでも呼んでもらってかまわんよ」
自分でご老人ってどうよ？まぁ、名前考えてないからしかたないけどね。
明日までに考えるってことで。

「ご老人はおちついていられるので助かります。私はここの神官長のドブロ・ウートロと申します。
魔王との戦いのため勇者を召喚いたしました。
召喚されたものが、勇者でなかったなんてことは今までなかったことです。
ご老人は、お疲れでしょうから神殿にてお泊りいただきます」
聞きたいことはあるけどここは我慢我慢。ここ以外で聞いた方がいいでしょう。
どこでばれるかわかりませんので。

「おねがいしますのぉ」
勇者じゃないから王宮じゃないのかな？神殿って宿泊施設あるのかな？

まぁ、警備が厳重じゃない方が逃げるのにいいですから歓迎ですとね。

ちょっと周囲について説明。
でも、薄暗いのとあまり見えてない視力では、神官に騎士に貴族かな？
服装がそれっぽく見えるかなっていうレベル。
かなりばたばたしてますねぇ。
王に報告とか再度召喚するのかとか。うん、私も気になる。
で、しばらくすると私と巫女さん？（女性だからね）以外いなくなりました～。

ねぇねぇ、お約束の美形軍団ってものまだ見てないよぉ～。
やっぱり魔法ってあこがれあるんですけど～。
と、現実逃避のハイテンション！！これは夢で目が覚めたら日常のはずだもん。

2（後書き）

なかなか時間が取れませんのでぼちぼち短めで更新していきたいと思ってます。

3（前書き）

過去に戻ります。

3

「聖（ひじり）、今回の仮装はどうするの？やっぱりサンタクローズで行くの？」
パソコンの数字とにらめっこ状態の私に声をかけてきた同僚の未来（みらい）。

「まぁ、その予定かな」
会社の有志でクリスマスパーティ！それも仮装。
どうせ最年長（同僚の未来は、数か月年下）なんだからもっと年とってみるってことで。
ついでに性別を変えて。同性だと魔女になってそのまんまだと言われそうだから。
ふん、どーせお局さまですよ～だ。ちょっと厳しいだけじゃない。

どうせなら徹底的にやろうかなと思って老人変装グッズを取り寄せてみました。
体をまげて固定する機器、顔、手、足のマスク、洋服、老眼設定カラーコンタクト。
で、髪はもちろん白、肌は本来よりも白く、青のコンタクトにしたので私服のサンタって感じ。

私、黒宮聖はクリスマスで２８歳。黒髪に黒い瞳と生粋の日本人。
身長１５８ｃｍ、体重４７ｋｇほんとうに普通でサイズＭ。
スリーサイズは秘密！
ちょっと胸がきついからダイエットしたりしなかったり。
本気になればすぐやせれるさって軽くね。
顔も特徴なく普通。化粧映えするから力入れればちょっときれいと言われるかな。
でも、ほとんどノーメイク。アイメイクとリップだけ。だって化粧

落とすの面倒です。
仕事は、某商事で経理。勤続８年、うん続いてます。
一人暮らし。自己紹介はこんなんでいいかな？

さて、クリスマスパーティ当日。
仕事が終わって仮装の衣装を持って会場へ移動。
結構荷物かさばります。
更衣室変わりの部屋をキープしてくれてるから楽～。
他の皆は、私を置いてさっさと会場へ行っちゃいました。
貴重品は体をまげて固定する機器に入れたから着替えた服を白い袋に入れて
杖をつき、さぁ行くとしましょうか。
後輩たちがメイドさんになってたから労わってもらいましょうかねと。

ドアを開けて一歩踏み出したら、えっ落とし穴？
そんな馬鹿な！なんで落ちてるの？欠陥住宅？地震あった？揺れてなかったよね。
一瞬で足の下に地面の感触が。何があったかわからず。
で、「お待ちしておりました勇者殿」のシーンとなりました。

4

巫女さんに案内されて神殿の隣の建物へ移動しました。
そうよね、神殿の中な訳ないよね。
自分の世界の神殿ってどうだっけと考えてしまいました。

「こちらの部屋でお休みください。のちほど食事をお持ちいたします。では、失礼いたします」
と巫女さんは、部屋の前でお辞儀をして来た方向へ戻っていきました。

私は、言われた通り部屋の扉を押して中へ。
わぁ、自分の部屋より広くてテーブル、椅子、ベッドだけなんだけど１６畳くらいあります。
いいですねぇ、広い部屋。羨ましいです。
借りたり泊まったりしたらおいくら？と現実的なことへ思考が・・・。

そんなことは置いといて、さてこれからどうしましょうか。
荷物を椅にかけてどっこいしょと腰をおろしました。
肉体的な問題？、精神的な問題？
まず、この仮装辛いです。腰と足が痛いのよ。仮装をとっぱらいたい。
そうするには、誰にも会わないことが最低条件です。仮装がばれる訳にはいかないので
ひとまず食事後まで我慢。
状況については、異世界トリップ小説大好きなおかげで定番の異世界トリップから想像して
対応しています。パニックおこしやすい私ですが、なんとか・・・。

ＲＰＧ関係は、ゲームを全くしませんので対応できません。もし、こちら関係だとお手上げです。

魔王との戦いがあるということは、魔法はあるよね？いろいろな人種の人に会えるよね？

まず、ここの世界におちつくしか方法がないなら図書館で最低限のお勉強をしたいし、

異世界人ってばれたくないというか一般人として生活したい！

魔法があるなら学校も行きたいなぁ。（でも、図書館も学校もあるんでしょうか？）

そのためには、ここからどうやって逃げ出すかですね。誰か何とかしてくれないかなぁ、

と他力本願で。

「トントン」とノックの音が聞こえました。

ドアまで行って扉を開ければ、ワゴンを押したさきほどの巫女さんですね。食事を持ってきてくれた

ようです。良い香りです、お腹が空いていることを実感しますね。

野菜スープにパンです。巫女さんは、テーブルの上にセッティングしてお辞儀をして出て行きました。

会話がほとんどありません。付き合い悪いですねぇ。

さて、腹が減ってはとなんとやらです。食事しましょう。

ん？味が無い？薄味？塩気がないです。パンは、ぱさぱさですね。

とにかくいただきますと。

パンをスープに付けながら食べて完食。食器をワゴンに戻して廊下へ出しました。

これは、入口を塞ぐためにね。

そろそろ精神的にギブアップになりつつありますので寝ましょう。
人の訪問があると困りますので荷物をベッドの下に入れて腰を曲げる機器の設定角度を
少々修正して痛くないようにすれば横向きで眠ることができそうです。
着替えはありませんのでこのままでＯＫと。持ってきてもらえるかもしれませんが、
眠ることを優先させていただきましょう。
では、おやすみなさい。

5

う～ん、体痛い？寝違いしたみたい。携帯のめざましなってないから遅刻は大丈夫！

目が開いて？目が痛いしぼやけてます？コンタクトしたまま寝ちゃったみたいですね。

こんなに広い部屋だっけ？

現実逃避してもしかたがないですね。やっぱり夢ではなかったんですね。

老眼コンタクトと機器はずしたい～！シャワー浴びたい！

チートな能力くださ～い（これは・・・ここの世界について知りたいから知識欲しいなと）。

こんな時は、神様が出てきて要望を聞いてくれるのが定番じゃないのかなとこれも現実逃避なんでしょうね。本気で期待しているのも私らしいというか小説の世界に入りすぎなのかも。

冗談はともかく、袋の中味を確認することにしましょうか。

まず、仮装前の洋服と下着と、もう一パターンの仮装で修道女に扮装するための金髪のボブの鬘とブルーのコンタクトレンズに黒の修道服に黒のスカーフで黒い靴。

さすが私！ナイスチョイス！まるで分かっていたかのような・・・、褒めても虚しくなるので止めた方か健全ですね。

化粧道具にマイ一味とマイ食べるラー油ですか、貴重品は、機器と背中の間で財布と携帯。

今すぐはめている老眼ブルーコンタクトから老眼の入っていないブルーコンタクトに交換しないと目が大変です。本当なら視力両目とも1．2だから何も必要ないけど現状では付けるしかないですね。黒い目の人が多いか確認できてからしか外せない。

ブルーコンタクトを外すためテーブルへ近づけば洗面器とタオルが置いてありました。
昨夜のうちに用意してもらえたようですね。
顔を洗ってから体をぬれタオルで拭けますが、その前にコンタクトを交換しなきゃとまず今のを外しテーブルの上に置いて、老眼の入っていないのを水で洗ってはめました。
巫女さんが来る前に老眼のコンタクトをかたづけて、顔を洗ってタオルで軽く体を拭きました。
機器は、外すと面倒なので今回は我慢です。

うわっ、世界が違う（遅っ）というか見える感じが違いますねぇ、見るものすべてがぼやけていたさきほどとは違ってはっきり見えます。また、部屋の造りから日本じゃないってことにも実感でき、畳&フローリングの室内カムバック！

さて、しょうもない何度目かの現実逃避は止めて、背筋を正して（実際にはもっとまげて）今後のことも考えながら朝の散歩に出ることにしましょう。

5（後書き）

なんてダメダメな文章なんでしょうと読み返すと頭をかかえてしまいます。
戻ってもあまり変わらないと思いますので、このまま先へ進んでいきたいと思ってます。
おつきあいいただいている方、ありがとうございます。

6

扉を開け廊下を右手に折れて進むと中庭のようなところへ出ました。

真ん中に噴水があり、その周りが通路でバラの蔓を使ったアーチとベンチが絶妙
なバランスで設置してあり、さらにその周りに高めの木々があって
まさにヨーロッパ
の庭園という感じです。
花の名前は正確にはわかりませんが、日本で良く見る豪華なバラ
ではなくて一重，
半八重のバラのようです。
香りもダマスクよりではなくブルーとかティに近い気がします。

まだ、早い時間なのでしょうか、人が見えませんのでベンチに腰
かけてのんびり
させていただきましょう。ぼーっと噴水をみていると中途半端な大
きさの虫?が
飛んでいます。虫嫌いな私としては、目に入れたくないんですが、
ふわふわ飛んで
いるとつい見てしまいます。虫にしては、手のひらサイズでかなり
大きい?ふわ
ふわ?は変ですよね。色は、ブルーで透明な羽。虫だなんて失礼か
な?きれいです。

あっ、グリーンのも飛んできました♪一緒に遊んでいるみたいで
すね。
あら、こっちの方へ飛んできました。

数十メートルくらいになって、目を見張りましたよ。だって妖精みたいですもん。
ふわふわの髪にくりくりのお目目！ワンピースみたいのを着ててかわいいんです。
ぎゅっと抱きしめたいです。

うそ～、ファンタジーみたい！いや、召喚されたんだから最初からファンタジー
と自分につっこんでる時点でパニックに陥っていますね。

「ファンタジーってなに？おいしいの？」

「ファンタジーっていうのはね、魔法とか異世界とか空想の世界の物語ですよ。
おいしい？って質問はお約束？」

誰か何か言いました？ブルーの子が言った？
私は、なぜファンタジーについて説明しているんでしょうか？
独り言言う危ない人？
目の前で妖精さんが手を振ってます。現実に耐えれず妄想の世界に突入したよう
です。幸せだからいいんです。かわいい妖精さんと遊びましょう。

「お姉さん、大丈夫？」
「ぼくたちみえてる？」「きこえてるの？」
グリーンの子とブルーの子が心配そうな顔して聞いてきます。

頬をつねっても痛くない！やっぱり夢です。良かったとしましょう。

ちょっと待った。私サンタさんマスクしてるよね。つねっても痛くないよね？
それに嫌なことまで思い出しました。
勇者確認の石・・・素手で触ってない。よくできた手専用のマスクしてました。
もちろん今もしてます。手を見れば年齢ってわかりますので。
もしかしてやっぱり勇者？いやいやここはスルーでいいでしょう。
近づかないようにしましょう。

「「ねぇねぇ、お姉さん（おねえさん）」」

ん？、あっ自分の思考にどっぷりで返事忘れてました。
「ごめんごめん、なあに？見えてるし、聞こえてるよ」

「すご～い、にんげんなのにぼくたちとかいわできるんだ」
「まぁ、お姉さんは、勇者だからねぇ」
ブルーっ子にグリーンっ子がとんでもないこと言ってますよ。

「お姉さん？勇者？老人じゃないの？」
私、老人の姿で勇者？じゃないはず。質問にもなってない言葉が出てしまいました。
妖精さんが答えてくれましたよ。

「変なもんかぶってるよねぇ」
「はじめてみたよ～」
グリーンっ子、ブルーっ子にあっさり言われました。
マスクないんだ。良かったです、これでこのままばれないでいけます。

「何にばれないの？」

グリーンっ子の言葉にびっくり。はい？私言葉に出してました？

「お姉さん、声大きいからよく聞こえるよ」

「うん」

グリーンっ子、ブルーっ子。テレパシーかな？大きいのは動揺した時と考えて

いいのかな。早速、声に出さないでお話してみましょうか。

（遅くなったけど自己紹介するね。日本っていうこの世界と別の世界から来た

黒宮聖と言います。よろしくね）

（聖、よろしくね～。僕たち名前ないから付けて欲しいな）

（よろしく～。ぼくもつけて～）

（うん、いいよ。で、君たちは何の妖精さんになるのかな）

了解したものの、ネーミングセンスないのよね～。

（僕、風だよ）（ぼく、みず）

風といえば又三郎・・・だめ似合ってない。う～ん。

（風の子がヴェントで、水の子がアクアでどうかな？）

（ヴェント！うん、良い名前をありがとう）

（アクア！ありがとう）

7

（アクア、ヴェント、昨日来たばかりで何も知らないから、いろいろ教えて
欲しいんだけど、いいかな？）

（何でも聞いてください）（うん、いいよ）

（さっき、人間なのに声が聞こえると言っていたけど私以外とは話ができ
ないの？）

（はい、まず見えないと思います。魔力の強い人は、そばにいることを感じる
ことができるようです。数百年前は会話ができていたと聞いています）

（魔力が強い人は？ということは、アクア、ヴェントと話ができる私って
かなり魔力あるということになるのかな？）

（ゆうしゃだもん，あるよ～）
まじ？嬉しい！魔法ってやっぱり憧れてました。使えるといいなぁ。

（なぜ私が勇者になるの？）

（まりょくがおおくてきらきらしてるから）
（アクアの言う通りです。僕たちは、魔力と魂を見て言います。
また、勇者

は、一人とは限りません）

（じゃあ、次に召喚された人も勇者かもしれないことになるのよね）

（そうですね）

（お願いがあるんだけど・・・。
私が勇者だって他の人に言わないで欲しいの）

（うん、いいよ）

（人間と会話することはできませんから問題ないと思いますよ。
前の勇者も
見ることはできましたが、話まではできませんでしたから）

（ひじりはすごいよ）

（ここから誰にも見つからずに出て行きたいんだけどできるのかな？）

（んっと、ひかりとやみがてつだってくれればまほうがつかえなくても
みえなくしてくれるよ）

（光のは光を屈折させれますし、闇のは闇にとけ込ませることができます）

（光の妖精さんと闇の妖精さんに会うことはできるのかな？）

（聖に興味があると思いますのでそのうち現れると思いますよ）

（ひじりとおはなしできることといっておくね）

（アクア、よろしくね。ねぇ、二人と話がしたい時はどうすればいいの？）

（いつも近くにいますから、名前を呼びかけてもらえればすぐ答えれますよ）

（ありがとう。人の声が聞こえてきたからそろそろ部屋に戻るね。またいろいろ教えてね）

さて、来た道を戻りましょうか。名前と言えば老人用の名前考えていません
でした。聖（ひじり）を読み替えて聖（せい）でいっか。姓は、神野（じんの）
としておきますか。

ベンチからよっこいしょと腰をまげた状態で立ち上り、杖を使いながら歩き
はじめた私の顔は、行きとは全く違います。行きは、今後のことを考えていた為
かなり難しい顔でしたが、帰りは妖精さん達のおかげで先行きに希望が出てきた
のでにこやかになりました。

8

部屋に戻ってしばらくするとノックの音が聞こえました。

「どうぞ」

と声を出すと昨日の巫女さんが、パンととスープらしきものが乗ったワゴンを押しながら扉を開けて入ってきました。そのままテーブルに向かい食事の用意を終えると踵を返して扉に戻ろうとしました。

そこで私は、お礼くらいはと思い声をかけてみました。

「世話をかけてすまんのぉ」

「いえ、何か御用がありましたら声をかけてください」

とお辞儀をして扉から出て行きました。

変装がばれずにここから出て、一般ピープルに紛れ込みたい訳だから挨拶程度が無難ではあるんですが、ちょっと社会人としてはコミュニケーションも取りたいとジレンマ。

勇者の召喚が、いつになるのかも気になるというか会ってみたい。でも、この召喚の時に出ていくのが一番だと思う。皆の注意が、確実に召喚に向いているのでここで出て行くつもりで準備するべきですね。

そのまえにお腹が空きましたので食事をさきにしましょう。昨夜

と同じようなメニュー
ですね。固めのパンに味の薄いコンソメスープ。この世界は調味料がないのでしょうか？
でも、食べ物があるだけいいですよね。ありがたくいただきましょう。スープにパンを
浸して柔らかくしていただきました。もしかしてお年寄り用料理なのかもと。

8（後書き）

ここしばらく他の方の作品にのめり込んで自分の作品が後回しになっていました。
今回もかなり短くなってしまいましたので明日は長めに頑張りたいと思っております。
よろしくお願いします。

9

食事のカートを通路に出し、テーブルで座っておちついていたら
「トントン」とノックの音が聞こえました。

「どうぞ」
と返事をすれば、神官？の方が一歩部屋へ入りました。

「ご老人、神官長様がお呼びです。神官長様の執務室までご足労いただきたい」

だそうです。まぁ、普通説明等ありますよね。現状で放置プレーはないと思っては
いましたが、ほっともしました。次の召喚いつかなぁと聞けますね。
もちろんこちらから聞くのは、ＮＧです。理由は、興味があること
を知られない
ためです。こちらの手の内というか私について何も知られたくあり
ません。
こちらの都合を無視して呼んだ（召喚）のですからつきあう必要な
いですね。

「案内お願いしますのぉ」
なんだかおじいさん用の返事おかしい？あんまり知らないんだから
しょうがない。

神官さんの後を杖をつきつつ外へ一旦出てから隣の神殿へ向かい
ました。
昨日は、まともに見えてない&暗かったから今改めて大きさにびっ
くりしました。

日本のお寺と比べること自体変なんですよね？参拝する所しか知らないけど。
とにかく石造りで大きいってことで。

神官さんが、ある部屋の前で立ち止まりノックをしました。

「入りなさい」と返事がありました。

「失礼します、ご老人を案内してまいりました」
と言い、私が中へ入ったのを確認して自分は部屋から出て行きました。

うっ、神官長と二人かい。ボロ出さないように気をつけなきゃ。

「ご老人、お体はいかがでしょうか。何かありましたら言って下さい」
今の私の変装よりも若干若いって感じかな。
巫女さんも神官の人もそうだけどこの神官長さんも美形でした…。
テンプレ？

「・・・、ありがたいのぉ。問題ないかのぉ」
なんて返事すればいいのかわからず、ひとまずこんな返事で。

「ご老人には、申し訳ないことをしました。この国には、勇者が必要です。
明日の夜再度召喚の儀を執り行ないます。ご老人が触られた石で召喚を行っています。勇者が触ると割れるようになっていて復活には、数十年必要です」
セーフ？割れなくて良かった。

「ご老人も立ち会われますか？」
えっ、マジですか？勘弁してください。
「わしは、翌日おちついてからでかまわないかのぉ」
「では、翌日の昼過ぎの勇者殿の王への謁見が終わってからとさせていただきます。
何か聞きたいこととかありますか？」
「そうさのぉ、わしも神殿での参拝がしたいと思っておるが、どうすればよいかのぉ」
「ここは、神殿の一番奥に当たります。逆にここから奥へ行っていただければ参拝のできるところとなります。ご老人に関しましては、どこへ入っていただいても結構です」
「ありがたいのぉ、では早速行かせてもらいますかのぉ」
「少々お待ちください。先ほどの者を呼びます」

10

「チリン、チリン　」　神官長が、机の上の鈴を左右に振って音を鳴らしました。

「トン、トン」数分後にノックの音がしました。

「入りなさい」神官長の返事で

「失礼します」と神官さんが、扉を開けて中へ入り扉を閉め数歩進み立ち止まりました。

「参拝されるそうなので案内をお願いします」

「はい、わかりました。こちらへどうぞ」

私は、神官長にお辞儀をして神官さんについて杖をつき後を歩きはじめました。

神官さんが扉を開けて部屋から出てその脇へ避け、私に部屋から出るように促し、私が出た後で扉を閉めました。

それから神官さんは、私たちが神官長の部屋へ入るために歩いてきた通路をさらに奥へ歩き始め、私はその後をついて歩きました。

この参拝についての目的は三つあります。

一つ目はこの世界の人種を知ること、二つ目は、肌・髪・目の色を知ること、最後に服装を知ることです。

これについては、ここから出て行くために、そして外の世界で生きていくために必要なことになります。

そういえば先ほど神官長から重要な話を聞きました。勇者の召喚

の日時が決まったなんて。
この参拝のあとでスケジュールを立てないといけないですね。
すべては、この参拝次第になりますが。

前方に扉が見えてきました。扉を開けた神官さんについて中へ入りました。
そこは、大変広い天井のある広場？になっていて、私たちの出てきた横に祭壇がありました。

参拝している人は、広場の八分の一くらいで数百名でしょうか。
来ている人たちは、老若男女？ってとこでしょうか。うん、参考になりますね。
でも、種族は人間だけのようです。信仰は、種族によって違うということかしら。
髪の色は、カラフルですね。赤、青、緑、黄、白、黒ってとこかな。
目の色は、わかりずらいですね。ブルー、グリーン、レッドって感じかしら？
肌の色は、白、肌色、ピンク、茶、と地球とあまり変わりません。
服装は、フードの人、ドレス、ワンピース、鎧、中世時代の服装って感じです。
私の持っている現代のは使えない、修道服はフード代わりかワンピースにするしかないかな。

神官さんが、広場の中に入り跪きましたので、後をついていき杖を横に置いてまねをして跪き頭を下げました。どうか、私の思うままに行動できますようにと。

参拝後に神官さんの案内で部屋へ戻り、いすに座ってまどろんでいるとノックがあり返事で巫女さんが食事を運んできてセットしてくれました。

食事は、前回と同じですね。
精神的につかれたのでさっさと食べて今晩に向けて昼寝しましょう。
食事後にカートを廊下に出して、横になりました。数分で眠ってしまったようです。

11

くすくす笑う声が聞こえてきます？
夢かなと思いつつ、そろそろ起きてスケジュールを立てないとと思い目を開けると。

”こんにちは”
”・・・”

声？が聞こえてきました。声が聞こえた場所を特定しようにも直接では無く
テレパシーだったのでキョロキョロしてしまいました。
おちついて周りを見れば、窓近くの光の入る場所に金色の妖精さん、その影に
なるところに黒色の妖精さんがかわいい羽根を動かして飛んでいました。

きゃー、かわいい&かっこいい♪
金色の子は、女の子で巻き毛で美少女、黒色の子はきりっとした美少年。
お姉さんはうれしいの一言です。そうそう挨拶。

［こんにちは、黒宮聖です。よろしくね］

”やっぱり見えるんですね。お話できると聞いて楽しみにしていました。
私は、光を扱っています。こっちの影の子は闇を扱います。アクアとヴェントから
名前をつけてもらったと聞きました。私たちもお願いできませんか”

［もちろんＯＫよ。ちょっと待ってね］　う～ん、悩みますね。

［光の子がリュミで闇の子がオプスでどう？］　気に入ってもらえると嬉しいな。

”私がリュミですね。ありがとうございます。ほらオプスも何か言ったら”

”どうもありがとう”

リュミは笑顔で返事、かわいすぎます。オプスは照れているのかな。クールでかっこいいってタイプ。あっそうだ頼みごとがあったんだ。

［ねぇ、明日の夜から明け方にかけて、ここから出て行きたいんだけど手伝ってもらえないかな？誰にも知られたくないんだけど］

”いいですよ。夜ならオプスの管轄ですね。私はフォローに回りますね”

”わかりました。人から見えないようにします。行動する時に声かけて下さい”

［ここの世界のことまったくわからない状態でここから出て行くけど、皆一緒にいてくれるかな。いろいろ教えてもらいたいんだけど］

不安だらけだけど、ここにいる方が嫌な感じしてます。

”いいですよ、というより私たちからくっついていきますよ。たぶん断られても付いていきますよ～。聖といると楽しそうですもの”

”同感”

［ありがとうね。今後ともよろしく～。じゃあ、いろいろ聞いていいかな？］

”いいですよ～”

”はい”

［まず、この建物の周辺って何があるの？外へ出ていないからわからないのよ。危険な生き物っているのかな？］

”そうですね。神殿のまわりは人間が住む町になっています。そのまわりは、森と山と砂漠ですね。生き物については、魔物という生き物が人間を襲います。強さは、いろいろです。聖だけなら私たちでなんとでもなりますよ”

”人間の町だけど違う人種もいるから”

［そうなんだ、町はちょっと楽しみ。魔物については当てにさせてもらうね。私、戦えないからごめん。魔法覚えて自分の身くらい守れるよう頑張るね。で、ここから出れたら魔法も教えてね］

”すみません。魔法は、教えられるのと教えられないのがあります。自然を利用してというのは、私たちの力を利用するから大丈夫ですが、聖が持っている魔力は、魔術になりますから人間の魔術師でないと駄目ではないかと思います”

”・・・”

［そうなんだ、じゃあ、自然を利用してのは教えてね］

”わかりました”

「トントン」とノックの音が聞こえました。
いつの間にか夕食の時間になっていたようです。

「どうぞ」の声でいつもの巫女さんが、入ってきて食事の用意をして退出しました。

リュミとオプスの二人は、
””またね～”” と消えました。どこへ行ったのでしょうね。

食事は、野菜スープとパンのお馴染みの食事ですね。
野菜スープと思っているけど、実際はどうでしょう。
まぁ、いつも通り食事をして、カートを廊下に出して置きました。

さて、いまさらですが、日本は１２月でしたが、こちらの季節はよくわかりません。
ただ、すごしやすい温度です。日本でいうと3月後半とか１１月中旬くらいかな。
服装も変装が、室内だったので冬用でなくて丁度良かったって感じです。

でも、シャワーかお風呂が恋しいです。たった一日、されど一日です！
女の子には必需品です。アクアにお願いすればなんとかなるかしら？
今回もあきらめて、昼に水の入った洗面器とタオルを準備してもら

えたようなので
顔と体を拭きましょう。変装のおかげでとっても大変。ふぅ。
することもないので明日の夜の脱出にむけて寝ましょう。
おやすみなさい。

一部の人間を除いて寝静まった深夜、いつもの巫女さんが洗面器とタオルを持って
部屋へ入ってきました。昨夜と違うことは、用が終わっても部屋から出ずに老人の
寝ているベットに歩み寄りました。そして、懐からナイフを取り出し老人に向かって
力いっぱい振り下ろしました。

12

”聖、起きろ！いいかげん起きんか！しばくぞ！
どうか、私の思うままに行動できますようにってなんだ！”
はい？私の昨日の願い事って誰かに言ったっけ？
夢だ。おやすみなさい。

”夢じゃない、おやすみなさいでもない。ばかもん。いい加減にせんか！起きろ！
違う世界に来たんだから危機感もたんか！”
ほぇ？なんで知ってるんですか？

”この世界で神の次にえらいんだから知ってて当然だ！
そんなことより殺気に気づけ！殺されかけてたんだぞ”
なんの冗談？この世界で知り合いいないし、まともに話した人もいないから…。
ありえないでしょう。

”ったく、目を開けて見てみろ。わかるから”
しぶしぶ目を開けて周りを見ると、ベットのすぐそばで倒れている巫女さん。
と、真っ白な狼。うわっ、かっこいい。
セントバーナードなみの大きさで尾がふさふさ、もふもふしたい。
切ってちょうだい。
ん、狼さんの顔色が変になった？

”ひ・じ・り”
あらら、黒いオーラも出てきましたね。

［どちらさまですか？］

”巫女じゃなくてこっちかよ、私はこの世界の神使だ。
神の眷族で神意を代行している。結構自由な立場だ。
妖精たちが騒いでいたから様子を見にきたらこれだ。全くおまえは！
”

［へっ？妖精たち］

周りを見渡すとヴェント、アクア、リュミ、オプスとみんながスミにいました。

［あれっ？皆どうしたの］

”聖、だ・か・ら、おまえの危険を感じて皆が起こそうとしたけど起きず、
助けを呼んだから私が来たんだろ”

［ええっ、みんなありがとう］

””” 無事で良かった”””

”おまえたちまで聖のペースになるな。さっさとここから出るぞ。
他の刺客が来たらどうするんだ。聖、動きやすいかっこうにしろ”

［了解、巫女さんはどうするの］

”記憶操作して部屋へ戻す。聖を殺して川へ捨てたとな”
言い終わるや否や巫女さんが消えました。

［うわ～っ、老人殺されたんだ］

なら、修道女バージョンでフードっぽく着こなせばいいか。
やっと老人バージョンの背中を曲げる機器外せる。

［はい、皆後ろ向いててね］
ちゃっちゃと服を脱いで機器を外し、修道女に服装に着替えました。
機器は分解すれば１０～３０ｃｍの棒が１０本前後アルミで軽いから何かに使える
こともあるかもと袋に入れました。

［あっ、魔方陣を写メに撮りたいから祭壇のあった所へ連れて行って］

”ちょっと待て、誰か人がいないか確認してこい”

”僕が行ってきます。少々お待ちください”

”””ヴェントよろしく”””
とヴェントが消えました。

数分でヴェントが、戻ってきました。
”大丈夫です。誰もいません”

”じゃあ、皆で転移するぞ。聖は、忘れ物ないか？
もうここへは戻らないからな”

［大丈夫、袋も貴重品も持ったから］

［じゃあ、行くぞ］
言葉が終わると違う場所にいました。

暗くてわからない場所です。

［リュミ、少し光をお願い］

”わかりました。光を少々出します”

光のおかげで祭壇のあった場所だと確認できました。

魔方陣を確認して携帯電話で写真撮影を行いました。

”聖、もういいな。ここから出るぞ”

［いいですよ。お願いします］

13

どこへ行くんだろうと思うまもなく森の中へ。
建物の中と違って二つの月の光で明るく感じます。月二つ、ＴＨＥ異世界。
色が、ピンクとオレンジって・・・。

現在地は、森の中のちょっと開けたところ。

“さて、聖、状況は把握できてるか？”

［命が狙われているからここへ逃げ出したってことよね］

“そうだ”

［なぜ狙われるのかわからないけど］

“はぁ、言われてただろ、召喚に失敗したのは初めてだって。失敗を見えるところに置いておかないだろう。明日には勇者が来るんだぞ”

［人の命を何だと思っているのかな。皆のおかげで助かったけど。狼さんには一番お世話になり、ありがとうございました］

“狼さんか、聖、名前くれ”

白だからブランカ。確か狼王ロボの奥さんも白い狼でブランカって…。
スペイン語の白って意味だけど考えることは誰も一緒なのかな？

フランス語のブランでどうかな。
［ブランは、どう？］
“ブラン、いいんじゃないかな。聖、礼を言うぞ”
［ところで私は今後どうすればいいのかな。もともと一般人だから一般人として暮らしていきたい。でも、ここの世界について全くわからないんだけど］
“うむ、私からの提案は二つある。私が知っている人間が二人いる。
森に一人で住んでいる老婆と、ある貴族の老人なんだが、どちらも一筋縄では
いかない相手でもある。性根は善良だから問題はない。老婆は、魔術師で老人は、
魔術騎士だ。聖、どちらかを紹介してやる。どちらがいいか考えろ”
［へっ、展開はやっ。ブランに知り合いがいるなんて思わなかった。
やっぱり同性がいいから老婆かな。貴族だとちょっとマナーに不安があるし］
“わかった。明日、連れて行ってやる。今日のところは、ここに泊まれ。
適当に準備してやる。土のと火の出て来い”
““ブラン様、ここにおります””
赤い妖精さんと黄色い妖精さんが突然現れました。

“聖、こいつらにも名前付けてやれ。赤いのが火で黄が大地だ”

““お願いします””

あらあら赤い妖精さんはきつめの美少女で黄色い妖精さんは明るい美少年。

［火の妖精さんがフラムで大地の妖精さんはティエラはどうかしら。私は聖です。よろしくね］

“フラムね、気に入りましたわ。ありがとう”　“ティエラ、うん、ありがとう”

二人と挨拶を交わしている間にブランは、木と木の枝を使って簡易な家を作り終えていました。なんと言うか不思議です。

場所は、木の上でぱっと見ただけではわかりません。今は、ブランが移動させくれて家の中です。ベットっぽいものとローテーブルがあるだけで3～4畳くらいですね。

“聖、ひとまず寝ろ、まだ足らないだろう”

ブランの言葉と目まぐるしい展開で疲れたのか眠気が一気にきました。

［そうさせてもらうね。これってこのまま寝ていいの］

“ああ、干草をシーツに包んだだけだが寝れるだろう。皆ここにいるから安心して寝ろ”

［ありがとう、おやすみなさい］ベットに寝転ぶと数分で眠りにつきました。
その後、皆の話については後で教えてもらうまで知りませんでした。

“さて、お前たちどうするのだ？
明日、勇者が現れるだろう。どちらと行動をともにするのだ？
まだ、現れていないものと比べるのは酷だが、選ばなければならない。
明日の勇者も異世界からの召喚だからこの世界の人間よりかなり魔力は多い。
されどお前たちが付けば敵はない。つまり世界最強だ。それぞれ分かれても良い。
どうするか、決めろ”

14

“ブラン様は、いかがされるのでしょうか”
ヴェントが尋ねました。

“私は、聖が気に入った、落ち着くまで付いていくさ。
勇者については神がなんとかするだろう”

“私も聖と一緒にいます。会ったばかりの時にそう伝えました”
“同感”
リュミとオプス。

“”僕(ぼく)も聖がいいです””
ヴェントとアクア。

“わたくしもよくてよ”
“聖いいよねぇ”
フラムとティエラ。

“全員、聖か、まぁしょうがないか。ヴェント、聖の朝食を確保してくれ。
他の皆は解散と”

気持ち良さそうに眠っている聖を見ながら妖精たちはその場から消えました。
その場に残ったブランは、聖のベットの隣で横になりました。

葉と葉の間から太陽の光が射しこみ、聖の顔に当たるようになりました。

「うん？」眩しさに目を開けました。
ここどこだっけ？明るさから昼に近い気もするけど。

「聖、起きたのか」
横にいたブランが声をかけました。

「あれ、狼さん？」

「おい、名前忘れたのか。聖がつけたんだぞ！」

「ごめん、ブランだっ。おはようございます。皆は？」

「呼べば現れるぞ。ヴェントは食糧調達してるからな」

「ほぇ、ありがとう。アクア、リュミ、オプス、フラム、ティエラ、おはよう」

「「「「「「おはようございます」」」」」」
と皆が現れました。

「おはようございます」
木の実と果物を持ったヴェントも現れました。

「これらは、皮をむいて食べて下さい。足りなかったら言ってくださいね」

「ヴェント、ありがとう。早速いただきます」

見たことのない果物です。ちょっと楽しみ。まず、ショッキングピンクのみかん？
味は、甘くておいしい。酸味がちょっとあっていちごっぽいかな。
次は、青いもも？味は、キューイフルーツって感じかな。
他のも色はすごいけど味は、普通にフルーツでおいしかったです。

食べ終わっておちついたらブランが「そろそろ行くぞ」と。

「了解。準備は・・・、ないから問題ないですね。下におりたら顔洗いたいです」

川べりに移動してもらったので顔を洗って準備ＯＫ。
ここから近いということでブランと歩いていくことになりました。

「さて、設定をどうするか。私もこのままではマズイしな」
と、白い狼のブランが茶色い小柄な犬に変わりました。

「へっ？ブラン紹介してくれるんじゃなかったの？」

「知ってるだけだ。この姿でしばらく暮したことがある。
聖の設定は、遠い島国から来た娘だな。事実だから苦労せずに話できるだろうし、
異世界も遠いからな。問題は、目と髪の色だな。黒眼、黒髪は勇者だ。
黒髪だけなら島国の人間にいるから問題ない。問題は目だな。
今している方法でしばらくもたせろ。魔術を覚えたら問題なくなるだろう」

「了解。他はいいの？」

「まぁ、その場で考えてくれ」

「そろそろ、言葉での会話は止めるぞ。皆も、人から見えないようにしろ」

「「「「「「はーい」」」」」」

数百メートル先にレンガ造りの家が見えてきました。
家に到着したらノックをしました。と同時にブランが「わんわん」と吠えました。

家の中で玄関に近づく音が聞こえてきて、扉が開きました。

１４（後書き）

年末年始でしばらく停滞していました。
ゆっくりでも更新していきたいと思っていますのでお願いいたします。

１５　森の魔女

「おや、どなたですか？ナイトの知り合い？」
扉を開けたのは、４０代くらいの女性でした。ブランは老婆っていってたけど？
若草色のワンピース？で茶色の長い髪を紐でくくっていてブルーの瞳の女性です。
ブランってここでは、ナイトと呼ばれているんですね。

「初めまして、聖・黒宮と言います。
島国から出てきましたが、何もわからず、お金もなく、困っていたらこの子に
助けられてこちらに辿り着きました。こちらで働かせていただけませんか？」

「働くといっても何もないところだから、う～ん。ナイトが連れてきたんだし、
一人暮らしだから一緒に生活してもいいかな。生活しながら考えましょう」

「すみません、一般的なこともわかりません。迷惑をかけることになります。
どうかよろしくお願いします」

「そうね、とにかく中へどうぞ」
中に促されてブランと移動しました。室内は、テーブルに暖炉があります。
椅子にかけるように言われ、席に着きました。

「どうぞ、ハーブティよ。お口に合えばいいけど。
私は、グリューネ・ライゼンダーよ。グリーとでも呼んでね」
私の前のカップからペパーミントの香りがします。ペパーミントティみたいです。
なんだかほっとします。早速、いただきましょう。

「おいしい」
あれ？日本で飲んだことのあるペパーミントティよりおいしいです。
違う甘味が、
入っています。なんだろう？

「口に合ったみたいね。良かったわ。次のお茶の時に入れ方教えるわね。
さて、聖さん、あなたは何ができるのかしら？得意なことは何？」

「聖と呼んでください。掃除、洗濯、料理は、たぶん教えてもらえれば普通に
できると思います。得意は、計算と計算に関する資料つくりです。
ただし、こちらの字と同じかわかりません。
あと、魔術は使えません。習ったことがありませんので」

「じゃあ、聖と呼ばせてもらうわね。魔術を周りの人誰も使えなかったの？
魔力はあるのにねぇ。計算が得意っていうのはすごいわ。
薬を作って売っているからそこを手伝ってもらいましょう。
ここでは、魔法が使えないと料理ができないから文字と一緒に教えるわね。
まずは、飲み終わったら部屋へ案内するわね。掃除をしてないから
掃除してね。
今日は、それが終わったらこの家のまわりを散歩してみたらどう？」

「はい、グリーさん。すみませんが、掃除道具の場所を教えてもらえますか」
すぐに動けるようにハーブティを飲みきりました。

「掃除道具は、確か、いまから案内する部屋にあったと思うわ。じゃあ、行きましょうか」
とグリーさんが立ち上がりましたので私も立ち上がりました。

玄関から一番奥にある角を曲がると階段があり、二階に上がりました。

16

扉を開けると埃がもわっと・・・、しばらく開けてもいなかった部屋のようです。

「じゃあ、お願いね。そうそう、何か質問あるかしら？」

「グリーさん、水はどこでしょうか？」やっぱり拭き掃除もしたいです。

「外に井戸があるからそれを使ってね」

「はい、わかりました。使わせていただきます」

「お昼になったら呼びに来るから頑張って～」

とグリーさんは下へ降りていきました。

さてと頑張りましょうか。

部屋については、机と椅子にベットとタンス？っぽいものがあり、すべてに

シーツがかけてあります。

窓があって日が射し込んで明るい部屋ですね。窓を開けて、さぁお掃除と。

お掃除の基本の上からを実施してます。ほこりがすごいんですけど～。

ちょっとギブ！

“ヴェントいる？”

“何ですか？”

“ごめん、掃除手伝って。で、このほこり、全部外へ出して欲しいけどできる？”

“できますよ～。じゃあ、こんな感じでどうですか？”

“おおっ、さすが。ありがとう”ほこりがあっというまに窓から出て行きました。

次は、ものに被せてあったシーツをお洗濯しましょう。外に持って出ましょう。
大きいのが三枚ですか。ちょっと辛いかな？洗剤があるといいのですが。

シーツを持って外へ出て裏へ回ったらありましたよ。
井戸、タライ？、洗剤。それに天然の木を利用して吊るしてある物干しざお。
では、タライに水とシーツ&洗剤を入れてお洗濯と。家だったら洗濯機なんですが、
ここではありませんのでちょっと足を洗ってタライの中で足ふみです。
手でやってもきりがありませんので、どこかで見たやり方です。寒くないから快適に
できますね。すすぎも終えてやれやれです。さて、どうやって絞りましょう。
アクアにお手伝いしてもらいましょうか。いいのかなぁと自分に相談。
まぁ、魔術を覚えるまで、しょうがないかってことで。

“アクアお手伝いお願いできるかな？”

“ひじり、なにすればいいの？”

“このシーツの水をちょっと飛ばして欲しいんだけど、できる？”

“できるよ。ちょっとまって。どう”

“みんなすご～い。簡単な説明しかしてなくてもできちゃうんだ。アクア、ありがとうね”

“ヴェント、干すの手伝って”

“はい、一緒にそこにかければいいんですか？”

“そうなの、端を持つから風で一緒にかけてね。お願い”

“せ～の”あらら、ほとんど何もしていないのに飛んでった。まぁ、いいっか。

“ヴェント、後2枚もお願い。せ～の”以下同文と言いたくなるのもわかってもらえると思います。

これで大仕事の一部が終わったけれども達成感がない。なんだかずるした気分。

さて、ちょっと確認したいことあったのよねぇ。

“ブラン、いる？”

“聖、どうした？”あらら、いつのまにか足元にナイトの姿でい

ました。

“私ってこの世界の言葉話せるけど、文字読めるの？グリーさんには、読めない
と話してしまったけど”

“ああ、読めるし、理解できるようになってるぞ”
うわぁ、私ってチートだったんですね。じゃ、魔力も強く、妖精さんも付いてて
無敵ってこと？まぁ、魔術使えたらだけど。これが問題かな。

「聖、ご飯よ～」

「は～い、今行きます」

食事だ。この世界の食事がやっとわかる。
神殿では、スープとパンだけだった。確かに殺す相手に贅沢な食事はないよね。

テーブルには、おいしそうなパン、サラダ、シチューっぽいものが。
嬉しい、いままでと似たような食事です。

「じゃ、食べましょうか」

「はい、いただきます」と手を合わせてからいただきました。
満足です。基本的に同じです。あっという間に食べ終わりました。

手を合わせて「ごちそうさまでした」と。

見慣れない挨拶にあぜんとしていたグリーも食べ終わり、話かけられました。

「さて、聖、聞きたいことがあるんだけど」

「なんでしょうか？」

「聖が掃除をはじめてから数回、魔法の気配がしていたけど何をしたのかしら？」

17

へっ、やばっ。
“ブランどうしよう”ブランは知らん顔してます。
“ごまかした方がいいのか、話していいかぐらい教えてよ”
“好きにしていいぞぉ”あっ、そう。
「よくわからないけど、掃除している時にこうして欲しいとお願いすると
現実になっていて、よくわからないのですけれども、なんでしょうか？」
てへっ、ごまかしちゃった。
「そうなの？精霊が願いを聞いてくれているのね。ありえないわねぇ。
かなり気に入られているってことね」
「そうなんですか？普通は、どうなんですか？精霊は見えるのですか？」
ふ～ん、精霊って言うのね。私、妖精さんって言ってるけど。
「見えると聞いたことは、ないわね。気に入られること自体聞いたこと
ないわよ。魔法を感じること自体この世界で数人よ。精霊が魔法で、私達が
使うのは魔術。そういえば教える約束よね。少し説明しましょう」
魔法の感知が世界数人でそこに入るグリーさんって？聞いちゃえ。

「お願いします。ところで魔法が、感知できるグリーさんって何者ですか？」

「私？森の魔女と呼ばれてるわね。この家周辺は、結界があるから誰も入る
ことはできないのよ。聖は、ナイトと一緒だから入れたのよ。なぜか、ナイト
は、結界が関係ないのよね。精霊に保護されているみたいね。そのナイトが、
聖を連れてきたのだから信用しているって訳よ。この話は、これぐらいで。

さて改めて、自然の力を借りるのが、精霊で魔法。自分の魔力を使うのは、
魔術。目を閉じて自分の体から魔力を感じ取れないか確認してごらんなさい。
中心に何か感じ取れるものがあるはずだから」

言われたまま目を閉じて、自分の体の足から順に神経を集中させて巡って
みました。心臓付近で何かもあっとしたものを感じます。それにカバーが付い
てる？なんでカバー？

“ブラン、魔力っぽいものにカバー付いてるけど何これ？”

“ああ、聖の魔力が多くてもれると困るからだろう。無いと魔術師にすぐ
ばれるぞ”

“ええっ、じゃあどうやって使うのよ？”

“一般の魔術師レベルまで一部解除するできるように訓練しろ。全開はするなよ”

“そんなぁ、初心者なのに無茶言わないでよ”

“おいおい、カバーを感知できるんだから簡単だろう。カバーがわかるなら小さい穴を開ける感覚でいいんじゃないか？”なんで疑問形なんだよ～。簡単に言ってくれますねぇ。

再度、カバーに集中して蛇口できろ～と。あっ、できた。ちょっとひねると、見えないけど何か出ているのはわかります。量を少なめにして終了。チート万歳と言っておきましょう。

「グリーさん、何かあるのがわかりました」

「優秀ね。では、次のステップね。何をするかを的確にすることで発動できるのよ。的確にするために言葉に出す人が多いわね。光よ、灯れとか。料理の時に火よ点けとかね。魔物相手だとファイヤーボールと火の塊をぶつけるとか。別に無詠唱でも問題はないのよ。ただ、宮廷魔術師レベルになるけど。なんだか、聖はできそうな気がするのよね。こちらで教えるつもりよ。これは、夜になってからにしましょう。私は、薬草を取りに森に入るから、聖は掃除の

続きね。
夕食の準備は、一緒にしましょう。洗い物はお願いね」
とグリーさんは、立ち上がりました。

「はい、わかりました」私も立ち上ると、グリーさんは部屋を出て行きました。
食器をまとめて井戸で洗ってそのまま自然乾燥で。

部屋の掃除の続きしましょう。ほこりを飛ばしただけですから、拭き掃除して
掃き掃除ですね。そうそう最初にお布団を干さなきゃ。シーツが乾いているから
取り込んでからですね。ヴェントに布団を干すのとアクアに水交換を頼んだから
楽してお掃除終わりました。タンス？じゃなくてチェストだ。名前思い出した。
チェストに荷物を入れて、最後に布団の取り込み。

“ヴェント、ごめん、布団ここにお願い”と窓を全開しました。
ふわりと布団が戻ってきました。妖精さんにフルに手伝ってもらいました。

“ヴェント、アクア、お手伝いありがとう。すごく助かったわ”

忘れてたけど昨日まで来ていた老人服と下着の洗濯すませましょう。
乾燥は、アクアにお願いするのが一番ですね。だって干すのはマズイですもの。

“ねぇ、みんな出てこない？用は済んだからお散歩に行かない？”

“““““行く（行きます）”””””
やっぱり姿が見えるといいですね！皆かわいいんですもの。癒されます。

外へ出て、皆でぶらぶらと小道を森へ入りました。
数分後、ガサガサと奥から木をかき分ける音が聞こえてきました。
森から出てきたのは、うさぎさん？。近づいてきたので屈んで待ちましょう。
触れるとうれしいなぁと軽く思っていました。

が、うさぎモドキは、四本足から立ち上って口を開けました。
牙！顔うさぎじゃない。怖っ。えっ、どうすればいいの？
あっという間に近づいてきて飛びかかられました。

18

びっくりして目を閉じると、ゴン・ベチャッと効果音？
目を開けると何かにぶつかったうさぎもどき。完全に目を回しているようです。
あっ、ひょっとして結界？

“ブラン、ここに結界あるの？”
“よく見てみろ。聖もわかるから”
ん、透明な壁ですね。魔力の蛇口をもう少し開いた方がいいですね。見やすくなりましたから。

“ブラン、このうさぎもどきって食べれるの？”
“質問は、そっちかい”
“お肉食べたいもん、この世界でまだ一度も食べてないし”
“食べれるぞ”
“やったぁ”

問題は、どうやって拘束するかよね。本当は、ここでさばければいいけど、
やったことない。

「むむむっ」

「聖、何うなっているの？」
あらっ、グリーさんいつの間にここへ？そんなことはどうでもいいけど。

「グリーさん、これどうしたらいいですか？」とうさぎもどきを

指差しました。
「魔物ね。夕食の材料にしましょう。余ったら干し肉ね」
と言うとうさぎもどきの首が魔術で切られ消えました。家に移動したのでしょう。

これは、私もできないと困ることなので最初に覚えないとだめですね。
いま使われた魔術に関しては、蛇口を大きくしたせいか感知できたような気がします。

「今の魔物っておいしいのですか？」
「おいしいわよ。私や聖にとっては、あまり強くないし食料に困ったら確保よ。
ランクの低い冒険者や一般の人にはちょっと荷が重いとは思うけどね」

「そうなんですか。ところで魔物の首を斬ったのと転移は、どんな魔術になるのですか」

「斬る方法としては、硬度のあるナイフを想定して行うということで、転移は移動先の場所を決めて動かすという行為ね。わかる場所以外は、無理ね」

「そうですか。ありがとうございます。今から家に戻るのですか？そうなら一緒に戻ります。何かできることがあったらしますから言って下さい」

「じゃあ、一緒に戻りましょう。明日は、一緒に森へ行って薬草取りね」

「はい」と二人と一匹でUターンしました。

“みんな、ごめんね。これで散歩終了ね。また、散歩しましょうね”

““““““はい”””””

家に戻って井戸へいくと野菜っぽいものにうさぎもどきに薬草っぽいものが、置いてありました。散歩前には、無かった気がしますのでその後ですね。

グリーさんに必要なものを聞いて乾いた食器とともに運びましょう。

炊事場は、特に変わったこともないような気がします。

「メニューは何ですか？何をしましょうか？」

「じゃあ、これとこれを切ってここへ入れてね。夕食は肉入りスープがメイン

であとはパンとサラダね」

「はい、これから切りますね。大きさは、全部一口サイズでいいですか？」

「それでいいわよ。よろしく」

聞くと同時に包丁を持って皮むいて乱切りにしました。なべに入れて終了。

グリーさんから肉を受け取り、一口サイズに切ってなべに入れ、指示待ちで
待機中と。

「さて、これを煮込んで終了と。しばらくしたらできるわよ」

「グリーさん、火はどうやって点けるんですか？」
「聖、やってみない？これの上で火が点いたイメージで魔力を放出ね。
火力は中火よ」

スパルタ？これが普通なんでしょうか？最初から難度が高いような気も・・・。
やるしかないけど、まず魔力の蛇口確認ＯＫ。イメージは問題無し。
火を点けることができるなら弱火でもとろ火でもできそうな気がします。

問題は、魔力の放出！どんなイメージを持てばいいかぁ。
どっかの誰かみたい指パッチンも両手を合わせるのも嫌だし・・・、
どっかの
魔女さんみたいに口を動かしてっていうのも嫌っ。
グリーさんは、何もしてなかったですね。
慣れるまでタイミングを計るのに必要だから指パッチンでいいっか。

それじゃあ、聖行きます、魔力の放出と中火のイメージを浮かべてパチッと。
おお～っ、点きました。さすがチート！

「やっぱりできるのね」ふふふっ。
？、なんだかグリーさんが怖いです。

１８（後書き）

二種類のアニメを登場させてみました（＾＾；）

19　海　登場

＜聖が夕食の準備をしていたころの神殿では＞

「お待ちしておりました、勇者殿。」

はぁ？ふ～ん。
結構怒っているんだよね。
さっき、聖が黒い穴へ落ちたの見てたからね。
ドアが開いて出てくるのを待っていたのに、落ちたのを見て急いで駆けつけても
そこは消えていた。

その後に、俺も落ちた。途中下車も含んでここに来た。
異世界トリップで魔王を倒してくれってことだろう。

まずは、聖の状況確認だね。
「私の祖父が、こちらに来ているはずです。すぐに会わせてください。」
でなきゃ暴れます、ってね。

？、急にざわざわしてきましたね。祖父って言葉に反応がありました。
聖に何かしたってことだよな。どんな返事がくるのやら。

「勇者殿、そのような方は、来られていませんが。」
なぁ～んだ、ただごまかすんだ。できる訳ないのにさ。
知っていて聞いている相手に無謀だね。どうしてやろう！

「そちらの隅に祖父の持ち物が落ちているようですが、なぜでしょうね。」
ふん、俺の持ち物を落としてみたが、どう反応するかだな。
「さて、これはなんでしょうか？」
携帯ストラップさ、この世界になさそうなものを選んだからな。
「祖父の宝物です。このような物がありますのに祖父がいないなんて。」
泣きまねこみで、しゃがみこんでみました♪
もちろん俺のストラップは取り戻しました。
「確認してみますのでしばらくお時間をお願いします。」
妥当な返答ではあるが、聖の気配がないからいないわな。
「こちらの石に触れてください。」
これが、勇者かどうか確認するものか、とんでもないもの使ってるな。
ちなみに俺が触っても光らないぜ。薄いけどシリコンの手袋しているからな。
光ってもらわないと困るから強制的に光ってもらうぜ。
「申し訳ありませんが、王がお待ちですので、謁見の間までご足労願います。」
はぁ、その尊敬語変だろう。ご足労願えませんか、が正しい。
尊敬語に命令つけてどうしたいんだ。ただ丁寧に命令したいだけか。
&王がお待ちね。これも俺から言わせれば変だ。俺にとって王は、ただの人。
それも迷惑かけられたから一般人以下。

さて、どうしようかな。ここに聖がいなしなぁ。
王の面でも見に行くとするか。対応に責任はとらないがな。
黙ったまま、謁見の間までついていった。話するのも面倒。
「ひざを突いて頭を下げてください。」
嫌だって言いたいな。えらそーな迷惑な一般人以下に頭下げたくない。
今日のところは揉め事を起こす予定ではないから下げるけどね。
王が出て来て、椅子にかけ
「勇者よ、よく来た。面をあげよ。」
むりやり呼んでそのセリフかよ。テメェ覚えてろ。
顔を上げて王を見ると、ただのデブ、威厳もない。やっぱりな。
「そのほうには、魔王を倒してもらう。」
決定事項ねぇ。絶対やらねぇ。テメェの利益になることはとくになっ。
「無理です。私にはできません。私の祖父を返してください。家に帰してください。」
「魔王を倒したら祖父と家に帰してやろう。」
よく言うよ。普通はお願いだろうが。
あほらしくなってきた。テメェをあてにするわけないだろう。
「部屋でゆっくり休んでくれ。部屋へ案内しろ。」
最後までその調子か。

部屋へ案内され、侍女と騎士が扉付近に立ったまま、見張りかな？
まぁ、いいけど。深夜にはお暇させてもらうからさ。

20

改めて、自己紹介。

俺は、黒宮（くろみや）　海（かい）。

聖とは、従姉弟って関係で恋人（自称）、絶対、落とす。

聖は、黒髪、黒い瞳で純日本人だけど、俺は、茶髪でブルーの瞳のハーフ。

親父が、フランス人だからしかたがない。

年は、２４歳で大学院生。聖との年の差は気にしてない。

聖、至上主義。よろしく。

特技、スポーツすべて、武術もオールマイティ。

別にスポーツ馬鹿でもないぜ、成績もトップさ。

見た目が、王子様タイプだから期待を裏切らない程度に努力した結果。

まぁ、聖のためともいう。

聖の参加するクリスマスパーティに潜り込むためゴスロリの女装中、

そのまま召喚されたから女言葉使った。変態ではないからな。

黒髪のロングで上の方で二つちょんぼ、それと黒のコンタクトとね。

見た目は、自分でいうのもなんだけど似合う、少々？背が高いが。

１８０ｃｍは、少々とは言わないかもしれんけど。

パーティ会場で聖を待っても出てこないもんで控え室の前へ行ったところ

召喚の真っ只中。我ながら良いタイミングと自画自賛。
見ていなければ探しようがなかった。今だから言えるが本当に良かった。
その瞬間は、助けれず落ち込んだ。が、数時間後、俺の前に黒い穴。迷わずに飛び込ませていただきました。

聖を助けるためには、その世界のことをどうしても知りたいと願っていたら
神が、呼んでくれた。そのことは、感謝している。

「誰だ。」
「神だ。」お約束か？

「そうか、この召喚された世界のことがわかるようにしてくれ。言葉・知識・
常識・歴史は事実でな。」
「それを知ってどうする。」

「聖と帰るに決まっているだろ。ただ、聖が、お人よしだからな。」
お人よしとくればどうなるかわかるだろう、弱いものを助けるわな。結果、弱者に良い世界に変わっていくと。神には、いいことなんじゃないか？

「そうなるな。じゃ、その力をやろう。」話してないことも通じているようだな。

「ところで魔王って悪か？」

「なぜじゃ。」

「弱いものいじめしていたら倒すはめになる。」

「会って判断せい。」

「了解。」

「サービスで魔法も使えるようにしてやろう。」

光が飛んできて俺を包んだ。

へぇ、今から行く国は、弱小国か、召喚できるから侵略されていないだけね。

勇者って黒髪、黒い瞳って俺違うじゃん。なんで召喚できるんだ？

おおっ、知識がちゃんとあるじゃん。神さますげぇ。

で、この世界で最強が、聖、俺、魔王の順か。

確かに他の国の王さん達には、脅威だわなっ。

「召喚は、勇者の身内だからだろう。」

じゃあ、聖は勇者ってことじゃん。ああ、ごまかせたんだな。

老人でシリコンゴムの手袋してたもんな。確か、白髪でブルーの瞳だったな。

「いいかげんだな。召喚の魔方陣は、壊すよ。いいよな。」

今後も迷惑かけられる人がいると気の毒だしな。

「かまわん。」

「じゃ、行くわ、よろしく。」

「適当に頼むわ。」

「了解。」

と再度黒い穴に落ちた。おい、転移させろよ。落とすな～。

21

扉付近の侍女と騎士の二人は、相変わらず移動する気配なしと。

侍女については、魔力が多少ある、スパイも兼ねているのか。

騎士は、魔力はあまりないが、動きに無駄がない。隊長クラスとみえる。

力入っているというか、勇者相手じゃ当然ともいえるわな。

ふぁあ、眠っ。寝ちゃえ、深夜に起きなきゃいけないし。

その前に夕食に起こしてくれるだろう。

ベットへダイブ、立っている二人は気にしてもしかたがないし。

ボストンバッグは、鍵をかけて罠を仕掛けておこう。

魔術は、認識できる宮廷魔術師がいるだろうからダメで魔法か。

触ったら火傷するようにしておこうかな。

じゃ、おやすみなさい。

「勇者殿、勇者殿、お夕食です。起きて下さい。」

へっ、勇者って誰？母さん変な起こし方するなよ？

母さん、声だけ若返った？

ん？俺だ。家じゃないじゃん。やばっ、何も言ってないよな。

「はい？わかりました。どうすればいいですか？」

「今日は、こちらに用意させていただきます。こちらでお食べ下さい。」

侍女さんが、てきぱきと準備して、俺は席で待つことに。

待つこと数分。

「お待たせいたしました。どうぞ召し上がりください。」

「いただきます。」と挨拶して完食。

こちらの食べ物も元の世界と基本は、変わらないから気にせずに食べれた。

肉について、この国では、ほとんどが飼育ではなくて魔物だけどね。

まぁ、おいしくいただけました。知識があると不安がなくなるねぇ。

「ごちそうさまでした。」

再度、おやすみなさい。ベッドへ移動。じゃ。

＜深夜遅く、一般的に人が寝静まったある時間＞

「ふぁあ。」よく寝た。周りをみても誰もいないもよう。

気配を探ると扉の外に二人立っていて他はいないようだ。

もうここへは戻ってこない。城に用はない。神殿にはある。

ここは、魔術を使うか、魔法で形跡無しで消えたほうがいいか、どうするか。

魔法でいいか。魔方陣消しに行くんだし、知られる必要もないな。

ボストンバック持って、祭壇の前へ魔法で転移。

さて、まずは問題の石、最初に見て驚いた。
聖も気づかなかったのか。気づけば何とかしただろう。
とんでもないものを使っている石。
そら、見えるやつなら誰もがそう思うだろう。
鎖に巻かれた精霊が中にいるんだぜ。
ご丁寧に何重もの結界つき。
この国の繁栄のための犠牲か。精霊を犠牲にするのは違うだろう。
ちゃっちゃと解除しよう。解除命令一言で終わっちまった。
これくらいは、魔王でも簡単にできそうだけどな。
同時に魔方陣も消えた。やっぱり精霊がらみか。
“主様、助けていただきありがとうございます。”
ふわふわ精霊が近づいてきた。
姿は確認できないが、光の玉状態で確認可能と。色は、紫。
“どういたしまして。ここから出て行くところだが、一緒に行くか？”
“はい、お願いします。”
“悪いが、この国の端の森まで転移させてくれないか？魔術だと追跡される
可能性があるから。”
”わかりました。では、このまま転移します。”

よし、ひとまず神殿からも脱出成功。

移動させてもらったから楽～。

魔法を使っても苦労していないけど。神様ありがとうと。

22

現在地は、国境近くの薄暗い森。この世界の月のおかげで近くは見える状態。

“さてと、改めて俺の名前は、黒宮海（くろみやかい）。君は？”

“創造のと呼ばれています。名前はありませんので付けてもらえませんか？”

“俺でいいのか？
たぶん他の精霊たちは、聖に名前を付けてもらっていると思うぞ。”

“いえ、私は、海様にお願いします。”

“そうか、じゃあ、クレアルでどうかな。それと海様は止めてくれ。
海でかまわない。”

“それでは、海と呼ばせてもらいます。名前ありがとうございます。
今後も海と一緒に行きますのでお願いします。”

“こちらこそ、よろしく。ところで、クレアルの能力って何？
俺は、神さんから魔法が使えるようにしてもらえたけど使えるのか？”

“私は、創造を司っています。創造したものを使えるようにする力です。

海は、魔法を使えるようにしてもらっているならこれもできると思います。”

“そうか、じゃあ早速、このボストンバックの中を亜空間にして、仕切ろう。
整理整頓しやすくなるし。こういうのもいいのか？”

“大丈夫だと思います。やってみてください。詳細な創造をお願いします。”

よし、魔法始動。どれどれ、へぇ、できてるじゃん。
これでいろいろ入れても問題なしってことだな。

女装、着替えたいからこの世界の服装を出さないといけなかったんだよね。
この魔法助かるな。
一般的な冒険者スタイルでいいか、創造で一式作り出すと。剣も忘れずに。

簡単にできるもんだな。じゃあ、着替えるとするか。
カツラ、ワンピース、靴、コンタクト。一応ボストンバックにかたづけて、
これを着て、すっきりした～。

次は、聖だな。

携帯に創造で機能を追加するか。

まず、この世界でも単純に携帯が使えるようにする。聖限定と。
次に充電を不要とする。

０発信は、聖の周辺を見ることができる機能とする。
他の人からは、石に見えるようにする。
聖の携帯も対象とすると。

はい、魔法始動と。

聖は、どうしてるかな？
０発信スタート、森？透明の壁か、結界あるのか、すげぇ。
ふ～ん、森の魔女か。この国の森で結界と言えばこの人のことになる。
王の命令も無視できるっていうのが気にいった。
聖を頼むって言った方がいいのかな？

魔術の結界は、無効化するようにしようか。魔法の結界は、有効でと。
精霊が、結界をはるってことは、聖のためってことだから無効化はまずい。

追加の魔法始動。

家が見えてきた。二階の部屋か。窓から覗くって感じで映っている。
やっぱり、聖は寝ているか。いろいろな色の光がふわふわしているな。
精霊たちがいるんだな。問題はないけど声聞きたい。

“クレアル、他の精霊と連絡取れるか？一緒にいる聖と連絡が取りたい。”

“はい、連絡でも、こちらに来てもらっても大丈夫ですよ。

海が行くこともできるのでは？”

“俺が行けるのは、わかっているが、まだ森の魔女に知られたくないな、
風の精霊を呼んでくれないだろうか。”

“わかりました。すぐ連絡します。”

“風の、すみませんが、私のところまで来てくれませんか？
主殿が、そちらの主と話がしたいそうです。”

“創造の、ですか？無事で良かったです。すぐに行きます。”
グリーンの光の玉が出現しました。

“初めまして、勇者殿、風の精霊のヴェントです。”

“初めまして、聖の従弟の海です。
この髪と瞳を見てもらえばわかると思いますが、勇者は聖だと思いますよ。
うまく逃げれたようですが。”

“そうですね。ところで何故、僕を呼ばれたのですか？”

“聖と連絡を取りたいのですが、まだ、森の魔女に知られたくないのです。
戻って結界をお願いできませんか？
音が外にもれないようにお願いしたいのですが。”

“いいですよ。創造のの恩人でもありますし。戻ってすぐ結界をはります。

海に関してだけ無効化しておきます。”

“よろしくお願いします。”

一瞬んで光が消えました。数分待ってから携帯電話をかけましょう。

“クレアル、ありがとう。”

“いえ、お役に立てて良かったです。”

携帯で聖を出し、呼び出しスタート。

23　聖サイド

＜森の魔女の家＞

しばらく煮込んでいるとスープができました。
サラダ、パンは、グリーさんが準備を終えています。

「聖、夕食にしましょう。テーブルに運んでね。」

「はい。」

二人で準備ですから早いですね。そのまま二人とも席に着きました。

「じゃ、食べましょう。」
「いただきます。」ひさしぶりのお肉です、おいしいです。

お肉がクリアされたので、いつか魚も食べたいですね。
海とか川は、この世界ではどうなんでしょうか。ちょっと気になります。

「ごちそうさまでした。」お腹いっぱいです、満足です、幸せです。

「グリーさん、さきほどの魔物ですが、壁にぶつかって気を失いましたが、
人も同じなんですか？ナイトは抜けることができると聞きましたが、
私も一度外へ出たら、入れないことになるのですか？」

「そうね、人でも魔物でも普通は、入ってこれないわね。
ただし、私が招待した魔物、人については無条件で入れるわ。
あと、魔術師で私以上の力を持つものは、結界を壊して入るかな。
そんな力のあるのは、魔王を含めて数名ね。
それとありえないけど魔法を使えるものね。
精霊に好かれることはあるけど、本人が使えることはないわね。
聖は、私が招待したことにしてあるのと、精霊に好かれているから
どちらにしても入れるわね。
ナイトも精霊に好かれているから入れると考えているわ。」

「入れると聞いてほっとしました。ありがとうございます。
あと、この国のことがわかる本と魔術についての本がありましたら、
読ませてもらえませんか？
できるだけ易しいのだと助かります。理解できるか不安ですので。」

グリーさんの魔術の実力は、かなりすごいのですね。
上位が、魔王と数名しかいないのですか。

「そうねぇ、確か絵本があったと思うわ。
魔術については、さらっと流すだけで中級、上級中心でいいわよ。
ちなみに、聖がさっき使った魔術は中級よ。
それより字は、読めないんじゃないの？大丈夫？」

「読めないと思っていましたが、よく考えればこちらの言葉を話
している
なら字も大丈夫かなと思っています。」

「わかったわ、後で、本のある場所へ案内するから好きなのを読
んで。
魔術の説明だけど、なんだかいらないような気がするわね。

確かにやれって言ったのは私だけど、あっさりできてしまうとはね。
火を出すことが一工程、そこに点ける、量を調整と二工程入るのよね。
まぁ、良いわ。
魔術を発動することと、二工程の操作を同時に行うことに時間がかかる予定
だったんだけど終わってしまったわね。
後は、本で自習してもらって、わからないことは聞いもらうということで。」

「はい、わかりました。お願いします。」

「さてと、聖には、食器を炊事場に運んでもらって、魔術を使って洗ってね。
これもできると思うから。できなければ教えるわね。
その間に絵本を探してくるわ。」

「はい。」まずは、食器を持って炊事場に移動。

蛇口がない洗い場がありますので、食器を置きました。

魔術で水か、できるのかな？火は、指パッチンって感じだけど水は・・・。
なんで私がブルーになるのかしら？へたれのある人物を思い出すから・・・。
実在しない二次元の彼を思い浮かべるのは、なんなんでしょう。

そんなことは置いておいて、水道の蛇口があるイメージで蛇口をひねりました。
もちろん、その前に魔力の蛇口も確認してからです。

あっさりと水出ましたね。そのまま、食器を濡らして汚れを落としました。
次にポンプに入った洗剤をイメージして押してみました。

できるもんですね。
スポンジは、ありませんので手で洗って、水を出してすすぎ、終了しました。
ついでに、乾燥もと、食器乾燥機を思い浮かべてみました。

居間へ戻ると、すぐにグリーさんも戻ってきました。

24

「魔術の発動は、問題なくできたみたいね。
いまから書庫に案内するわね。ついて来て。」

グリーさんについて二階に上がりました。
私の部屋を通り過ぎて奥の部屋のようです。

中へ入ると小さな図書館のようになっていました。
中央に小さなテーブルと椅子があり、所狭しと棚に本。
テーブルの上に絵本がありました。

「どう？読めそうかしら？」

「はい、題名が読めますので大丈夫です。
用意していただいてありがとうございます。」

「じゃあ、このまま読んでいていいわよ。何か質問あるかしら？」

「あの～、お風呂ってありますか？」

「お風呂？」

「川などで水浴びをするように、家で人が入れる大きなものにお湯を入れて
入ることをお風呂と言っているのですが。」

「湯殿のことね。お城にはあるけど、ここには無いわね。
作ってくれると嬉しいわ。

今日のところは、タオルで拭く程度で我慢してくれないかしら、暗いから川での水浴びは無理ね。」

「じゃあ、明日できるか挑戦してみます。入りたいから頑張ります。」

「やる気ね。楽しみにしてるわね。明日の薬草収集は私だけで行くわね。

聖は、お風呂の製作ね。

じゃあ、私は、部屋へ行くけど。まぁ、適当に切り上げて。」

「はい、お借りします。」

じゃあとグリーさんは部屋から出て行きました。

椅子に座って、絵本を手に取り、読み始めました。

まず、この世界の国の名前です。

召喚を行ったこの国『「ゴルア王国』、商業の盛んな国『トゥルゴバスキ国』、

軍事国家『アーミヤ国』、宗教国家『クハラム国』、魔族の国『ジオ国』。

大きな国はこの五つで、小さな島国が周辺にあることがわかりました。

絵本には、魔族によってこの世界が荒されていたが、ゴルア王国が勇者を

召喚して、その勇者と仲間たちが魔王を倒し、平和がおとずれたとありました。

それなら、今は魔王のせいで平和じゃないからと、私が呼ばれた

のかな？
でも、グリーさんもブランも何も言わないし、行動も起こしていない。

今、私にできることは、グリーさんにこの世界について教えを請うこと。
まずは、一生懸命生きること。それでいいかな。

今日の目標は、国の名前を覚えること。
商業国以外は、何とか覚えれるけど、トゥルゴバスキ国言い難いよ～。

ひとまず、納得できたとこで終了としました。
次は、炊事場へ行ってピッチャーとグラスとボールを借りて部屋へ戻りました。
ピッチャーには水を入れてです。

借りてきたものをテーブルへ置いて、ピッチャーの水を半分ほどボールへ。
ボールの水はお湯へ、ピッチャーの水は冷水へ、指パッチンと魔術を使って。

なんだか魔術を使うということに、多少慣れてきたような気がします。
魔術とか魔法は、小さいころの憧れでしたので、使える自分が嬉しいですね。

お湯が冷めないうちと、体を拭いちゃいました。
喉が渇いた時用に、ピッチャーとグラスをベッドサイドへ。

さあ、寝ましょう。

“皆、お休み～”

“聖、おやすみ”ブランが代表で返事を返してくれたもようです。

＜深夜遅く、一般的に人が寝静まったある時間＞

ブランが立ち、

“創造のが解放されたぞ。”

“本当ですか？良かったです。”ヴェントが嬉しそうに返事しました。

“ブラン様、創造のが呼んでいますので行ってきます。”

“用心して行け。”

“はい。”

すぐにヴェントが戻ってきました。

“ブラン様、結界を依頼されましたので、この部屋に結界を施します。”

部屋全体が、魔法で包まれた感じになりました。

“依頼とは創造のか？”

“いえ、創造のが一緒に行動する、勇者として召喚された海という人です。

聖の従弟だと言っていました。

勇者として召喚されましたが、髪も瞳も勇者の色ではありませんでした。

聖の影響で呼ばれたようです。

森の魔女に気づかれずに、聖と話がしたいそうです。海は、結界を

通れるようにします。”

“では、何らかの方法で連絡を取ってくるということだな。”

“はい、方法は聞いていませんが、そのようです。”

突然、何かの音が鳴り出しました。

25　従弟との会話

“何の音だ？”

“何でしょう。聖の持ち物でしょうか？”

「ん？携帯？あれ？海？」

海専用の着メロの童謡『海』が流れています。携帯どこだっけ？

あったあった、チェストの中だった。

「もしもし、海？どうしたの。」

「はぁ？どうしたのじゃないだろう、勇者殿？」

「なんで知ってるの？と言うか、なんで電話繋がってるのよ。日本の家にいるんでしょ？」

「おい、日本にいたら電話が繋がる訳ないだろう。異世界でも普通は繋がらないが。」後半は、小さい声で聞こえない。

「いやいや、海ならできそう。」

「はぁ？まぁいいや、進まないから。俺も勇者として召喚された。」

「なんで？そんな訳ないでしょう。海、髪も瞳も黒くないじゃん。」

「聖のせいだ。聖と血の繋がりがあるからだろう。」

「でも、海なら勇者じゃないって、殺されかけなかったの。」
「おい、何ぶっそうなこと言っているんだ？まさか、殺されかけたのか？」
「さぁ？」
「この国、腐っているな。焼きいれること決定！
俺さ、聖のクリスマスパーティに行ったから仮装していたぞ。
ロングの黒髪、黒い瞳のゴスロリだったから勇者と思われたみたいだな。」
「へぇ、見たかったな、海のゴスロリ、かわいいんだろうなぁ。」
「気が向いたらな。」
「うん。」
「ところで海、今どこにいるの？」
「国境の森だ。」
「ここに来ないの？」
「一応、元の世界に戻るために行動しようと思っている。
聖の今いる森の魔女のところなら安全だろうから、そこで生活してな。」
「一緒に行かなくていいの？私、強いみたいだけど。」

「ああ、聖の次には強いし、精霊の一人が付いてきてくれるからな。」

「そう、連絡はこの携帯でいつでも取れるの？」

「ああ、お互いへの電話とメールが使える、充電不要だ。あと、０発信でお互いの状況が見れるようになっている。見られて困る時は、精霊に結界を頼め。」

「そう、ありがとう」

「聖、いつも言ってるが、俺以外の男とのつきあいは認めないからな。元の世界に戻ったら、結婚するぞ。」

「はぁ、それまた言ってるの。冗談はいいから。」

「ちょっと待て、本気だからな。いいかげん認めろよ。俺のこと身内としてではなく、男として好きだって。」

「はい、はい、弟です。」まったく、いくつ違うと思っているのよ。４つも下なのに。ぎりぎりありとも思うけど。

海って、性格は良いとこも悪いとこもあって、並み。だけど、頭、運動、顔が極上、身長も高いのでかなりもてる。私だと４つも上で、容姿が釣り合わない、となるとねぇ。離れずにずっとつきあっていける弟が、一番と思う今日この頃ですと。

幼いころから海を見ているから、目が肥えて・・・、彼氏できなかった。
それに昔からずっと好きだと言い続けてる。
嬉しいけど、見えないとこで海のファンから嫌がらせされてたから、勘弁して
欲しいと思うのも本音ですね。

「聖、聞いてる？」

「ごめん、トリップしてた。何？」

「神の眷族に換わって。」

「ブランと？ちょっと待って。」
ブランの耳に携帯を持っていく。

「ブラン様。初めまして、海と言います。聖がお世話になっています。
お願いがあって、電話を換わってもらいました。」

「ブランでかまわない。」

「では、ブラン。聖ですが、しっかりしてそうでかなり抜けています。
フォローをお願いしたいのと、近寄ってくる男を排除してください。
本人に言っても、気付かないで危ないことになったりしています。
元の世界なら対応できましたが、しばらくは別々に行動しますので
助けれません。
どうかよろしくお願いします。」

「そうだな、確かに抜けていることがあるな。気にするようにしよう。」

「ありがとうございます。お願いします。すみません、聖に換わってもらえますか。」

「聖、ブランの言うことをよく聞けよ。じゃあ、また連絡するな。おやすみ。」

「うん、おやすみ。」

電話を切って、この世界に一人ではなくて海もいると知ってほっとしたみたい。

身内だから心強い。私の次に強いと言っていたしなぁ。

でも、運動神経も良いし、武道すべて師範並みっていう化物。

だから、私より強い気もするなぁ。

まぁ、予定通りに私はここで精一杯頑張るだけよね。

挫けそうになったら、電話すればいいしね。

逃げ道ができたし、良かったなっていうことで。

再度、おやすみなさい。

25　従弟との会話（後書き）

ここ最近は、毎日更新していましたが、1週間ほどお休みさせていただきます。
よろしくお願いします。

26　従姉との会話

「あ～、しまった。」

“海、急にどうしたんですか？”
クレアルが、俺の声にびっくりしたようだ。

“まずい、聖の髪と瞳をどうするか相談忘れた。”

俺が、魔方陣を壊して城から脱出したことによる弊害。
勇者でない俺にはないが、本来勇者である聖には・・・。

城の関係者は、勇者探しに血眼になるだろう。
黒髪、黒い瞳である聖にとって、危険極まりない。

“クレアル、魔法で色を変えて、固定化ってできるのか？”
聖の瞳の色を何とかしないと。

“魔術の管轄だと思います。
魔法なら、誰が見ても違う色に見えるというのでどうですか？”

“それで問題ないか？”

“クレアル、聖の瞳を俺と同じ色に見えるようにしてくれ。
それと髪は、光の加減で俺と同じような色に見えるように。
連絡を取ったら聖の所へ行って魔法を頼みたい。
できそうか？”

“大丈夫です。できます。他はいいですか？”

“聖に渡して欲しい物を用意するから、ちょっと待ってくれ。”

う～ん、最強で精霊もついているから大丈夫だとは思う。
でも、何かしておきたい&売約済みに・・・。

何か機能をつけたペンダントかリングを渡したいな。
目立つのがいいけど、この世界では問題外。目を付けられると困る。
服の下に隠れるペンダントか。

シルバーゴールドのチェーンに葉っぱのトップ。

機能・・・、どうするか。聖限定で盗られても聖の元へ戻ると。
危機の際に転移、俺が聖のそばへか、聖が俺のそばにか。
どちらが安全か？どちらも危機だったら目もあてられないか。
危機の際には、見えなくなる方がいいか。ひとまず時間稼ぎになるし。

よし、決めた。
葉っぱを握って俺の名を呼べば、姿が見えなくなると。
戻るときは、自分の名を言うと。

さくっと制作するか。とっても便利な創造の魔法起動と。
おおっ、俺がすごいのか、魔法がすごいのか。まぁ、どうでもいいけど。

“クレアル、もう一度ヴェントに結界を頼んでもらえないか？”

“はい、連絡しますのでお待ちください。”

“ヴェント、もう一度結界をお願いします。”
“了解。”とすぐに魔法が起動されました。
“海、結界準備できましたよ。”
“ありがとう。”聖の携帯にすぐ連絡するか。
短縮ボタンを押すと呼出音が聞こえてきました。
着メロは、童謡の海で変更していないのかな？
変わっていないと嬉しいな。

「海、何？」
うわっ、さっきより眠そうだなぁ。携帯じゃなくて、是非直にと言いたい・・・。

「聖、目と髪の色どうしてる？何もしていなとマズイことになりそうだけど？」

「青のカラコンしてるよ。髪はそのままだけど。」

「毎日、コンタクトは大変だろう。
今から、創造の精霊のクレアルにそっちに行ってもらうから。
目と髪に見た目を変える魔法をかけてもらえ。
終ったら電話してくれ。」

「うん、助かる。ありがとう。」

“クレアル、行って聖に魔法をかけてきてくれ。
それとこのペンダントを渡してきてほしい。”

とペンダントを持った手をクレアルの光の方へ差し出しました。
“わかりました。行ってきます。しばらくお待ちください。”
と光と共にペンダントが消えました。

しばらくするとクレアルが、戻ってきました。
その後すぐに、携帯の着メロ『聖夜』が流れてきました。

「どうだ？あっ、すまん、自分ではわからないな。
目は俺と同じ色で、髪は光の加減で俺と同じような色な。
ペンダントについては、葉っぱを握って俺の名前を呟けば、魔法を使えないもの
からは、姿がみえなくなる。
戻るときは、同じように握って自分の名前を呟くこと。
何かあったときの手助けと思って作ったけど、使えそうか？
聖限定だから他の人は使えないから。ついでに盗られても戻るようにしてある。」

「へぇ、すごいね。いつも身につけるようにするね。」

「ああ、ただ服の下とかあまりわからないようにしてくれ。興味を引いても困る。」

「了解。海こそ気をつけてね。」

「ああ、わかってる。今度こそおやすみ。」

「おやすみなさい。」

これで聖は大丈夫だな。で、俺はどうするかな。どこへ行くか。

ひとまず寝て、明日にするか。

枯葉を魔法で集めてベッドにして、結界を起動して温度調整。はいできあがり。

“クレアル、おやすみ”

“はい、おやすみなさい”

２６　従姉との会話（後書き）

１週間ほどお休みの予定でした。
が、皆様のおかげでお気に入り登録が１５０件を超えました。
お礼も兼ねまして、休みを返上して頑張ろうと思います。
途中で多少止まるかもしれませんが、極力短くしたいと思います。
どうぞ今後もよろしくお願いいたします。

27　城サイド

＜召喚された翌日のお城では＞

トントン。
トントン。
トントン。

「勇者殿、おはようございます。」

トントン。
トントン。

「勇者殿、開けてもよろしいでしょうか？」
侍女が部屋にいる勇者に声をかけています。
が、返事がありません。

「失礼します。」
扉を開けて、一礼してベッドの方へ向かいます。

「勇者殿？」
ベッドに誰もいません。

侍女は、扉へ戻って騎士に
「勇者殿が、いらっしゃいません。部屋から出られましたか？」

「いえ、誰もこの扉から出ていません。」
と騎士の言葉を聞いた侍女は、宰相へ報告するために執務室へ急ぎました。

執務室で、
「朝早くから失礼いたします。勇者殿が部屋に不在です。
扉の外の騎士は見ていないとのことです。如何いたしましょうか？」

「なんと、手のものを使い、至急捜査するように。
それと神官長と宮廷魔術師を呼べ。」

苦虫を噛み潰したような宰相に
「はっ。」と返事をし、行動するために部屋から退出しました。

侍女は、部下の一人に神官長と宮廷魔術師への連絡を伝え、
他の部下たちに勇者の捜査を指示しました。

この侍女は、普通の侍女ではなく、影と呼ばれる宰相直属の裏で
活動する
組織の長でした。

聖を殺そうとしたのも、宰相の指示を受けた、この影の組織の人
間でした。

侍女は、再度勇者の部屋を調べるために移動しました。
部屋に何も残っていないかを目を皿にして探しましたが、何も残っ
ていません。

窓から出たことも想定して、窓へ近づきましたが、鍵がかかり開
けた形跡が
ありません。

そろそろ神官長と宮廷魔術師が揃うころだと宰相の執務室へ向か

いました。

宰相の執務室に宰相、神官長、宮廷魔術師、影の長と４名が揃いました。

「勇者が消えた。至急探すように。」と宰相が言いました。

「ただいま、部屋を確認いたしましたが、何も残っておりません。窓の鍵もかかったままでした。」と影の長。

「今朝、祭壇へ行きましたら、召喚の魔方陣と勇者を確認する水晶が無くなっていました。」と神官長の報告。

「部屋と祭壇で魔術の形跡確認を行います。確認後、報告いたします。」
と宮廷魔術師。

「部屋と祭壇を確認後にここへ集まるように。二人とも案内してやれ。」
宰相の一言で皆が部屋から退出し勇者の部屋へ向かいました。

「こちらです。」影の長の言葉で皆が部屋へ入りました。

「魔術を発動した形跡はありませんね。全く感知できません。」
宮廷魔術師の一言で神殿にある祭壇へ移動することになりました。

この国の宮廷魔術師のレベルは、各国の宮廷魔術師の中で３本の指に入ります。
が、森の魔女のように権力者を嫌うものを含めると１０番目くらい

です。

「こちらでも魔術の発動を感知できません。どちらもわかりません。

執務室に戻りましょう。」この一言で皆で部屋へ戻りました。

「報告いたします。魔術を使われた形跡はありません。原因がわかりません。」

と宮廷魔術師。

「御苦労。陛下へ報告しなくてはならないな。宮廷魔術師は一緒に来てくれ。」

「はっ。」

宰相と宮廷魔術師は王の執務室へ

「陛下、勇者が消えました。

宮廷魔術師に確認させましたが、魔術の形跡はないです。

少ない可能性としましたては元の世界へ戻ったというのも・・・。

いかがいたしましょう。」

「何をいっておる。探せ。探せなければ打ち首だ。1週間以内に探せ。

できないなら換わりのものを召喚しろ。」

「申訳ありません。召喚する魔方陣と水晶も消えました。

もう召喚はできません。」

「なんだと、貴様は、そんなことをおめおめと報告するのか。

下がれ。」

「失礼いたします。」　と王の部屋から退出しました。

「宰相どの、いかがいたしましょう。我らだけでは何もできませんが。」

「この周辺を捜す手配をする他ないだろう。
同時に、黒髪黒い瞳のものを強制で城へ集めろ。」

「はっ。」影に控えていた影の長が返事をしました。

28　聖サイド

＜森の魔女の家＞

“聖、そろそろ起きた方がいいぞ。森の魔女は起きているぞ。”
ブランが、目覚まし時計？をしています。

「ふぁ～い。おはよう。」
大きく伸びをすると、ネックレスが揺れました。
昨日の海との電話は、夢じゃなかったんだと改めて実感しました。

ちゃっちゃと起きて顔を洗って行動を開始しましょう。
ボールを持って外の井戸へ行きました。今日も良い天気です。
今日も頑張るぞ～。

さて、何をすればいいのかしら？朝食の用意かしら？
グリーさんは、どこかしら？

“ブラン、グリーさんの居場所わかる？”

“ああ、この小道の先か。もうすぐ戻ってくるぞ”

“じゃあ、ここで体操してればいいわね”
ラジオ体操の第一初めっ、なんちゃって。
冗談抜きで準備体操替わりにやりましょう。

深呼吸からだったわね。よしと体操を始めました。

「あらっ、聖何してるの？」

「グリーさん、おはようございます。私の島の体操です。」
ナイスタイミングです。ほぼ終わりかけの時にグリーさんが戻ってきました。
「体操？」
「結構お薦めですよ。ご一緒にいかがですか？」
「あら、おもしろそうね。教えてもらえるかしら。」
「はい、じゃあ、私の真似をしてくださいね。」
腕を伸ばして深呼吸からと説明つきで第一を一通りやりました。
「グリーさんどうでしたか？大丈夫ですか？」
「なんだか、良い感じね。毎朝やろうかしら。」
「その時は、誘ってくださいね。私もやりますから。
ところで、私は何をしましょうか？」
「朝食の用意を手伝ってもらおうかしら。そのあとは片づけをお願いね。
で、終わったらお風呂よろしく。」
「はい、お風呂作り頑張りますね。」
お風呂作るぞ～！
食事、後片付けが終了して井戸の近くに腕を組んで仁王立ち。
どこにどんな風に作ろうかしら。

1. お風呂は夜だから家の近く。
2. 結界はあるけど建物の中がいいな。
3. 建物、浴槽の素材をどうするか。

二階建てで二階への入り口はなし。直接二階への転移のみで。
家の裏に立てて表からは見えないようにする。
一階は、どうしましょう。後回しでいいかな。柱のみっていうのもいいかも。

大き目の浴槽に広めの洗い場、脱衣所と転移場所で三つの部屋になるかな。
全部木造で魔力の蛇口を一時的に大きく開いて、魔術起動。
魔力の蛇口を戻してと。

できた建物を眺めて、初めての大きな魔術だし、こんなんでいいか。
二階の転移場所へ移動。初めて転移しちゃいましたねぇ。良い感じ。

おおっ、思った通りにはできてますね。
浴槽に蛇口から４５℃のお湯を入れて、温度の固定魔術と。完成。
ついでに入って、お洗濯もやっちゃいましょう。

久しぶりのお風呂は最高でした。
服は洗っちゃいましたので魔術で一瞬で乾燥。乾燥機いらずは、すごいです。

グリーさん早く帰ってこないかしら。説明したいし。

そのころグリーさんは、結界の外で人と会っていました。
昨夜、勇者の召喚が行われたこと。

そして、今朝、勇者が消えていたことを聞かされました。
その情報をもってきたのは、城の人間でした。

28　聖サイド（後書き）

眠くてギブアップです。

29

「グリューネ様、そろそろ戻っていただけませんか。」
宮廷魔術師の一人が、森の魔女グリューネに会いに来ています。
一通り状況を説明した後の言葉でした。

「王が変わったら考えないでもない。
私が、またあれに仕るなんて死んでもこうむりたい。向こうも同じね。」

「せめて勇者を探すのを手伝ってもらえないでしょうか？」

「無理矢理呼び出して、嫌がっていたんでしょ。
あの王だ、ろくなことさせないね。まわりの国への牽制と自慢ぐらいでしょ。
気に入らなければ殺すわね、あれは。」

「しかし、見つけれないと宰相と長が打ち首に。」

「なら、勇者を犠牲にするのね。自分の国の人間でなければ良いというの？
腹黒宰相は打ち首でいいんじゃない？長の方は、助け出せばいいんじゃない。
それかあれを倒すか？それなら手伝うけど。」

「グリューネ様。お気持ちはわかります、が、そこをなんとか。」

「くどい。私は、城を追放されたはず。」

グリューネは、聡明な王であった前王に見出されて宮廷魔術師長になりました。
しかし、愚王な現王と、実直なグリューネと合うはずもなく対立することとなりました。
そして、前王が亡くなると同時に追放を宣告され、現在に至っていました。

「だいたい、勇者が城から出たなら、もうこの国にはいないとみるべき。
後、宰相のことだから勇者の身代わりを出そうとするにちがいないから、
反対しないと、よけいに大変になるでしょうね。
他の国の魔術師で、魔術を感知できる者もいるんだから。逆に攻められるわね。
魔方陣と水晶が消えたのは、良いことね。あんなものは無い方が良い。」

「わかりました、グリューネ様。長にそのように報告いたします。」

「逃げるのは協力するから連絡して。ここへ来ても良いし。」

宮廷魔術師が帰ったのを確認して、グリューネは結界の前から家へ引き返しました。

「聖が、今日ここへ来たのなら間違いなく、勇者と断定した。
が、昨日の昼前からいて、髪が微妙で目が青く、魔力も普通だ。
となると、勇者であるはずがない。しかし、普通とはいえない。
なぁ、ナイト。」

グリューネは、足元にいるナイトへ話しかけました。

ナイトは、名前を呼ばれグリューネの方を見て、答えることもなく首を傾げました。

「さて、先ほど魔術の気配がしたから、お風呂とやらができたのだろう。
入りにいくか。ナイト行くぞ。」

グリューネは、家へ戻ると裏へ向かいました。
聖が、ちょうどお風呂から1階へ転移したのと同時でした。

「聖、できたみたいね。」

「グリーさん、おかえりなさい。
できましたので説明しますね。こちらに来てもらえますか。」
と自分のいる場所へグリーさんを呼びました。

「この上に転移する場所を作りましたのでそこへ転移して下さい。
先に行ってますね。」

「グリーさん、いらっしゃいませ。
ここが脱衣所と言って服を脱ぐ場所で、奥が浴槽と洗い場になります。」

「今から入ってみますか？お湯を入れて温度を一定にしてありますので。」

「いいわね～。聖もつきあいなさね。」

「はい。では、入りましょうか。」
あらら、さっき入ったばかりだけど。まぁ、いいっか。
二人で仲良く入浴して、家に戻って昼食をとりました。

＜森の外れで＞

グリューネと話していた魔術師が、何者かに捕らえられ気絶させられました。
そして、誰にも知られないようにどこかへ運ばれました。

30　聖町へ

聖が、森の魔女と暮らすようになって1ヶ月が過ぎました。

暮らしの中で聖に必要な日常品は、グリューネが用意をしてくれていました。

明るい間は、グリューネと薬草を取りに行き、魔物に襲われれば戦い、

夜になれば、この世界を知る為に読書をするという毎日でした。

グリューネは、そろそろ聖を町へ連れて行きたいと考えています。

気にかかっていた勇者探しもすでに終っている為、問題はないと判断しました。

「聖、町へ行ってみたいかい？

薬草を売りに出かけるが、一緒にどうだい。」

「行きたいです。是非お願いします。」

“ブランたちも一緒に行こうね。”

皆の笑顔が返事のようです。

聖にとって、この世界で初めての町であり、お出かけです。

二人と一匹は、グリューネの転移魔術で、町のはずれへ移動しま

した。

「まずは、薬草を売りに行くね。売ったらお金を渡すから。お金の単位とかは、大丈夫よね？」

「はい、本で勉強しました。銅がフー、銀がファン、金がフィン、水晶がフォンでいいですよね。」

日本円で言うと、銅貨フーが１０円、銀貨ファンが千円、金貨フィンが一万円、水晶貨フォンが１０万円くらいの価値って感じかな。

「よくできました。じゃあ、ギルドへ行くわよ。ついでにギルド登録もする？」

「私でもできるんですか？」

「問題ないでしょう。住まいは、今いるところになるだろうし。」わぁ、できるなら嬉しいですね。

「あと、迷子になった場合は、ナイトについて行けば大丈夫よ。ギルドまで案内してくれると思うわ。とにかく行きましょうか。」

“ブラン、そのときはよろしくね。”

“了解。その前に迷子になるなよ。”

“うっ、頑張ります。”

今から行く町は、城下町ではなくて国境の方が少々近いという場所になります。

グリーさんについて町へ入りました。

中世のヨーロッパの雰囲気と言えばいいのでしょうか？よく知らないんですが。
まぁ、日本の雰囲気は全くないってことで。

また、日本と違う雰囲気を醸し出しているのは、そこにいる人達のせいですね。
エルフ、獣人、色取り取りの人達。ＴＨＥファンタジー、びっくりです。

直視すると失礼ですよね。グリーさんをひたすら見ながら歩きました。
神殿で見た感じとは全く違いますね。あちらは城下町だったというのも理由でしょうか？

広い通りを歩いて行くと両サイドには、お店が並んでいます。
木の看板に絵が描いてあります。勉強の成果を披露してみましょうか。

ジョッキの絵の食事処、バスターソード？の武器を扱う店、草と花の薬屋、
食べ物の絵の食べ物屋、服の絵の服屋、食器の絵は金物屋ってところでしょうか。

きょろきょろしている間にギルドに到着しました。
ちなみにギルドの絵は、マーライオンみたいな感じです。
建物は、他の店の二倍でしっかりとした作りに見えます。

グリーさん、ブランと一緒に中に入りました。

私は、ギルドとは日本でいう役所の受付って感じかなと思っていました。
でも、ちょっと想像とは違ってプールバー？高級飲み屋？の明るい場所って感じ。
丸テーブルに椅子がセットされていて、いろいろなグループが話をしています。

グリーさんについて、カウンターのすごい美形のお姉さんの所へ行きました。
エルフ族で髪が金色でグリーンの瞳。１７０ｃｍくらいでモデルスタイル。いいなぁ。

「この薬草を頼む。あと、この子のギルド登録を。」

「わかりました。少々お待ちください。」
とお姉さんは奥へ行き、水晶？丸い玉を持って出てきました。

「まずは、薬草です。５フォンになります。よろしいですか？」
え～っ、すごい５０万円ってこと？薬草って高いんだ。

聖は気付いていませんが、グリーさんの取る薬草は、強い魔物も多い場所で、
かなりランクの高いものでした。で、聖も強い魔物を倒しています。

「ああ、それでいい。お金は、水晶貨は3枚で後は金貨で頼む。」
「次に登録ですが、この水晶に手を載せてください。」
“聖、魔力は抑え目にしろよ。”
“大丈夫、普段は少なめにしてあるよ。”
「ここでいいんですか？」
「はい。結構です。そのまま少々お待ちください。
この間に、ギルドについて説明させていただきます。
ギルドにはランクがあり、F、E、D，C、B、A、Sと上がります。
そこのボードに依頼が貼ってあります。
自分のランクの下のランクと一つ上の依頼は、受けることができます。
依頼を失敗すると高額の罰金が発生しますのでよく考えて受けて下さい。
誰かと一緒に受ける場合は、高ランクの人に合わせてもらって結構です。
一つ上のランクを3つ受けて、成功すればランクが上がります。
そろそろ手を離してもいいですよ。」
水晶から光が発しました。

31

水晶からの光で、お姉さんが持っていたブレスレットに何か書き込まれました。

「辺境の森のヒジリさん、魔術師、ランクはC？えっ、嘘。すごい。」

グリーさんとブランは、何の反応もしていませんでしたが、テーブルの人達、

聞いていたんですね・・・。

所々で、すげーとか嘘だって声が聞こえてきます。何がすごいんでしょうか？

「失礼しました。だいたいの人は、初めての登録ってFなのよ。最初からCランクってかなりの腕前なの。

だから、周りの人も反応しちゃったのよ。私が原因ね。ごめんなさい。

でも、よく考えれば当然ね。Sランクのグリーさんのお弟子さんでしょ？」

グリーさん、Sランク、すごいです。

でも、魔力少な目でCランク、全開だとS超えるってこと？

“当たり前だ、聖はこの世界で一番の魔力の持ち主だからな。”

あら、ブラン聞こえてたのね。

「聖、弟子？」グリーさんひどい。

「弟子です。」

グリーさん、どう考えても弟子だと思いますけど。

「このブレスレットは、ギルドの身分証明も兼ねているから必ず付けていてね。それと失くして再発行は、１フォンとなるから気をつけて。質問ありますか？」

「質問はないです。」

ブレスレットを受取って手首にはめると、手首にぴったり張り付りつきました。アクセサリーとかと違って不思議と違和感がありません。

ブレスレットの色は、半透明の白。お姉さんが言った個人情報は、さっきの水晶みたいな特殊なものでしか読み取れない。これならつけたままで問題ないですね。

これで私もギルド人、なんちゃって。テンションちょっと変ね。

「聖、何か依頼受けるかい？」

「グリーさんのお手伝い程度でいいです。ランク上げたい訳でもないですし。」

Ｃなら中間だし良いですよね。平凡が一番ですもん。

たしか、読んだ本にギルドランクの多数の人は、Ｂ、Ｃ、Ｄって書いてあった。

比率はＳ１％、Ａ９％、Ｂ２５％、Ｃ３０％、Ｄ２５％、Ｅ９％、Ｆ１％だったはず。

「聖の実力は、B以上だと思うが。まぁ好きにしな。」
あらら、グリーさん・・・。グリーさんの前で私何かしましたっけ？
「ギルドでの用は終わったから、聖の武器を見に行こうかね。」
「はいっ？」
私の武器？って必要だったのね。魔物とは、グリーさんの剣を借りて戦っていたけど。
ほどんど魔術だったなぁ。
「グリーさん、すみません。連絡事項がありますので中にお入りください。」
ギルドから出ようとしていた私たちに、お姉さんが話かけました。
グリーさんは、カウンターの横を通って奥の部屋へ行くようなのです。
私たちもついて中へ入りました。
中には、落ち着いた感じの獣人の男性が坐っていました。
熊かしら耳が丸い。いいなぁ、耳触りたいなぁ、嫌がられるでしょうけど。
「グリューネ、久しぶりだな。弟子取ったのか？」
「リーコス、何か情報か？ああ、弟子だそうだ？」
「情報は、二つある。良いのと悪いのとどちらが先がいい？」

「どちらでもいい。さっさと話せ。」

「相変わらずだな。まず、勇者のお披露目が行われる。明日、神殿前だ。
それと、宮廷魔術師長が解任されて、何かを理由に牢へ入れられた。
新しい長は、王の抜擢。実力はあるらしい。」

「そうか、あれと狸宰相だからな。何かしたな。
牢か、そのうち助けることも考えないとな。リーコスはどうするんだ？」

「明日、勇者を見に行って、探ってくるつもりだ。帰ったら報告するか？」

「ああ、頼む。今は動かずにいるさ。しかし、勇者は見つかったのか？」

「影が探して、宰相が保護したとのことだ。どうなんだろうな。」

「そうだな。」

「じゃあ、またな。」

32

グリーさんとリーコスさんの話って聞いていて良かったのかしら？
なんとなく反政府派の話って感じですもん。

殺されかけた私もどちらかというと同志だとは思うけどね。
建前は弟子だしいいっか。

リーコスさんについては、グリーさんの知人って感じの認識で問題ないでしょう。
悪い人って感じもしないし。

話の中で気にかかったことがある。勇者のお披露目って？
海じゃないし、誰なんだろう。他に誰か召喚されたのかな？

「さて、聖、遅くなったけど武器を見に行こう。」
「はい。」

リーコスさんに会う前の予定に戻りました。

「ここ。看板は出してないけど、良いものが揃っている店。
1フォンは、聖のお金だから好きに買って良いよ。足らなければ出すから。」

お金を受け取り、
「ありがとうございます。」

そのお店は、広い通りを一本中にはいった場所にありました。

日本では、縁の無かった武器、私に何か使えそうなものはあるんだろうか？

防具もあるみたいなのでこちらの方を優先さようかな。

防具は、魔術を使いやすいものがいいな。体力的に鎧関係は問題外。

ローブで保護があるものがベスト？無ければ自分で付ければいいし。

お店にローブのコーナーがありました。カラフルなんですね～。

てっきり黒一色というイメージを持っていました。

色で保護が違うのかな？まぁ、好きな色か苦手な魔術を選べばいいのかな？

保護については、皆に相談すればＯＫと。

ん、好きな色のオリーブにしよう。サイズは、調整すればいいですね。

さて、問題の武器・・・。

弓、槍、ハンマーは、使えない。私が使えそうな剣を探すしかないですね。

あらっ、細身で私の腕の長さくらいの剣で光っているのがあります。

ちょっと持ってみましょう。えっ？軽い。重さを感じさせないってなぜ？

“ブラン。これ変よ。”

“へぇ、魔法がかかっているな。聖以外の者が持ったら重くて使えないかな。
精霊の守護だから特定された者用だ。聖に丁度いいぞ”

“じゃあ、これにする。誰か使い方教えてくれないかなぁ。”

「グリーさんこのローブと剣にします。お金払ってきます。」

「すみません。これください。おいくらですか？」

「ローブが1フィンで、剣は1ファンだな。鞘はおまけしとく。」

「剣が1ファンですか？」

「ああ、その剣は重くて、魔術もかからず買い手が無くて困っていたんだ。
買ってもらえると助かる。」と重そうに剣を持ち上げました。

お金を支払い、おつりと商品を受取り、グリーさんの元へ戻りました。

「なかなか良い買い物をしたみたいだね。」
さすがグリーさん、やっぱり魔法を感知しているみたいですね。

「はい。」
にこにこしながら返事をしました。

「グリーさん、剣を教えてくれる人知りませんか？

買ったのはいいけど使えないんです。」

「リーコスが帰ったら教えてもらえばいいさ。
戻ったら家に寄るように連絡しておこう。」

「はい。ありがとうございます。」
頑張って使えるようにならなきゃ。
グリーさんに迷惑かけ通しだから、早く独り立ちしなくてはね。

「聖、これからどうしたい？帰るかい？」

「食べ歩きしたいです。」そろそろお腹すいてきました。
ギルドへ行くときに屋台が並んでいるのを見かけました。
そして、良い匂いがただよっていました。

「じゃあ、行こうか。」

二人と一匹で屋台のはしごをして、食べ歩きしました。
お腹が満足したら、町のはずれに行き転移で森の家へ戻りました。

お肉の串焼きも肉まんの親戚もデザートもおいしかった～。
また、行きたいなぁ。

数日後、リーコスさんが森の家を訪ねてきました。

グリーさんから訪問の日を聞いていました。
それで、薬草を取りに行かずに二人で待っていました。

33

「グリューネ、あの勇者はおかしい。どこがとは言えないんだが。どこかで見たことがあるような気もする。グリューネにも見て欲しい。」
席に着くなりリーコスさんは話はじめました。

「神殿でAランクの魔術師と一緒だったんだが、勇者に違和感があると言うんだ。
王は、あの勇者をどうするんだ？何をさせたいんだ？わからないことだらけだ。
それと新しい宮廷魔術師長だが、勇者につきっきりで、まるで付き人だ。
それと実力だが、一緒だった魔術師が自分よりは上だと言っていた。Sとまでは言いきれずSに近いAか、Aに近いSだろうということだ。
前の長は、Sだったよな。で、逮捕理由だが王への不敬罪。おまえさんと同じだねぇ。さすが師弟。いまのままなら死ぬまで出してもらえない。
助けてやらなくていいのか？」

なんだかよくわからない勇者ですね。
元宮廷魔術師長は、私の兄弟子なんですねぇ。

「リーコスが言うなら何かあるね。一度王都へ行かないといけないようだね。
今日中に準備して、明日にでも向かうとするか。聖には、留守を頼みたい。
まだ、Cランクの聖では、足手まといになりかねない。

何があるかわからない状態では、責任が持てないからね。
ランクが、Ａの上位くらいでぎりぎりだね。リーコスはどうする？」
王都、足手まといも嫌ですが、個人的にも行きたいとこではないですね。
「一緒に行くさ。足手まといにはならないだろ。」
ニヤっと笑いながら返事をしました。
「足手まといねぇ。Ｓランク上位で良く言うよ。
そうだ、この後予定がなければ聖に剣の基礎を教えてやってくれ。
剣を購入したが、使えないからね。
ここは、結界で安全ではあるが、薬草取りに外に出た時とか危険でな。
まぁ、魔術で逃げることを優先すれば大丈夫だろうが。
ナイト、聖の守りよろしくな。」
「わん。」
へっ、ブラン返事するんだ。
“一人で大丈夫だと判断したら手は出さんぞ。”
“頑張ります。”
「リーコスさん、お願いできませんか？」
Ｓランク上位ってすごいですね。
「予定はないから　かまわないが。」
「じゃあ、昼食後に始めようか。グリューネ、昼は食べさせてくれるんだろ。」

「ああ、聖、用意はじめようか。」

「はい。」

「リーコス、準備の間に風呂へ入るか？」

「風呂？」

「聖が作った湯殿だ。入るなら転移するが。」

「へぇ、入ってみたいな。転移頼む。」

「ああ。」返事とともに転移場所へ。

「そこで脱いで、奥に洗い場と風呂がある。戻るときはその辺の窓から飛び降りろ。
おまえなら平気だろ。」

「ああ、これくらいなら高くないから問題ないな。」

「じゃあ、準備に戻るからな。」

グリーさんと昼食の準備が終わったころにリーコスさんが部屋に入ってきました。

「風呂っていいなぁ。また、次来た時も頼むな。」

「気に入ってもらえたなら嬉しいです。さぁ、坐って下さい、食

事にしましょう。」

「リーコス、いつもと同じ席に座ればいいから。」

「「いただきます。」」

私とグリーさんの言葉に、リーコスさんが不思議そうな顔をしていますが、かまわず食事をしました。

「「ごちそうさまでした。」」

「その言葉は、なんだ。」

「聖の育った所の食事の挨拶だ。まぁ、気にするな。食事のあとかたずけは、私がするから、聖はリーコスに剣の基礎を習いな。」

「はい、ありがとうございます。リーコスさん、お願いします。」

「ああ、剣を持って外へ出な。」

「よろしくお願いします。」

「剣をかまえな。まず構え方と、足の運び方から。」

リーコスさんの真似から入り、しばらくして慣れてきたら軽い打ち合いをしました。

そのあと、間合いの取り方を教えてもらって終了となりました。

まだ、明るいのですが、私の体力が限界となりましたので。

「一人でもできるから復習しな。次会うときを楽しみにしとくか

ら。」
うっ、プレッシャーが…。短時間でも毎日やればいいかな？
この世界で海は、どのくらいのレベルなんだろうか？
剣を振っていて急に海を思い出しました。
海の状況が、わからないから、こちらからは連絡しずらいし。

翌朝、グリーさんとリーコスさんは1週間ほど留守を頼むと王都へ向かいました。

34

グリューネたちが、王都へ出かけて2週間が経過しました。

聖の日常は、森の中へ出かけて薬草を取り、魔物と戦い魔術の修行。
読書で知識を補い、精霊と語ったり遊んだり、剣の練習という毎日でした。

「ブラン、グリーさん達そろそろ帰ってくるよね？遅いよね？1週間って言ってたけど過ぎちゃったし。何かあったのかな？」
誰もいないので声に出して話すようにしています。

「ふむ、どうだろうか？誰かに様子を見に行かせるか？」

「お願いします。」

「ヴェント（風）、グリューネたちの様子を見に行ってくれ。それと王都の様子を確認してきてくれ。誰か補佐が必要か？」

「はい、わかりました。オプス（闇）と一緒に行きたいと思います。1日あれば戻って報告できると思います。オプス、行くよ。」

「ああ。」

「「いってきます。」」

「ヴェント、オプス、気をつけて。無理はしないでね。」

「二人が戻るまでは、することもないから薬草取りに行きますか。」

まだ、お昼を過ぎた時間ですので近場でしたら十分行けますね。

後、日常品を購入したいので町に出かける必要もあります。

１０日分の薬草を売りに行って、購入すればいいかな。

ヴェントとオプスが戻ったら町へ行くことにしましょう。

翌日の昼前にヴェントとオプスが戻ってきました。

「グリューネさんたちですが、城の牢に閉じ込められていました。魔術が使えない牢なので逃げることもできないようです。

城サイドは、かなりグリューネさんたちを警戒しているようでした。」

とオプスが報告しました。

「勇者ですが、魔術を掛けられています。見た目だけではないようです。

就いていた魔術師長の魔術だと思います。危険ですね。

町は、今の所かわりありませんでしたが、城と神殿は禍々しい雰囲気です。」

ヴェントからの報告でした。

「聖、どうする？」

「グリーさんたちを助けないといけないですね。」
「城へ行くのはあまり進められないがな。」
「私も行きたくないよ。でも、恩人の危機だからね。一応私強いんだし。
ブランたちも協力よろしくね。」
「はいはい。」
「午後からギルドへ薬草を売りに行くよ。
それと日常品と旅に必要なものを購入するね。今から必要なものを本で確認かな。」
と旅について記載してある本を探しに書庫へ向かいました。
ないじゃん。もう、店で聞こっと。３０分程度でギブアップ。
さっさと昼食とって出かけましょう。

前回、グリーさんが転移した場所を思い浮かべて転移。
薬草と安全の為に剣を持ってブランたちと。
何も問題なくギルドへ到着。
「すみません。この薬草の換金お願いします。」
前回と同じお姉さんです。良かった。
「あら、ヒジリ。こんにちは。これね。ちょっと待って。」
「はい。」

「これで1フォンにになります。両替しますか？」
「そうですね。フィンでお願いします。」
「じゃあ、これで。」
とお金を受け取りました。
「すみません、旅をするのに必要なものは、どこで購入すればいいですか？」
「どこへどのくらい行くかによるわね。」
「王都へ1週間程度行きたいと思っています。」
「王都なら買い物もできるから道中だけね。
ギルドの通りを町外れにも向かって数軒目の日常品のお店で揃うわよ。」
「ありがとうございました。」
ギルドを出て、日常品を売っているお店へ入りました。
へぇ、売っている物は違うけど、日本の雑貨屋さんって感じです。
見て回って、旅用の物がまとめてある場所で立ち止まりました。
“ブラン、私って王都外れまで転移で行けるよね？”
“行けるが、どうかしたか？”
“旅の用意って必要ないんじゃないかな？”

“まぁ、そうだな。泊まるところさえあれば問題ないだろうな。”

あらら、じゃあ、最低限のお泊りセットだけ購入しましょうかね。
でも、逃げることになったら地下に潜むために必要なものは・・・。
あれ、何か変なもの読んだっけ？って方向に。

冗談はさておき、宿泊セットに日持ちのする食べ物と救急セットを購入と。
他は、王都で購入すればいいか。

さっさと家に帰りましょう。

35

＜深夜＞

携帯電話から海の曲が流れ出しました。

「もしもし、海、久しぶりね。元気だった？」

「まぁな。聖こそ変わりないかい。」

「私は、ないけど、グリーさんたちが牢に入れられた。明日、助けに王都へ行く予定だよ。」

「はぁ、ちょっと待て。なんでそんな事になっているんだ？」そこは、安全だから聖を預けたつもりだったのに。一緒に連れて行った方が良かったか？

「勇者の様子が変だから状況を確かめるためと、弟子の元魔術師長が牢に入れらたから助けるために王都へ行ったけど捕まったみたい。ヴェントとオプスによると新しい魔術師長の魔術が原因だって。」

おいおいマジかよ。聖をこの国に関わらせたくなかったのに。俺も行った方がいいだろうな。どうせ他の国へ移動するつもりだったし。

「ちょっと待て。俺も行く。そこに誰もいないんだよな？」

「ええ、グリーさんがいないんだから誰もいないわよ。」

「わかった。今いる宿を清算して、聖のいる家へ転移するから泊まれるようにしてくれ。
じゃあ、３０分後に行くから頼むな。」

切られた。

なんですって？すぐ来るって。この部屋以外に入れる訳ないじゃない。
自分の家じゃないんだから。ばか海。
机と椅子を脇へどけてと。これでベッドを置けるスペースはあるわね。
自分のベッドを一回り小さくしてと。通路も確保。
ベッドは、自分で作るでしょうと。

トントンとノックの音が聞こえてきました。

もう来たの？もう！３０分経っていないじゃない。

「聖、１ヶ月半ぶり。」と海が抱きついてきました。

いつものことなので気にせず、
「何言ってんのよ。お風呂入る？」

「えっ、あるの？入る。」

「荷物は、そこに置いておいて。着いてきて。」

お風呂の転移場所の真下へ案内しました。
「真上が転移場所になっていて、あとは見ればわかるわ。

で、上がったら直接私の部屋へ転移して。場所は知っているわよね。
」

「大丈夫だよ。ありがとう。じゃあ後でね。」

海の転移を確認してから入り口に鍵をかけて海の荷物を持って部屋へ戻りました。

「聖、お風呂ありがとう。」海が、お風呂から転移してきました。ノックも無しに部屋に突然現れるとビックリしますね。

「どういたしまして。やっぱり日本人よねぇ。」

「まぁな。」

「海は、お風呂どうしてたの？」

「シャワー専門さ。外でお湯を魔術で出して浴びてた。」

「海もチートだもんね。そうそう、このスペースにベット作って。
」

「聖作ってくれないのかよ。」

「自分で好きに作ってよ。」

「はいはい。」

と返事と同時にベッドが現れました。

スペースを考えてくれたのか、思ったよりも小さいものでした。

「ブラン、いつも聖が世話になりありがとうございます。今後もよろしくお願いします。」
何？海が保護者の挨拶を始めました。
「ああ。こちらもな。」
「精霊の皆もありがとうな。これからもよろしく。後で名前教えてな。
俺のことは海って呼んで。」
「「「「「「はい。」」」」」」
何？まぁいいか。私も挨拶しておこうかな。
「クレアル、いつも海のことありがとう。これからもよろしくね。」
「こちらこそお願いします。」紫の妖精さん、かわいいなぁ。
「ところで海は、いままでどうしてたの？」
「電話した翌日にこの国を出て、トゥルゴバスキ国（商業国）でふらふらしてた。
明日、他の国へ移動しようと思って聖に電話したんだ。」
「生活は？」
「ああ、前半はギルド登録して魔物退治。後半は、泊まっていた食堂を手伝ってた。」

ふ～ん。ランクはなんなんだろう。隠していなければSに間違いないだろうけど。
海もばれないようにしていそう。

「ランクは何なの？私は、魔術師でCランクよ。」

「俺は、冒険者でAランクだ。魔術師だとはばらしてないな。」

「明日、王都へ行くんだろ。寝ようぜ。
朝遅くに起きて、準備して、午後王都へ転移な。」

海が、段取りし始めました。まぁ、まかせてしまえばいいっか。
私よりは、この世界のことわかっていそうだし。

「そうね。もう遅いからそれでいいわね。おやすみなさい。」

「おやすみ。」

36　海サイド

＜トゥルゴバスキ国＞

召喚されて1ヶ月半か。この国での情報収集も終わりだな。
召喚された国と比べるのが申し訳ないくらい良い国だった。

国王も皇太子も第一に民のことを考えることのできる人物だった。
まわりも同じような考えを持つものばかり。こんな国もあるんだなと逆に驚いた。

多少問題のある人物はいた、が、不正はなかった。民を思ってという点は同じだった。
このままでいてくれればいいな。

ただ、隣の国がゴルア王国（召喚した国）では何かと不安がある。
あの王では、何かと理由をつけて戦を起こしそうだ。
トゥルゴバスキ国王は、魔王に操られているとか勇者に言わせて。
ありそうで怖い。

この国での用は済んだから、明日の朝には他の国へ移動しよう。
今日中に挨拶とソフィアさんに明日で宿を引き払うと言わないといけないな。
近々引き払うとは言ってあったが・・・。予定よりは長かったな。
宿泊の支払いは、ちょうど明日までしてあったな。

今夜こそ、聖に連絡をいれないと忘れられそうだなぁ。
顔みたいなぁ。最強の保護者がついているから問題はないだろうけど。

さて、俺の一ヶ月を振り返ってみよう。

＜ゴルア王国＞

聖と携帯で話した翌日に周りの薬草と魔物を倒して、近くの町のギルドへ持っていった。
先立つものがないとな。

常識が頭に入っていると本当に助かる。薬草はもちろん、魔物の特性、弱点がね。
ある程度価値のある物を持っていったので2フォンのお金を受け取った。

ついでにギルドへの登録。
所在地がなく、職業も冒険者に固定させたい訳だから魔法で強制的に記入。
辺境の森出身の冒険者でカイと。
ランクだけはそのままにしておいたらAランクになってしまった。

あぁ、持ってきた魔物のランクが高すぎたようだ。
まわりの雑音は無視。気にしないと。
登録が終ったら、剣を購入するため武器を扱う店へ入った。

入ると同時にある剣に呼ばれて、手に取った。大きめの片手剣だ。
へぇ、重さが感じられないくらいに軽い。

“ご主人様、よろしくお願いいたします。”

“へぇ。日本でいう九十九神か。俺でいいのか？名はあるのか？”

“ないです。つけてもらえますか？”

“そのままで申し訳ないが、ソードでどうだ。”

“ありがとうございます。”

あとは、防具だな。鎧は重いから嫌だな。
冒険者だけどローブにして保護付けとくか。色はと、藍色でいいかな。

そうだ、小型ナイフも欲しいな。ちょっとしたことに使えるように。

「すみません。この三つでいくらですか？」

「兄ちゃん。この剣でいいのかい？呪いの剣と言われてるぞ。」

「はい？」

“おい、ソード。どうなっているんだ。”

“はい、主人と認めていないものが私を使った場合、多少怪我をしたもので。”

「この剣でいいですよ。お願いします。」

「じゃあ、両方で1フィンだ。鞘はおまけしておく。」

お金を支払って商品を受取り、早速剣を差し、ローブを着て店を出ました。

もちろん、ローブに魔法を掛けて。温度調整、ローブが汚れたり破けたりしない、
魔術が効かない、剣とか物理的な攻撃を緩和すると。
プラス、敵意のあるものからは見えなくする。
最後に俺と聖以外にはこのローブは使えないとする。
保護、完璧すぎるかな？普通ありえないのはわかっているけど。
聖が使う場合を考えるともっともっとと思ってしまう。

さて、腹ごしらえしたらトゥルゴバスキ国に転移と。
もちろん魔法でね。魔術の転移では、行ったことのある所しか行けない。
魔法の転移は、場所が特定できれば大丈夫だ。

創造の魔法で特殊な双眼鏡を作った。それは、自分が見たい場所が見えるもの。
だからトゥルゴバスキ国の国都の外れを確認して、そこへ転移するのさ。

町の外れから国都の外れを確認して転移した。

37

＜トゥルゴバスキ国＞

落着き先を決めるためにギルドへ向かった。
ギルド登録している者は、ギルドを介してだと多少便宜を図ってもらえるからだ。

ギルドのカウンターで
「すみません。1ヶ月くらい泊まれる宿を紹介して欲しいのですが。
できれば、食事付きが嬉しいです。」

「予算はどのくらい？」

「1ヶ月で1フォンくらいで。」残金は、9フィンか。まぁ余裕か。

「それだけ出せば、結構選べるわ。1フォン出せるなら、食事の良い店選べるわ。」

日本より物価安いなぁ。1日3，200円で食事付きか。
ギルド割引が5割引きなら納得だけど。まぁ、お勧めの宿でいいっか。

「1フォン出しますのでお勧めを紹介してもらえませんか？」

「私のお勧めは、お城からは反対方向で遠くなるけど。
でも、食事がおいしくて、お店の人が良い人たちなのよ。」

「是非そこをお願いします。」

「紹介状を用意しますのでお待ちください。お店の名前は、ソフィアです。

この通りを1本中に入って、城と反対方向へ歩いて行って十数軒目になります。

看板でわかると思います。」

紹介状を受け取って、ソフィアへ向かいました。

ソフィアは、入り口が食堂になっていました。昔ながらの食堂って感じです。

「すみません、ギルドで紹介されて来ました。」

中へ入って声をかけました。まだ、夕食の時間には早いのでお客さんがいません。

「は～い。お待たせしました。」おかみさんらしき人が出てきました。

すらりとした美人な獣人さんです。耳がきつねさん？

「これが紹介状です。

今日から1ヶ月朝・昼・夜の食事付きでお世話になりたいのですが。」

「ギルドからの紹介状ね。1ヶ月ね。あら？朝・夜だけじゃないの？」

「すみません。昼は、外へ行きますのでお弁当をお願いできませ

んか？」

「お弁当の料金は2フィンになります。この宿は、前払いだけど大丈夫？」

「はい、1フォンと2フィンですね。今お支払すればいいですか？」

「そうしてもらえると助かるわ。このまま部屋へ案内するから。」お金を支払い、おかみさんに着いて二階の部屋へ行きました。

「この２０５の部屋になります。　何か必要なものがあったら言ってください。

夕食は、次の鐘が鳴ってからならで、朝食は3の鐘が鳴ってからになるわ。」

この国は、魔法で3時間おきに鐘が鳴るようになっていました。

０時が1の鐘、3時が2の鐘、6時が3の鐘、9時が4の鐘、１２時が5の鐘、

１５時が6の鐘、１８時が7の鐘、２１時が8の鐘です。

部屋は、机と椅子、ベットと一般的な作りになっています。

魔法で押入れサイズの亜空間を創り、意識すれば扉が見えるようにしました。

そこへボストンバックを置いて、お金とナイフをポケットに入れて、ソードとベットにごろりと。

そのまま寝てしまいました。

7の鐘で目が覚めました。お腹も空いたので食堂へ。

そういえば、今日一食目？まぁそれはいいか。
夕食は、シチュー、パン、サラダでした。普通においしく満足です。

宿の裏で結界で見えなくして、シャワーを浴びるか。
部屋でローブと服を脱ぎ、海パン（シャワー用に作った）になって
結界を纏ったまま転移。
見えないといっても、さすがに裸で外にいるっていうのは嫌なんで。
ついでにビーチサンダルも履いて。

宿の裏は、誰もいませんでした。
温水を魔術で出してシャワーを浴びて、乾かして部屋へ戻りました。
すっきりできて満足。もう、今日はこのまま寝る。
こちらの世界にきて、やっとまともに眠れそう。

明日からは、忙しくなるな。冒険者としてお金かせがなきゃいけないし。
ひとまず頑張りますか。

38

“海、おはようございます。”クレアルから挨拶された。

“おはようございます。”ソード、姿は見えないけど・・・。
剣に触れているから会話が成り立っているのだろうか？

“クレアル、ソード、おはよう。
ソード、今会話がなりたっているのは、剣に触れているからか？”

“そうですね。私に触っていただかなくてもこの町の中くらいなら会話できると思います。それ以上離れれば無理です。
会話できる範囲であれば、私に来るように呼んでいただければ、そこへ行くことができます。”

じゃあ、日頃一緒に行動しなくても、会話もでき、剣を持つこともできるのか。

“もうひとつ確認だが、今日から魔物と戦うけど大丈夫か？
魔物を殺すことになる、ソードに影響はないよな？”
影響がないといいなと思いつつ聞いてみた。

“大丈夫です。普通の剣と同じです。
ただ、永く大切に使ってもらえたので私が存在するようになっただけです。
おかげで私も力を持つことができました。ご主人さまの助けになれば嬉しいです。”

“そっか。よろしくな。”ソードに影響がないとわかってほっと

した。

“さて、食事行ってくるな。”

１階の食堂で朝食を食べて、昼食の弁当を出かける前に受け取れるように頼みました。

部屋へ戻って、ローブを着て剣を差して、出かけに弁当を受取りギルドへ向かいました。

ギルドの受付は、昨日と同じお姉さんでした。

「昨日はありがとうございました。しばらくこちらで厄介になります。
よろしくお願いします。」

「まぁ、丁寧に。こちらこそよろしくね。
ところで今日は何かしら。依頼なら後のボードから受ける紙を選んで持ってきてね。」
話早いなぁ。まぁ、ここには、換金か依頼を受けに来るしかないから当たり前か。

「はい。」
さて、何にしようかな？

ボードには、所狭しとＢ６サイズの紙が貼ってあります。
魔物退治、薬草収集、護衛が大半を占めています。

ここにおちつく予定だから、この町から移動する護衛以外だね。知識があるから適当に魔物退治と薬草収集ってのもありだけど、依頼を受けた方がお得。

冒険者ランクはＡから上げる予定はないからＡランク以下の依頼でと。

近場で同じような場所で済む魔物退治と薬草収集を４枚ボードから剥がしました。

「すみません。この４枚の依頼を受けたいのでお願いします。」

「４枚はいいけど期間があまりないわよ。できなかったときのペナルティは大丈夫？」

「ええ、今日中に終ると思いますので良いですよ。」

「そう？じゃあ、ギルドの身分証明を出して。」

ブレスレットをつけた腕を水晶の上にかざして依頼を登録しました。

「もういいわよ。頑張ってね。」

「行ってきます。」

ギルドを出て、依頼場所に近い町はずれへ向かいました。

そこから依頼場所へ転移、森の中へ入ってみれば、依頼の魔物に遭遇。

ラッキー、さっさと終わらせましょう。相手に申訳ないけど俺チートなんで。

剣で倒して必要な部位を切り取って依頼の一つを終了。

次は、薬草を取りに行きますか。水辺に多い薬草が、２種類。
水の流れる音がかすかに聞こえるので近くに川がある模様。
音の聞こえる方へ向かいました。

前方に、魔物いますね。ごめん、と二つ目の依頼終了。
そのまま歩いて行けば、川の手前に薬草がありました。
手早く摘んで、すべての依頼が終了しました。

現在の位置から町はずれに転移したら簡単だけど、このままギルドに戻ると時間が・・・。
早く終わりすぎたよ。

もう少し価値のある薬草を取りに行くか、この国の情報収集に城へ忍び込むか。
今後のこともあるからお金になる仕事を優先しておこうかな。
そのうち城も行かないとな。

この近辺にある多少価値のある薬草は、へぇ数種類あるのか。
で、面倒なので魔物がいなさそう場所のも数種類。全部取りに行くとしよう。

39

薬草を取ってギルドへ戻りました。

まず、依頼の４枚の商品を提出しました。依頼料４フィンと。
で、そのまま薬草の換金へ。１フォンか。やばっ、外野が多かった。

「兄ちゃんすごいなぁ。」と外野のおっさんに声掛けられました。

「まぁ、薬草には詳しいもんで。」本当はすべてのことにだけどね。
さっさと戻って夕食にしたいので適当にあしらって宿に戻りました。

部屋へ戻ってローブを脱いで、楽な服装に着替えてバッグにお金を入れました。
残金２フォン１フィン。宿泊とすべての食費を支払い済みだからお金が減らないな。
このまま２０フォンは貯めて、聖と動く時の資金にしないとな。
やっぱり男は甲斐性さっ。
ただ、この世界で俺と聖はお金がなくても生きていける。
森に行けば食糧には困らないっていいよなぁ。

夕食を１階で食べて、昨日と同じように裏でシャワーを浴びて就寝しました。

魔物退治に薬草収集に明け暮れている間に１ヶ月が経過した。
手持ちの金も４０フォンと予定の二倍にもなり、目標は達成と。

毎日、ギルドに食堂と人が集まるところにいる訳だから城へ忍び

込まなくても
この国の状況がわかってきた。

まず、この国は平和で王の政治に不満を持つ民は少ない。
多少は、意見が合わないっていうこともあるからしかたがないよな。
民の代表者と月に1回会議を行って状況確認もしているらしい。
これについては、忍び込んで確認をしようと思っている。
ちょうど今日の午後でこれからだそうだ。
民の代表が、食堂で話していたから確かだろう。

魔法で自分を見えなくして、代表について城へ入りました。

広間に城の要職についている人物達に代表数名が席についています。
その周囲に騎士が数名、王があとから席につきました。

会議の内容は、特産物のでき及び前回の議題だった橋の老朽化の対応確認だった。
ふ～ん、他の国に売る新しい特産物の検討か、おもしろいな。

この国は、商業の国でもあるからなんでも揃えることができる。
加工して出荷もいいよなぁ。俺は、デザートが好きなんだけど果物しかみていない。
デザートを作って売るのもいいなぁ。何を作ろうか。

あれ？終わった？まぁ何も問題ないからいいか。
ちょっと王について行くか。どんな人物か知りたいし。

そのまま広間を出ると執務室へ入って行った。
俺は、魔法で壁を通り抜けて中へ。王は、机の上の書類とにらめっ

こしていた。
休憩もなしで、真面目だな。どんな書類なんだろう。
王の横へ移動して書類を覗き見。嘆願書？盗賊退治か。どうするのかな？
要検討とサインを記入し、仕分けして置きました。
「見ていて楽しいのか？」この部屋には誰もいません。独り言かな。
「私は、この国一番の魔術師でもある。魔法を感知できるのだがな。」
へぇ、王が一番の魔術師ってどうなんだ？警備が楽でいいのか？で、俺のことがわかる訳ではないな。精霊だと思っているんだろうが。
“クレアル、この王は俺のことがわかっている訳じゃないよな？”
“そうですね。気配だけでしょう。どうしますか？”
“このままでいいさ。もうしばらくしたら帰るし。”
「なんだ、相手はしてもらえないのか。
というか返事してもらっても聞けないような気もするが。
会話できるといいんだがな。」
・・・。
「精霊が見えるものも、話ができるものもいない。
魔法を使っていない状態だと気配もわからない。
今、魔法を使っているのはどんな理由なんだろう。悪くない理由だとありがたいが。」

偵察だから良くも悪くもないかな。もうしばらく様子を見せてもらおう。

その結果どうするかもまだ未定だ。

王の書類の決裁は終了した。俺もそろそろ帰ろう。

40

宿へ戻っておかみさんのソフィアさんに空き時間に料理させて欲しいと頼みました。
夕食の準備に入る前の1時間くらいならと使用許可をもらいました。
そうそう、宿の名前はソフィアさんの名前から付けたそうです。

宿へ戻る前に、プリンを作ろうと卵と砂糖と牛乳を買ってきた。
これなら簡単にできるので。アルミの容器を魔術で作ってと。
鍋を借りて蒸して完成。あとは、冷まして味見。
おや？いつの間にかおかみさんとだんなさんが後ろにいました。

「海、それは何？」おかみさんはプリンが気になったみたいですね。
「俺のいた所ではプリンというデザートです。冷めたら食べてみますか。」

「ええ、是非お願い。」
「海、俺もな。」
「了解。」
時間が無くなるから魔術で冷まそう。

「どうぞ。食べてみてください。」
「「じゃあ」」

「へぇ、初めての味だ。食後にいいかもな。」
「おいしい。この作り方教えて。」

「海、この後時間あるか？」

「ええ、ありますけど？」
「今日の夕食のデザートにこれ作ってくれないか。」
「かまいませんよ。」
「数はどのくらいにしますか。」
「そうだな、２０個くらい頼めるか。」
「わかりました。今から作ります。ソフィアさん一緒に作りますか？」
「ええ、お願い。材料は何？」
「卵と砂糖と牛乳とこのような入れ物をお願いします。」
ソフィアさんが、材料を買ってきて、だんなさんも一緒に作りました。
もの珍しさのせいかあっというまに完売した。
次は、小麦粉をプラスしてホットケーキとメレンゲかな。
朝にいいな。明日の朝食後に相談してみよう。
あと寒天っぽいものを見つけて果物のゼリーもいいよなぁ。
？冒険者のはずが、この店のパティシエに納まりました。
給料は、１日で１フィン。昼間は自由時間なんで城の探検と。
もちろん無断での探検。
あっという間に１４日が過ぎた。
この国に問題はなさそうなので明日には移動しようかな。

宿泊費は、ちょうど明日までの二週間分を支払ってあることだし。
今から挨拶回りだけしてくるとするか。
そうそう結局王とは何も話していない。いつか会うことがあれば教えようかな。

今夜こそ、聖に連絡をいれないと忘れられそうだなぁ。
顔みたいなぁ。最強の保護者がついているから問題はないだろうけど。

＜深夜＞

さて、そろそろ電話するとしようか。
クレアルに聖のところの結界を頼んで電話した。

久しぶりに会う聖に愛おしさが溢れ出て抱きしめた。
俺は聖人君主じゃない。わかってないだろうなぁ、ギリギリだってこと、はぁ。
お風呂に逃げたことも。じゃなきゃ、押し倒してたかも。

さてと、聖も寝たことだし、精霊の皆とブランと挨拶でもしますか。

“ブランもだけど、皆も初めまして、海と言います。これからも聖の事お願いします。
俺は、とにかく聖が一番大切だから。もちろんこの世界よりもね。”

“わかっている。私たちも聖を気に入っている。”とブラン。

“僕は風の精霊でヴェントと言います。クレアルを助けてくれて

ありがとう。”
“ぼくは水でアクア。”
“私が光でリュミです。”
“僕は闇、オプス。”
“わたくしは火の精霊でフラムです。”
“僕は大地でティエラです。”

“一応、神さん的には好きにして良いみたいで、魔法を使えるようにしてもらえた。
基本行動は、聖の望むことになる。今回は、グリューネさんを助けることになるかな。
この国の王は最低だから長居したくないと思ってる。
ただ、隣の国に迷惑かけそうなら手を打たないとと思ってるかな。”

“我らは、人間に干渉していない。が、聖への危険は許す気はない。
だから、今回は海の指示にしたがってグリューネを助ける手助けをするとしよう。”

“ありがとう。助かります。ところで状況を教えてもらえますか？”
“ヴェント。”
“はい、グリューネさんたちは、魔法が掛けられた牢に捕らわれています。
魔法を使える海ならば問題はないと思います。ただ、様子のおかしい勇者がいます。”

“ありがとう。勇者については現地で相談させて欲しいです。
今は、少し休ませてもらいます。おやすみ。”
“おやすみ。”ブランが代表で挨拶してくれた。

勇者は、いないはずだ。俺はクレアルを助けることで召喚の魔方陣を壊してきたからな。
なら偽物ということか。くそっ、調べないと聖が動きたがるな。
勇者については、グリューネさんを助けてから考えよう。何か知っているかもしれないし。

少し横になって体を休めるか。

41

明るくなってきたので目が覚めました。日本で言うと9時過ぎくらいでしょうか？
隣のベットを見ると海はまだ寝ています。数年ぶり？に寝顔を見ました。
やっぱり王子様って感じね。本人は嫌がるけど。
見た目がいいから目の保養よ。なんで私に構うのか不思議だけど。
姉？
鳥の刷り込みと一緒かしら？物心つく前から一緒にいた時間が一番長いから？

「聖、おはよう。俺に見とれていたのかな？」えっ、いつの間に起きた？

「おはよう。そうよ。目の保養よ。」
ここで恥ずかしがってごまかすと勘違いされるからね。

「ふ～ん。」
ふふん、勝った！

「朝食兼昼食の用意をするから、もうしばらく寝てていいわよ。できたら起こすわね。」
「ああ、ありがとう。」

食事の用意をして海と食事を終えた。

「さて、今日の予定だけど。薬草収集を1時間だけして、準備できしだい王都へ転移な。

王都でギルドへ行って薬草の換金と宿の紹介をしてもらう。
　ついでにギルドと宿でグリューネさんと勇者についての情報収集。
助けるだけなら直接乗りこんで終わらせるが、一般市民がどう思っているか知りたい。
聖はどうしたい？」

「海のスケジュールでＯＫ。ただ、薬草収集ってなんのため？
お金なら私もあるわよ。１フォン８フィンよ。」
多いのか少ないのか、よくわからないけど。

「ああ、それはグリューネさんと勇者用かな？
操られていたら魔術の解除の補助とか、体が弱っていたときのためかな。
それと会話の取っ掛かりとか。」

「それなら納得。その薬草って何がいいのかわかる？」

「ああ、この森なら川の中にあるのと川沿いの湿地にあるのがいいだろう。
さぁ、川まで案内を頼むな。」

二人で薬草を採って、王都へ行く準備をしました。

「聖、ひょっとしてここに戻れないかもしれない。
荷物をすべてバックに詰めてくれ。」

えっ？そんなことになるかのか？
でも、そうかも。グリューネさん牢だった。助けるのは犯罪になるのかな？
うわっ、牢破りか。

荷物をまとめるのはいいけど、この世界に来てから着替えが増えたから入らないよ～。
「海、荷物がありすぎて入らない！」
「ああ？ボストンとか大き目のバックか？亜空間の魔法で大きさを調整しようか？」
「何それ？」
「見たらわかる。とにかくバッグ出せ。」
「バックないよ。この袋だけ。」
「ふう。ボストン創るから。俺と色違いでいいよな？何色がいい？」
「こげ茶でいい。」
何もなかったのにこげ茶のボストンバックが現れました。
「聖、このバックに手を入れて。で、そこの先にチャックがあるとイメージして。
イメージができて開ければ、奥は、そのボストンの3倍の大きさの空間がある。
イメージしないときはそのままの大きさで使える。亜空間の重さは感じないから。」
チャックの確認ができたので荷物を詰めました。
「ちょっと、何これ。海、最強？」
「残念でした。最強は勇者の聖です。」
「・・・。」

「そうそう、この世界は魔法を使えるものはいない。感知できるものが数人レベルだ。
話す内容に注意するように。」
「了解。」

「さて、全部荷物持ったね。戸締りもＯＫだね。じゃあ、王都へ転移するよ。」
二人とブランは外へ出ました。

「その前に。」
海が急に抱きついてきました。そのまま、額にキス。

「・・・。」抵抗はしていない。だって嫌じゃない。
姉にするには、ちょっとスキンシップが多い気はする。
海とは、慣れてるけど、他の男性だと拒否反応がある。なんでだろう。

42　王都

海の転移の魔法で王都の外れへ到着。

「海、ギルドの場所知っているの？」

「知らん。中央の道を城を目指して歩けばあるさ。さぁ、行こうか。」

そんなもんなんだ。まぁいいけど。

王都だからなのか、いままで行っていた町とはかなり違います。人人人、迷子が怖いですね。迷子って年でもないですが。

携帯で連絡を取れるけど、人前では使えない。

「聖、手。」

海が手を差し出しました。ん、何かくれるんだろうか？

手を出したら、繋いだ、うわっ、そんな年じゃないからはずかしい。

「ちょっと、手を繋ぐのは。」

「はぐれるよりはいいだろ。」

まぁ、その通りです。我慢、下を向いて歩きましょう。なんだか頬が熱いです。

海が、ギルドを見つけたようで手を引かれて建物へ入りました。

さすがに中へ入ったら手を離してくれました。寂しく感じたのは気のせい。

「こんにちは。」とカウンターのスレンダーなお姉さん。

私よりは、年下でしょう。

「こんにちは。この薬草の換金をお願いします。」
と海が使用しない薬草を出しました。
「それと宿の紹介をお願いします。1週間で食事付きがいいのですが。
人数は2名です。食事の美味しいお勧めの店をお願いします。」
うん、うん、食事は大切よね。
「2名でいくらくらいまでいいですか？」
「そうですね。5フィンのつもりです。どのくらいのランクの宿になりますか？」
「中の上かしら。で、食事の良い宿がこのギルドの裏にあるわよ。そこでどうかしら？」
「そこでお願いします。ところですごい人ですが、何かあったのですか？」
「あら？知らないの。勇者のお披露目があったからよ。」
「そうなんですか？知らなかったです。勇者ってどんな人なんですか？」
「そうね、伝説通り黒髪に黒い瞳の青年だったわよ。
声を掛けた人の話だと丁寧な話し方で、近づくと良い香りがするそうよ。」
良い香り？何かコロン？この国の香料については知らないからわからないけど。

「へぇ、そうなんですか。ところで勇者のランクってどうなんでしょうか？
当然Ｓランクなんですよね？この国のＳランクの人と比べてどうなんでしょうね。」

「お城の発表では、かなり強いって話ね。
そういえば勇者を亡き者にしようとしたと、森の魔女とギルドマスターの一人が
捕まったと聞いたわ。
ここだけの話だけど、あの二人に限っておかしいような気がするわ。
二人とも捕まる前日は、ここに来てたのよね。感じも良かったし。
で、ちらりと助けるって話が聞こえてきてたのよね。」
おしゃべり好きのお姉さんですね。こんな話していいのかしら？

「そうですか。そろそろ行かないと。紹介状と換金お願いします。」
さすが、海。あっさりと終わらせちゃいました。

「薬草は、５フィンね。これが紹介状ね。」
とお金と紙を受け取りました。

「ありがとうございます。」とギルドを出て宿へ向かいました。

宿のすぐ手前で
「聖、部屋だけど一緒にするからな。で、夫婦ってことで。」
「なんでよ。姉弟でいいじゃない。」
急に何言い出すんだ？

「嫌だ。部屋で話するから。いろいろ打合せもあるし。

とにかく部屋へ行ってから。」

「すみません。ギルドで紹介されて来ました。」

「は〜い。いらっしゃいいませ。」

紹介状を渡してお金の支払いをしました。そして、そのまま部屋へ案内されました。

ベットが二つにテーブルに椅子2つ。ベットが一つじゃなくて、ほっとしました。

「聖、こんな時になんだけど…。俺と結婚してくれ。真面目に考えてほしい。」

「本当にこんな時に何言ってんの。そんな冗談おもしろくないわよ。」

あら、返事が返ってこない。ちょっとマジっぽい顔？本気なはずないだろうし。

私以外の人だったら勘違いしてたわね。

「ちょっと出てくる。」と海は部屋から出て行きました。

なんだったんだろう？相変わらずよくわからない子ね。

そういえば打合せするって言ってなかった？変なの。

“聖、お前なぁ…”

“何？ブラン。”

“よく鈍いって言われないか”

“なんで知ってるの？”

“見てればわかる。海が気の毒だぞ。”

“？？？”なんで？

43　王都（海）

＜海＞

部屋から飛び出したのはいいけど…。

なんか、やってられない。むしゃくしゃする。

当たり前だよな。プロポーズあっさり冗談にされた。

強制で手を繋いだ、意識してもらえるかなと期待しながら。

姉弟か、ずっと聖にとって俺は家族だったんだろうか。

好意を持ってもらっているのもわかっていた。

ただ、異性としてではなく、弟としてか。

赤ん坊のときからずっと一緒にいるからあたりまえ？

彼氏がいないのは、俺が邪魔しているだけじゃないと思っていた。

多少は俺がいたからだと、自惚れていたんだよな。

そろそろはっきりさせないと前へ進めないと考えていた。

今回のハプニングをターニングポイントとするのもいいかなとも。

（ハプニングってレベルではないが。）

この国でのゴタゴタが終ったら・・・。

結果はわかっているがはっきりさせる。

元の世界に帰るかどうかも聖しだいだな。聖は、帰すつもりだけど。

この世界で魔法と魔術を使っているうちに帰れる方法があることに気がついた。

精霊たちの協力があれば帰れる自信がある。

さてとゴタゴタを終らせるために動くか。

まぁ、だいたいはギルドの人が言っていたままだろう。
なんだか何もかもが面倒になってきた。城に乗り込んで終らせたい。
聖が反対しそうだから我慢するが。
部屋に戻って聖と話をしないと進まないな。
あ～あ、戻りにくいな。
よし、戻るか。
「聖、夕飯食べに行こう。で、まわりの話をよく聞いていてくれ。情報が欲しい。」
「ＯＫ。」
聖と食堂へ。
食事のおいしい店っていうだけ少々早い時間にも関わらず人が入っている。
入っていなければ違う店に行ったけど。
朝食・夕食付きだからおまかせの定食が出てきた。
「「いただきます。」」
「おいしい。」聖の好みで良かった。
「お店で食べるの初めてよ。」
「いままで食事はどうしていたんだ？」
「神殿で食べさせてもらったのと、グリーさん家よ。いろいろ教えてもらったわよ。」
俺にしか聞こえない声で返事してきました。まぁ、当然か。

「そっか、グリューネさんには世話になったな。」
と、差しさわりの無い話をしながらまわりの話を聞いていました。
勇者と森の魔女のキーワードに関する会話は、無かった。
時間が、早いせいもあると思う。
お酒の入る時間にもう一度だな。

「聖、そろそろ部屋に戻ろうか。」
「は～い。」

部屋で改めて作戦会議？
「お酒の出る時間の２１時頃に再度行く。聖はどうする？絡まれるかもしれないけど。」

「海も一緒なんでしょ。なら大丈夫よ。」
この言葉家族としてだろう。異性としてなら嬉しいな。

「２１時までどうする？グリューネさんとこへ顔出しに行くか？」
俺、めちゃくちゃ軽く言ってるな。この世界ではありえないだろうけど。

「行く。でも、どうやって？」

「それが問題。こちらから見るだけなら見えない魔法でこっそりとですむ。
相手から見えないから誰かわからない。魔術だと上位の魔術師とバレる。」

「聖は、精霊たちをどうやってごまかしていたんだ？見えること

言ってないだろう？」
「よくわからないけどお願いしたらって言ってる。」
「なんだ、それ。グリューネさんに怪しまれているな。勇者かもと思われてるぞ。
今回の勇者が偽者だと知ったから、捕まっている可能性があるな。」
「聖が、勇者とバレているなら俺が魔法使っても聖がやったことにしよっと。」
「海も精霊にお願いできるってことでいいんじゃない？」
「精霊に好かれている夫婦ってことで。」
「はいはい。」流された・・・。わかって言ってるけど。
「じゃあ、いつ助けるかはグリューネさんと相談してってことで。」
「ＯＫ。」
「直接、グリューネさんの牢の中へ魔法で転移するから。
聖は、まず俺の渡したペンダントの魔法で姿を見えなくしろ。
ブランたちはどうする？」聖は、ペンダントの魔法を発動。
「ついて行く。」心強いな。何かあっても聖を助けてもらえる。
「じゃあ、俺と聖以外には、見えなくなってくれ。
聖、俺との会話は日本語で。ちょっと今話してみて。」
テレパシーでたまたまでダメ押し、留めなんて勘弁と。へたれな俺。
「海、これ日本語になってる？」

「ああ、意識さえすれば使い分けれる。故郷の言葉ということで。」

誰も知らないからなんとでもなるさ。

「さぁ、行こうか。」俺も見えなくなる魔法と転移の魔法を発動させた。

44

＜海＞

牢の中へ転移。薄暗いなぁ。皆、黙ったまま回りを見渡している。当たり前だけどあまり広くない。

隅で坐っている女性がいた。森の魔女のグリューネさんだろう。なぜならこちらを凝視しているからだ。見えていないはずだが、魔法を感知したのだろう。

聖が声をかけてくれないと困る。俺は初対面だしな。

“ブラン、聖に小さい声で本人に声をかけてくれるよう言って欲しい。

牢の警備の者に見られたくないから姿を現さないようにとも。”

“わかった。”

聖が、ブランから話を聞いて、グリューネさんの方へ行った。

「グリーさん、聖です。小さい声で返事お願いします。どうしてこうなったんですか。

リーコスさんも一緒ですか？」

「聖か、相変わらず想定外の子だね。リーコスはこの近くに捕らわれていると思う。

弟子でもある元魔術師長が捕らわれているから助けにきたのと勇者が気になってだった。

で、勇者が先日私の所にきた宮廷魔術師で、操られていることに気がついた。

魔術で髪と目の色を変えられてな。

それで現在の魔術師長に尋ねに行ったら二人を人質にされて捕まっ

たということさ。
ここに来るまでに逃げれたが、人質がな。勇者の魔術を解いてからでないと身動きが取れない。
こんな状態だ。」

「じゃあ、グリーさんとリーコスさんを今助け出すっていうのはダメだってことですね。
グリーさん達がいるかどうか確認されているんですか？」

「ああ、数時ごとに見まわりがある。いないと二人の命はないそうだ。
あれらは相変わらず最悪だな。」

“ブラン、聖に俺たちもいることを伝えて欲しい。”

“聖、私と海がいることも伝えろ。”

「グリーさん、ここへは私だけではなくてナイトと従兄弟もいるんです。」
従兄弟ね。夫婦と言う気は無い訳か。

「ナイトはわかるが、従兄弟？」

「初めまして、聖の従兄弟で海といいます。聖がお世話になりありがとうございます。
聖に会うために国から出てきて、やっと会うことができたんです。
さすがに今はこのような状態ですが、後日改めて挨拶させていただきます。」

「ああ、私は森の魔女とも呼ばれているグリューネという。

今回は、聖も巻き込んでしまってすまない。」
「いえ、聖の恩人ですし、俺も手伝わせいただきます。なぜか、俺たちは精霊に好かれているようですので。」
「すまないが、当てにさせてもらう。」
「ところで、俺たちはどう動いたらいいですか？今回その確認に来たのです。」
「もし、精霊に頼めるなら、勇者の魔術を解いて欲しい。その後に弟子を助け出してもらえると、私とリーコスはここから抜け出せる。」
「わかりました。弟子の方はどちらに捕まっていますか？」
「この牢のどこかだと思う。」
「わかりました。で、ここから出られた場合どこへ集まりますか？たぶん弟子の方と勇者がいなくなれば、ここに確認にくるでしょうからわかりますよね。」
「弟子の家にある地下室がいいだろう。そこには目暗ましがしてある。確かにに確認にくるだろうな。私がやったと思ってな。すまないが頼む。」
「では、今日のところは帰ります。聖、何かある？」
「ううん。グリーさん気をつけてくださいね。」
「聖、逆だ。お前たちの方が危険なんだからな。」

「気をつけます。」
「では、失礼します。」

転移の魔法で部屋へ戻り、魔法を解除しました。
「聖、もう魔法を解いていいぞ。」

「ええ、予定の時間だけど情報収集どうする？」

「一応アルコール飲みながらやるさ。」

「聖はどうする？森の家に戻って風呂へ入ってくるのもいいんじゃないか？
ただし、精霊に頼んで魔法でな。魔術は今は止めた方がいい。」

「お風呂にする。行って来るね。ブラン転移お願い。」

「わかった。終ったら呼べ。」言うと聖を転移させた。

“ブラン。それと皆に頼みたいことだある。
今回の件がおちついたら、聖を元の世界に帰したいと思う。
申し訳ないが手伝ってもらえないだろうか。皆に手伝ってもらえればできると思う。”

“もう少し聖と一緒にいたいが、聖が帰りたいなら手伝う。それでいいな。”

““““““はい。””””””

“みんな。すまない。ありがとう。”
皆が聖を気に入ってくれていると知っているだけに・・・。

“さて、食堂に行くけどブランどうする？”

“行く。”一人になりたくないとわかったのかな？

45

＜海＞

食堂でこの世界のアルコールとつまみを注文してブランと食べながらぼーっとしてた。
情報収集なんだから、周囲の話を聞きながら。

冒険者や魔術師が大半のせいか、グリューネさんやリーコスさんの名前が出てくる。
聞いている限り、この二人は慕われているようだ。
それと皇太子がいて王に意見したため、牢に捕らわれているそうだ。
あの王ならやりそうだな。一緒に助けて様子をみるのが一番かな。
皇太子も慕われているようだし。

さて、部屋へ戻るか。
“ブラン。部屋へ戻ろうか？”
“わかった。”

部屋には聖がすでに戻っていた。ブランが戻したのかな？
「海、どうだった？」

「グリューネさんやリーコスさんには、皆好意的だぞ。
それと民に人気のある皇太子も牢に捕まっているそうだ。
一緒に助けた方がいいと思う。今晩か明日の深夜に行動を起こそう。
聖はどっちがいい？」

「遅くなっても良いことがないから今晩動かない？

今晩勇者の所へ行ってどうするか、決めるのもありかな？手分けする？」

「ん？そっちは、俺がやるから、聖は元魔術師長の地下がどこか調べて欲しいな。
で、そこに一度行って魔法で結界を発動させといて。そこへ皆を転移させるから。
グリューネさんとリーコスさんは入れるようにな。その後は、この部屋に戻ってて。」
これなら聖は安全だな。精霊たちも一緒だし。

「わかったけど、海は大丈夫？」
「無理しないからいいさ。ダメだと思ったら明日にするから。
今から風呂へ入って寝て、深夜に起きるから。風呂借りるね。
聖は、今動いても問題から。じゃ、行ってくる。」

森の魔女の家にある風呂へ入って戻ったら、聖もブランもいなかった。
さっそく動いているんだな。俺は少し眠ろう。

ー深夜ー

目が覚めた俺は、聖が帰っていないことを確認した。
居場所が気になるので携帯で見てみた。部屋の一室でブランと一緒にいる。
これなら心配はないな。今の映像で元魔術師長の地下は確認できた。
では、勇者のところへ行くか。居場所は、わからない。
が、俺が前に案内された部屋だろうと推測する。

姿を消して部屋へ魔法で転移した。

黒い髪の人が、部屋で寝ていた。瞳を見るために起こしてみる。
目を開けたが、反応がない。黒い瞳だ。ビンゴ、やっぱり勇者だ。
しかし、魔術で変えられているとわかる。髪もか。

魔術を解いた。茶色の髪と瞳。あと、勇者から甘い香りがする。

噂通りか。薬草で意識を操るのと、禁術とされる傀儡をと二重か。
一応、新しい魔術師長、知識はあるんだな。

勇者の魔術を解いて姿を現し、持ってきた薬草を飲み薬にして無理やり飲ませた。
数分待ったら意識が戻ったようだ。きょろきょろして挙動不審。

「ここはどこだ？」結界を発動させておいて良かった。周囲に声が聞こえると面倒。
「勇者の部屋。」

「お前は誰だ？」当然言うよな。
「あんたを助けにきたものだ。」

「はぁ、なんでだ？」
「あんたは、操られて勇者とされていた。
グリューネさんたちが様子を見に来たが、逆に人質にされて捕まった。」

「あんたと元宮廷魔術師長を助けないとグリューネさんたちが逃げれない。」
「なんだって？俺が人質？」頭を抱えて座りこんだ。
単純なのか、素直なのか知らんが、初対面の人の言葉を信じるなよ・・・。

信じてもらわないと困るけど。

「おい、時間がないから移動するぞ。」
グリューネさんではない強力な魔力を持つものの気配を探してその牢へ転移した。

「魔術師長さま。」と勇者が近寄った。
「ユーチェ、戻ったのか。」

「やっぱり事実だったんですか。」へこんだ模様。

「すみません。ここに皇太子がいると聞いたんですが、まともな人物ですか？」
かなり失礼な質問だよね。

「はい、民を思うよい方です。」おおっ、スルーして返事してくれました。
あなたもなかなかな人物ですね。

「じゃあ、一緒に逃げましょう。どこかわかりますか？」
「隣です。」あらら、聞こえてますね。俺、この国に良い印象ないから構わないけど。

「じゃあ、連れてきます。」隣に転移。

「聞こえてましたよね？」世話になっていないから敬語を使う気なし。逆に親に怨み・・・。
皇太子の容姿は、俺と同じくらいの年齢で身長は少々高い。
金髪碧眼の王子って王道？よくわからん。

「移動します。」

さきほどの牢へ。

「話は後からということで、先に移動します。」

元宮廷魔術師長の地下室へ。

「ここは、私の家ではないか？」自分の家だから気づきますね。

「そうです。グリューネさんに合流するのに、ここがいいだろうと言われましたので。」

「グリューネさんたちも明日には来ると思います。
ただし、追っ手がこの建物に捜査に来ると思います。
この部屋は捜査されませんので、グリューネさんたちが来るまで出ないでください。
食べ物は明日の朝に持ってきます。」言うことはそれだけなので宿の部屋へ転移した。

元宮廷魔術師長がいるから住みやすくするだろうし、心配もないだろう。

46

＜海＞

「聖、ただいま。」

「おかえり。」ベッドにいるけど起きていたんだな。

「こっちは終ったよ。後は、明日の朝に食事を持ってくぐらいかな。」

「心配してたのよ。携帯を鳴らしていいかわからなくて、用意が終ったと連絡できなくて。」

「ごめん。携帯で確認して場所はわかってた。ブランに伝えれば良かったね。」

「そっか、そうだね。ブランたちにお願いするの忘れてた。」

「さて、朝まであまり時間がないけど寝よ。おやすみ。」

とにかく聖とのことは、きりがついてから。

「そうね。おやすみ。」

数分後、寝つき良いよなぁ。

明日の朝、城は大騒ぎだろう。

奴にとって気にくわない人間達が逃げていないんだから。

八つ当たりができて嬉しいのが本音だったりして。

奴のことを考えていると眠れそうなのが不思議だな。

―翌朝―

「海、おはよう。」
「おはよう。」

「食事してから食料の調達でいいの？」
「それでいいかな。食料の調達よりも、ここの食堂で5人分の弁当を作ってもらった方がいいな。」

食堂で食事をして、弁当を5個頼んだ。一度部屋へ戻ってから出がけに受取ることにした。
部屋から転移だと不在を怪しまれるから、町外れからの転移が無難だろう。

「聖とブランはどうする？」

「グリューネさんとリーコスさんが来ているかもしれないから行くわ。」
「行く。」

「じゃあ、そろそろ行くか。」

弁当を受取り、代金の支払いをすませ、町外れから地下室へ転移した。

昨日とは部屋の様子は変わり、部屋が拡張され仕切りの奥にベッドが三つ。
テーブルも大きくなっていた。
そのテーブルに弁当を並べていたら、奥から元勇者のユーチェさんが出てきた。
聖は、飲み物を用意している。昨日、森の家から持ってきたよう

だ。

「「おはようございます。」」俺と聖の挨拶が重なった。

「おはようございます。」元勇者からの挨拶。

「お弁当を買ってきましたので食べて下さい。

グリューネさんとリーコスさんは、まだのようですね。

いつこちらに合流するかわからないので、一緒に用意しました。」

「君たちは、いったい何者だい？」

「こっちはグリューネさんの弟子で、俺はその従弟です。

今できることもないので、帰ります。昼に食事を持ってきますので。

グリューネさんにもそう伝えてください。もし、移動するならしてもらっても結構ですと。

では、これで失礼します。聖、行こか。」

「いいわよ。」聖の言葉を聞いて町はずれへ転移した。

「聖、元の世界へ戻りたい？」唐突だったかな？

「もちろん、戻りたいわよ。」無理やりだから当然だな。

「じゃあ、グリューネさんたちに会って挨拶をしたら戻るか？」

「えっ、戻れるの？」ああ、聖だけだけどな。

「ああ、ブランたちが手伝ってくれるから、俺の魔法で戻れる。」

「そうなんだ、嬉しい。

この世界のことよくわからないから不安だったし、仕事が気になっていたのよ。

でも、行方不明の間が問題かしら？」

「大丈夫だ。召喚された瞬間に戻すから。もう一度、変装はしろよ。」
「そのくらい大丈夫よ。」
「聖、元の世界に戻ったら結婚しないか？」最後の確認だな。
二人一緒に戻れないから元の世界では無理だが。
もし、結婚してくれるなら、この世界でになる。
「海は、弟なんだから無理よ。」そっか、やっぱり弟か。
真面目に返事をもらえただけ、良しとしないとな。本音としては半々だと・・・。
元の世界に俺は戻れない。ちょうどあきらめられていいかもな。
こちらの世界でハーレム目指すとするか。ははっ、ありえねー。
「昼まで寝てくるから、聖は町をぶらぶらしたら？昼食の時間に起こしにきてくれ。」
「了解。ブラン行こうか？」
聖を見送ってから宿の部屋へ戻った。
ベッドの上でゴロンと寝ころび、聖のことを考えた。姉として。
世話になったよな。まだ、しんみりするのは早いな。寝よ。

47　王都（聖）

＜聖＞

海と合流してから、あっという間に何もかも進んでいった。
ひとまず助ける必要があった人も助けたし、グリーさんたちが合流できれば終了。
海が帰れるって言ってたから、グリーさんにお礼を言って国に帰るって言えばいいわね。

グリーさんにはお世話になったから寂しいけど、それ以外に何もない。
この国には殺されかけたし・・・（私が気づかないとこで）。あっさりと帰れるわ。

で、さっきの海だけど変だったな。
泣きそうな顔でプロポーズされてしまった。
おかげで冗談にもできず、真面目に答えてしまった。
私の立場じゃ弟としか言えない。

結婚か、親しい男性はいないから、海でもいいけど、姉弟じゃねぇ。
（結婚してもいいと思うほどブラコンなんですが、それがなにか？）

結婚については、母親が一緒なんで、倫理的に無理です。
海は知らないって、この国に来て確信。だって、３回プロポーズされましたもん。
なぜ、生まれてから一緒にいる時間が一番長いか理由に気づいていない。

血が繋がっていなければ、即答したんだけど。
弟とわりきっていないけど、まぁ、なんとか整理できているって感じ。
弟じゃなくても、年とか容姿とかつりあいとかでぐるぐる悩みそうだけど。
まぁ、しょうがないと。

さてと、この国もあと少しだけなんだから見学しなくちゃね。
“ブラン、みんな、何かしたいことある？”
“その辺で人間観察でいいんじゃないか。約束まであまりないし。”
“そうね、そうしましょう。このまま歩いて座れるとこ探そうね。”

歩いていくと公園のような場所にたどり着きました。
ベンチがありましたので、そこへ腰掛けました。

屋台のようなものが段々増えています。
あとで昼食として買っていくのがいいかもしれないですね。
適当に購入して皆で地下だけどピクニック風に。

“ブラン、私帰りたい。海が言うように助けてくれる？”
“我らは、聖が帰ることを望むなら手伝う約束を海としたぞ。”
“みんな、ありがとう。”
“聖、そろそろ海を起こした方がいいのではないか？”
“そうね、宿へ戻りましょう。”

部屋の中では、海がまで眠っていました。
「海、そろそろ起きる時間よ。」すぐに海は目を覚ましました。
「ありがとう。どこで昼を食べたい？」
「広場の屋台がいいなぁ。地下への差し入れもそこでどうかしら？」
「そうするか。じゃあ、行こうか。すぐに出れるよ。」
「案内するわね。」
広場の屋台で気になったのを注文してベンチで食べました。
ある程度お腹が満足したら、二人で手分けして5人分の食べ物を購入しました。
その後、町外れから地下室へ転移しました。
地下室には、グリューネさんとリーコスさんも合流していました。
無事な顔を見てほっとしました。
「食べ物を買ってきましたので食べてください。」
「聖ありがとう。なんの手も打てないときに来てくれて助かった。」
「いいえ、当たり前ですよ。弟子なんですから。
グリーさんもリーコスさんもご無事でなによりです。」
「グリューネさん、改めまして聖の従弟の海です。

聖が世話になりありがとうございました。
聖と会えましたので明日にでも国へ連れて帰る予定です。」
海が挨拶しました。自分で言う予定だった帰る話もしてくれました。
でも、明日って？まぁ、早い方が嬉しいけどね。

「聖帰るのかい。」
「はい、海が連れて帰ってくれますので。
長らくお世話になりありがとうございました。」

「そうか、寂しくなるねぇ。」

「私もです。グリーさんには本当に感謝しています。
大変な時に手助けもできずにすみません。」

「今回ので十分さ。気をつけてお帰り。」

「はい。ありがとうございます。グリーさんもお気をつけて。」

「では、失礼します。」海の挨拶で、町外れへ転移しました。

47　王都（聖）（後書き）

べたな展開になってしまいました。
でも、目標はハッピーエンドです。

48　ゴルア王国から日本へ

＜聖＞

「聖、この世界でやりのこしたことはないかい？」
「何？急に。特にないわよ。」

「じゃあ、宿に戻って持って帰るものの整理だな。その後で夕食ってことで。」
「了解。宿に戻りましょうか。」

元の世界から持って来たものと、こちらの世界で購入したもの、分けるのに時間はかかりませんでした。

「海、持って帰れない物どうしょう？」
「一緒に片付けるから。」と言われたので渡しました。海は、一つにまとめてどこかに入れました。

海も終わったようです。

「聖、早いけど夕食にしようか？」
「いいわよ。」

食堂で夕食をのんびりととりました。

「聖、今から森の家のまわり案内してよ。」と海。
「そうね、最後に行きたかったから、ちょうどいいわね。」

日が沈むぎりぎりの時間でしたので、暗くなる寸前でした。

グリーさんの家から川までのんびり散策しました。
ブランはもとの姿の戻り、妖精さん達も一緒です。

明日の朝にお別れまだと思うと感慨深いものがあります。

魔物も現れず平和な一時を楽しみました。

「聖、お風呂へ入っていけば。俺は、もう少し散歩してるから。上がったら呼んで。」

「そうさせてもらうね。」

お風呂から上がって、海へ携帯で連絡しました。

「聖お待たせ。町はずれに転移するね。」

宿の部屋へ戻ってから、海が風呂へ行ったのでベッドの上でゴロゴロしてました。

明日には元へ戻れると思うと嬉しいなぁ。とんでもない1ヶ月と数週間だった。

いろいろ思い出しているうちに寝てしまいました。

「聖、おはよう。」海の声で目が覚めました。

「おはよう。」

「朝食後に宿を引き払うから。その後で、俺が最初に転移した森から元の世界に戻る。」

「OK。」食堂へ行き、食事を取って、宿から町はずれへ。

「ちょっと待って、この結界に中へ入って。邪魔されると困るから。」
ここ最近、海にまかせっきりですね。お姉さん失格？

「さてと、ここに扉を出すから、そこの先は仮装パーティの控室に繋ぐからね。
おれは、場所を固定させるから、ブラン達は扉を通れるようにしてくれ。」

「海、できたぞ。」ブランが海に返事しました。
「ありがとう。聖、荷物を持って扉を通っていいよ。」

「ブラン、みんな、ありがとう。元気でね。」
「聖こそ元気でな。」ブランが代表ですね。

荷物を持って扉を通りました。中は、更衣室。
私が変装した場所ですね。本当に戻れたんだ。
さて、また着替えるの嫌だなぁ。
そうだ、海は？と後ろを振り返って扉を開けました。
ホテルの廊下でした。どこに行ったのかしら？

そういえば扉を通る寸前に何か渡されたわね。手紙？メモ？

「聖へ。
俺は、元の世界へ戻れてないから、探してもいないぞ。
扉の固定の魔法は、そのままいないと発動できなかったから。
そんな理由で、聖だけ何とか戻したって訳。
聖がいなくなったことで俺はこの世界で最強になれたな。
だから、ハーレムでも作って楽しい人生でも送るよ。

親父とお袋宛ての手紙も同封したから渡しておいてくれ。
幸せな人生を送ってくれることを遠くから祈っている。じゃあな。」

海、何考えているのよ。一人だけ帰りたいなんて言ってないのに。
もう二度と会えないってこと？なんなのよ。
まだ、離れる心づもりなんてできていない。
早く帰っておじさんとおばさんの所に行かないと。

パーティの関係者に急用で帰ることを話して、海の家に急ぎました。

おじさんとおばさん宛ての手紙。
「親父、お袋、すまない。異世界へ召喚されて戻れない。
ファンタジーな世界で俺が最強なんだぜ。
この世界で楽しく生きていくから心配しないでくれ。
俺としては、親父たちが心配だが、なんともできない。
信じられないかもしれないが、聖も一緒だったから聞いてくれ。
戻れない理由は、俺が戻れる魔法がないからだからな。
聖のこと頼むな。じゃ、元気で。」

最初に手紙を読んだおばさんは、何ばかなこと言ってるのと笑ってました。
おじさんは、私の顔をみて冗談ではないと感じたようです。

「おじさん、おばさん、本当なんです。」異世界での私と海のことを説明しました。
何とか信じてもらえたようです。しかたがないなと苦笑したおじさん。
海らしいとおばさん。

私の手紙もおじさんとおばさんに渡して家に帰ることにしました。

帰り道で車のヘッドライトが眩しいと思った数秒後にすごい衝撃を受けました。

「あら、ブラン、数時間ぶり～。私どうしたのかしら？」

49　ジリー

＜ジリー＞

ージオ国（魔族の国）ー

「お父様、私、勇者が見たいのでゴルア王国へ行ってきます。」
「ジリー、何を言うんだ。あんな危険な場所へ行かせられるわけがなかろう。」

「あら？お父様の次に強い私ですよ？この世界で二番ではありませんか？」
「二番と言っても魔力は私より多く、魔術師として私を抜くのも時間の問題であろう。
しかし、勇者は私を倒せる力を持つと言われている。危険だ。」

「大丈夫です。遠くから見るだけですので。護衛も無しでお願いします。」
「そんなことできるわけなかろう。」

「この国のものを連れて行くと足手まといです。」
「しかし、人間の国についてあまり知らないのではないか？」

「いいえ、トゥルゴバスキ国へは、よく遊びに行ってますよ。」
他の国も・・・。
「ジリー、聞いてないぞ。」言ってませんもの。

「反対されますので言ってません。」
「護衛と侍女は何をしていたんだ。」

「あら、影を置いていきましたから、気づかれませんよ。」
これ以上反対したら実力行使です。

「ジリー・・・。好きにしなさい。」あら、よくわかってますね、お父様。

「勇者のお披露目を見るだけですので、2日以内に戻りますね。」
「戻らなければ、皆で探しに行くぞ。」それは、困りますね。戦争になります。

トゥルゴバスキ国まで転移して、そこからゴルア王国までどうするかね。
愛馬？のジーンと一緒なら1日かからずに到着できるわね。
ゴルア王国に一泊して、勇者見物をして、町外れからここへ転移で戻ればいいわね。
宿で一泊できなくても、ジーンとなら野営で構わないし。

食料は、トゥルゴバスキ国で購入してと。さずがに女の子の姿で一人旅は駄目ね。
男の子に変装してけばいいわね。後は、勇者のお披露目の日待ちね。

早く五日後のお披露目の日が来ないかしら。

えっと、改めて自己紹介をさせていただきます。

名前は、ジリー。
ジオ国の第一皇女として生まれました。一応皇太子。次期魔王で

す？
現在、１０歳。
容姿は、人と同じで、黒髪、赤い瞳。（赤い瞳は魔族の証。）魔力が以上に多い。

父親は、現在魔王のジルダキュ。平和主義者。
数百年かけて争いの無い国に制定。ジオ国だけで自給自足できるようにしました。
ジオ国全土に鉄壁の防衛術を展開中。王の許可か魔族と一緒でなければ侵入不可能。
尊敬できる父親です。
私に内緒で人間の友人がいるみたい。たまにお父様の部屋から気配がありますので。
紹介してもらえないのかしら？お話してみたいわ。

母親は、エルフ族のフィーア。
奴隷商人に捕まりそうになっていた所をお忍びで視察していたお父様に助けられたそうです。
あまりにもきれいでお父様のひとめぼれですって。
お母様も助けてもらったときにひとめぼれしたわっておっしゃってました。
相思相愛で、いまだにラブラブです。
お母様は、私の良き理解者です。私の考えにも賛同していただいています。

ジオ国は、魔族の国。
見た目は人に近いが、赤い瞳のもの。（人よりも魔力が多い。）
獣人、人からかけはなれているため迫害されたもの。（人より力がある。）
ドワーフ、見た目で迫害されたもの。（人より鍛冶の能力が高い。）

あと、迫害された人族も受け入れています。

結局、人に迫害されたものの集まりね。

自分たちと違う容姿と自分たちより強い力のあるものは迫害されると。

国によっては、保護されている魔族もいますけどね。

人に近いものは、普通に人の国で生活できています。

50

＜ジリー＞

私は、生まれてすぐ皇太子になった為、教育はそれなりに厳しかった。
4歳の時に他の国について教えられ、自分の目で見たいと思うようになりました。

5歳に影が使えるようになり、商業の国トゥルゴバスキ国に遊びに行きました。
一番魔族に偏見が少ないと教えれらた国でしたので。

行きたいからといって、すぐにそこへいける訳ではありませんでした。
行ったことのある場所でないと転移の魔術は使えません。
半日歩いて転移で戻って、翌日に前日の進んだ場所へ転移して、半日歩いて転移で戻りました。
その繰り返しを2ヶ月かけて目的地へ到達。
足腰の鍛錬にも一石二鳥。
襲ってきた魔物との戦闘もありましたね。これは、魔術の訓練と。

目的はその国について学ぶためなんですが、5歳の子供に何ができるのでしょう。
そこで、行った国で遊ぶことを目標と変更しました。
それが、それぞれの国を知ることになるでしょうと。

遊び相手は、同年代の子供たち。たまに親にも遊んでもらいました。

さすがに赤い瞳は駄目だと知っていたので、ブルーに見えるように魔術で変えて。
今だから言えますが、遊んでいた仲間に魔術を感知できる人がいなくて助かりました。

翌年は、宗教国家クハラム国に遊びに行くことにしました。

愛馬？のジーンとの出会いは、クハラム国に向かう途中の山。

地龍であるジーンと戦闘。
ジーン曰く、魔力が同レベルの人族なんてなかなかいないから戦いたかったですって。
私は、戦闘マニアではありません。どちらかと言えば頭脳派なんですが・・・。
おかげでぎりぎりで私の勝利。

こぶしを合わせたからなのでしょうか？ジーンと友達になって休養をとる事に。
戦闘のせいで、私は3日、ジーンは5日動けず。
魔物と人間に襲われたらどうしようと思っていたら、ジーンが友達を呼んでくれました。
水龍のポー。皆、生まれて数年。子供ではない龍と戦っていたら死んでますね。
互いに体が回復したら、ジーンとポーもクハラム国へ行って遊ぶということになりました。

クハラム国の王都の外れの森までポーが背に乗せてくれました。
人に見られると困るので見えないように皆に魔術をかけました。
ジーンもポーも人型になって、一緒に子供たちに混じって遊びました。

ジーンは、私が移動で馬が必要な時は、馬になるので呼んでと言いました。
ただし、一緒に行動することが条件だそうです。私としては、心強くて嬉しいことです。

クハラム国に遊びに行くときは、ジーンがいる山へよってから一緒に遊びに行くようになりました。
ポーも近くにいるときは、一緒に行きました。

また、翌年は、軍事国家アーミヤ国へ向かいました。
もちろんジーンとポーも誘いました。
まずは、ジーンのいるジオ国とクハラム国の間にある山へ。
ジーンと一緒にポーの背に乗せてもらって、王都の外れの森の中で下ろしてもらいました。
二人と一緒だと魔物が出てきません。やっぱり格が違うってわかるんでしょうね。

他の国と同じで同年代の子供たちと遊びました。

いろいろな国に行って一緒に遊べるのもあと1～2年です。
私もですが、子供は9歳になる前に仕事・学校があるので遊ぶことができなくなります。

行けるうちにと、トゥルゴバスキ国、クハラム国、アーミヤ国とジーンやポーを誘って行きました。
予定の9歳までは、子供たちと遊びました。

トゥルゴバスキ国で遊び友達の親にギルド登録してみたらと言われました。

魔術が使えることを知っているからの助言でしょう。そしてギルドについて教えてもらいました。

ただ、登録の際の出身地に問題。さすがにジオ国はまずいですよね。

登録時にジオ国をトゥルゴバスキ国の名前にできるかですね

興味はあるから登録したいなぁ。内緒で来ているからお小遣いも欲しいし・・・。

でも、面倒だから止めた。薬草を取ってきてギルドで買い取ってもらうことにしましょう。

次回、来る途中でジーンたちと薬草収集しましょう。三人でならおもしろそうです。

９歳を過ぎてからは、小銭を持ってジーンたちと買い食いして歩きました。

そして１０歳。

冒頭のゴルア王国へ勇者を見に行くことになりました。

ーお披露目前日の早朝ー

「お父様、行ってまいります。」

「ジリー、護衛はつけて欲しいのだがね。」

「私よりも強い友達も一緒ですから問題ないですよ。」

さすが龍。数年で完全に追い抜かれました。

「強い友達？そんな人物がいるのか？紹介してもらってないが。」

「時間がありませんので帰ってから紹介を考えます。では、お父様、お母様行ってまいります。」

ジーンたちを誘って、トゥルゴバスキ国でお買い物。もちろん荷物にならない程度に。
その後、ジーンに馬になってもらってと思ってましたが、国境を越えることを考えて止めました。

ゴルア王国の王都の外れへ降りてもらって、宿代の為の薬草収集を三人でしました。
規格外三人組ですので、高給取りです。高級宿に宿泊しました。

やっと勇者のお披露目。想像以上の人出のため、埋もれてる私にジーンが肩車してくれました。
周囲の子供たちも親に肩車されていましたので、あまり目立つこともありませんでした。

あらっ？神殿の前にいる勇者、何かがおかしい。魔術の気配がある。
私より上の実力？それはありえない。場所が離れすぎていてわからないです。
一度国に戻って改めて調査に来ることにしましょう。

もう一つ気になったこと。
勇者の顔を見たとたん一瞬気が遠くなったこと。なぜ？

今日のところは戻るとしましょう。お父様が騒ぎ出す前に。

51

＜ジリー＞

―ジオ国―

「お父様、お母様、ただいま戻りました。」

「勇者はいかがであった？」

「何かおかしく感じました。私よりも強いとは思えませんでした。」

「さすが我が娘。」

「お父様、私の話聞いていました？」全く親ばかしている場合ではないでしょう。

「・・・。」

「調査が必要ですので、再度友人たちとゴルア王国へ向かいます。」

「今回は、許可できん。」やっぱりですね。

怪しい人物を調べに行くとわかっていて許してくれるわけがないでしょう。

まぁ、影を使って抜け出すことにしましょう。

翌日、影に留守を任せて抜け出そうとしましたが、国から出れない。

お父様、防御術を変更しましたね。

魔術師としてお父様に敵わない私では、正攻法では無理ですね。

何か考えましょう。

翌朝、ジオ国から出る魔族に姿を消してついて行くという方法にしました。
これも私がジオ国を出ようとした瞬間に弾かれました。
もう、お父様のばか。

「お父様、いい加減にしてください。ゴルア王国へ行かないといけないのです。」
もう、直談判です。

「なぜ行かないとダメなのかね？格下ならば他の者でもいいのでは？」

「よくわからないのですが、私がどうしても行かないといけない気がします。
ただ、行きたくて言っているのではありません。」

「決意はわかった。私に勝てるようになったら許可しよう。」
なんでそうなるの？まだ勝てないのに。数年あれば勝てそうだけど。
もう、ジーン達に手助けをお願いしようかしら。

「お父様、私の友人を呼んで二人がかりにしてください。
もう一人の友人は見学としますので。」
「よかろう。」

「では、クハラム国にいる友人を呼びに行きますのでジオ国から出れるようにして下さい。」
「もう出ることができるぞ。」

「じゃあ、呼んできます。」

「早く戻ってくるように。」
お父様の気が変わらないうちにジーンたちを呼びに行きましょう。
ジーンのいるジオ国とクハラム国の間にある山でジーンを呼びました。
「ジーンいる？ジリーよ。」私が叫べばだいだい聞こえるので答えてくれる。
「何～。」返事が返ってきました。
人型のジーンが来ました。
「お父様と魔術で戦うのだけど一人では負けるので手助けお願い。」
「おもしろそうね。いいわよ。ポーは？どうするの。」
「見学で良いなら一緒にどうかなと思っているけど。」
人型でポーも来ました。
「行く。」
「じゃあ、転移するからそばに来て。」
二人が近くに寄ったら転移の魔術を発動しました。
「お父様、ただいま戻りました。一緒にいるのがジーンとポーです。」
ふふっ、地龍と水龍と言わないけどわかるかしら。
「ジーンです。」
「ポーです。」

「いつも娘が世話になりありがとう。
ジリー、まさか助っ人はこの二人のどちらかとかね。」
「その通りです。お父様。」
「些かずるいと思うが。」やっぱりばれたか。
「でも、お父様、ジーンは戦うのを楽しみにして来てくれたのですが。」
「ふむ、お前と二人がかりではちときつい。ジーンと一対一としようか。」
「では、お父様。ゴルア王国へ行くことについて、二人と一緒なら反対しない？
そういうことでよろしいのですよね。」
「一緒ならばな。」
「ジーン、ポー、数日後にゴルア王国に行くけど一緒に良い？」
「「いいよ。」」
「二人ともありがとう。行く時に呼びに行くね。」
「お父様、これでいいのですよね。さてとジーンとの対決はどこにします？」
「いつもジリーとやっている場所でいいだろう。」
二人の対決結果は、引き分けでした。途中で止めました。
だって被害がすごくなりそうでしたので。
ポーがいてくれて良かったです。私一人では止めれませんでした。

二人が帰った後に、
「ジリー、変わった友人だね。」
「いつも一緒で楽しいですよ。」
「龍が仲間以外と一緒に行動するなんて聞いたことがない。」
「あら、私が9歳までは他の子供たちも一緒に遊んでいましたよ。」
「ますます不思議だ。」
「？」
実際にゴルア王国に向かえたのは、二週間後でした。
なぜなら、お父様が不安がって私に魔術の特訓を課したからです。
まぁ、しかたがないとわかっていましたので頑張りました。
「お父様、お母様、いってまいります。」
「気をつけていってらっしゃい。」お母様です。
「ジーンとポーによろしく。早く帰ってくるように。」お父様。
ジーンのいる山へ。
「ジーン、ポー、予定より遅くなってごめん。」
「いいよ。」
「魔術でゴルア王国に飛ぶよ。」
ーゴルア王国ー
三人で王都を歩いていました。
前方の犬を連れた青年を見て、心拍数が上がりました。

「海、数日ぶりね。」と茶髪のブルーの瞳の青年に向かって声をかけていました。
腕に手をかけて、なぜ？と思う間もなく気を失ってしまいました。

52　ジリーと海

＜ジリー＞

「うん。」あれ？ここどこ？ベッドで寝ていました。
「気がついた？」茶髪の青年です。

声をかけて気を失ったことを思い出しました。それと前世の自分も。
ありえないことだと思いますけれども、海がきっかけでしょう。

私の前世は、黒宮聖。
元の世界の地球に戻れたのに交通事故で死亡。
その後、この世界の神様に会い、海に会いたいと訴えました。
今現在を考えれば、願いは叶えてもらえたようですね。
それと気を使ってもらったみたいです。
わざわざ１０年も過去へ生まれ変わらせてもらいました。

さっき、ブランもいたからお礼を伝えてもらいましょう。
プラス、海へ説明しないといけないですね。

「海にとっては、昨日別れたのだと思うけど、私は１０年経ったわ。
意味わかるかしら。」分かり難い説明の自覚があります。

「いや、よくわからない。君は俺を知っているのかい？」

「ええ、生まれた時からね。私の前世の母親が同じですもの。
そうそう、海からの手紙はおじさんとおばさんに渡したわよ。

私宛てのも渡したけどダメだったかしら？
その帰りに交通事故に遭ったと。ここまで言えばわかるでしょ？」
「嘘だろ。誰かに聞いたんだろ？そんな訳ないか。
手紙のこと知っていることと交通事故という言葉がこの世界にない。
意味がわかるものはいないかな。」
「それと、交通事故はたぶん即死よ。だから、ここにいるのよ。」
「聖か。はぁ、なんのために俺は帰したんだ？」
「親に手紙を渡せたからいいんじゃない？」
「ちょっと待て、さっき軽く変なこと言わなかったか？前世の母親一緒だって？」
「理由は聞いていないけど、私と海は異父兄弟よ。
おばさん達から聞いてないのね。プロポーズ困ったわよ。」
「マジ？勘弁してくれよ。」
「そろそろ前世については、信用してもらえたわよね。」
「で、１０年なら１０歳だよな。それで聖の話し方は、違和感ありすぎだぞ。」
「そうよね、この姿で聖の言葉づかいはダメよね。気をつけなきゃ。
そうそう、今の私はジオ国の皇太子で次期魔王だから。そこんとこよろしく。」
「はぁ？なんだぁ。」なんか脱力してるね。
「あれ、一緒にいたジーンとポーは？」

「地龍と水龍か。ブランとどっかいったぞ。」
「やっぱり知りあいかぁ。あれ？海もわかったんだ。」
「まぁな、俺は、魔術と魔法の両方に言葉・知識・常識・歴史も能力にしてもらってるからな。わかって当然って感じじゃねぇ？」
「ちょっと待った。どこが聖の次なの？そっちの方が最強じゃない！」
「さぁ？」
「もういいわ。勇者のこと調べにきたけど、前世を思い出したら必要なくなったわ。」
「これからどうするんだ？」
「どうしようかしら。」
「離れたくないんだけど。」
「私もそれでいいけど、う～ん。」お父様がねぇ。あら、海の方が強いから問題なし？
「聖、今の名前教えて。なんて呼べばいい？」
「ジリーよ。よろしく。ブランたち以外には前世の話はなしで。」
「了解。」
「お父様がうるさいから一度戻って、紹介してから再度ここに来ましょうか？」
「俺は、一緒ならなんでもいいぜ。」海、キャラクター変わった？
「海、ブランを呼んで。私、ブランたちと話せるかわからないか

ら通訳お願い。」
「はいはい。」何か投げやりなのはなぜ。
ブラン、ジーン、ポーが入ってきました。
「ジーン、ポー、心配掛けてごめんね。なんかいろいろびっくりしたみたい。
ブラン、上役の方にありがとうと伝えてくれるかな？」
「わかった。他の者も心配しておったぞ。思い出したのなら後で声をかけてやれ。
記憶が戻ったのなら問題なくわかると思う。」
本当ならすごく嬉しいです。
「ジーン、ポーは、ブランと知り合いなの？」
「ああ、ブランとその上役からジリーのお目付け役に選ばれたのさ。」
「知っているなら神様って言っていいのに。お目付け役か。
友人だと思っていたんだけどなぁ。」ふふ、意地悪かな。
「私たちも友人だと思っているぞ。」わかってます。楽しそうだったもの。
「さて、一度ジオ国に戻ってお父様に報告と海の紹介をしたいの。
皆どうする？
すぐここに戻ってくる予定だけど。」
「どうなるかわからないから、ジオ国へも一緒に行く。」ジーンとポー。
「私もな。」ブラン。

じゃあ、ここから出て町はずれに行きましょう。

「皆、私のそばに来て、転移するわよ。」町はずれからジオ国の城へ。

53　ジリー&海　VS　父？

＜ジリー＞

―ジオ国―

ゴルア王国の町はずれからジオ国へ戻ってきました。
海、ジーン、ポー、ブラン、精霊の皆も一緒に。

お父様とお母様の所に行きましょう。

「お父様、お母様、お話があります。そのために一度戻りました。」

「何かね。」

「こちらにいます、黒宮海を結婚を前提の婚約者として認めていただきたいのです。」

「何を突然言うのかね。認めることはできん。」

やっぱりね。でも、認めるしかないですよ。（くすっ。）
お母様は、にこにこされています。私の好きにさせてくださるようです。

前世で結婚できなかったから今度はと考えています。
だってねぇ。今度は、姉弟じゃないんですもの。

「それでは、私、皇太子を辞退いたしますわ。で、他の国へ行きます。」

「それは、ならん。」

「それでしたらどうすると？私実力行使しますわよ。友人も味方してくれますもの。」
皆にも言ってないけど大丈夫かしら？そちらを見たら皆うなずいてくれました。

「ジリー、それは卑怯というものだ。」
「お父様、言ってませんでしたが、海はお父様より確実に強いですわよ。
最初から魔王以上の魔力に魔法も使えますから。」

「ジリー、ばらしていいのか？」いままで黙っていた海が心配そうに言いました。
「いいんじゃない？ついでに今の私ならお父様以上ですもの。
皆も協力してくれるわよね。」
上空に視線を向ければ、皆がにこにこ手を振ってくれました。

「ジリー、何があったのだ？今朝と違うが。」
「前世を思い出しました。そのせいだと思います。それと、海は従弟でした。」
さすがに姉弟とは、人聞きが悪い。

「もう何も言わん、好きにしろ。」何も言えないでしょうね。
「お父様ありがとうございます。」やったね。

「ジリー、おめでとう。」
「お母様、ありがとうございます。」

「魔王様、初めてお目にかかります。黒宮海と言います。
ジリーとの結婚を認めていただきありがとうございます。」
「ジリーをよろしく頼む。」

「はい、命に変えましても守ってみせます。」
ちょっとお姫様みたい。違う、私はお姫様だわ。

「お父様。私、見聞を広めるために旅に出ます。許可をお願いします。」
「はぁ、好きにしろ。止めても聞かないんだろ？」
「はい。心配されなくても、勇者相当の海、龍の二人、神の眷属、精霊の皆が一緒です。」
「どこにつっこめばいいのかわからんのだが。」お父様お疲れのようですね。本気にしてませんね。

「ジーン、ポー、一緒に旅する？」お父様にはメンバーと言ってしまいましたが。
「おもしろそうだからついてくよ。」
「うん。」さすが二人とも遊び仲間。暇なんでしょうね。

笑えるようなメンバーです。このメンバーなら国を落とせそうな気がする。
冗談にならないので止めますが。

「クレアル、魔術を解くから瞳の色を前と同じにしてもらえる？」
私が、魔術を解いたら、クレアルが私の目の前に来てくれました。
「ジリー本当に魔族なんだな。きれいな赤だ。」海が横から見ていました。
「海と同じブルーでいいですね。」

「それでお願い。」
「終わりました。」
「クレアルありがとうね。」
お父様とお母様が固まっています。説明いるのかしら？
ジーンとポーは笑っていますけど。
「お父様、お母様大丈夫ですか。」声をかけたら立ち直ったようです。
「今のはなんだったんだ？」
「創造の精霊に魔法をかけてもらっただけですが？」
「ジリーは精霊が見えるのか。」
「前世の記憶が戻ってからですが。」
「そうか。お前は規格外なのだな。」疲れたようにお父様が言いました。
「ジリー、いいわね、楽しそう。私も行きたいわ。」
「お母様、私は構いませんが・・・。」
「それは勘弁してくれ。」お父様の泣きが入りました。
愛妻家のお父様ですもの手放せないでしょうね。
もし、お母様が行くとなると、お父様は魔王を止めて一緒に来るんでしょうね。
それもおもしろいかもと思います。
ただ、お父様がいるからジオ国の平和がある現在です。
お父様が出たらジオ国は滅びるでしょうね。祖国が亡くなると困り

ます。

「お母様、ジオ国のためにあきらめてください。」

「しょうがないですね。」私の気持ちがわかってもらえたようです。

「さてと、皆、私の部屋で旅の相談をしましょう。」

54　ジオ国からゴルア王国へ

＜ジリー＞

ージオ国ー

皆と私の部屋へ移動しました。そして、部屋の好きな場所へ落ち着きました。

「まずは、ゴルア王国ですね。
グリーさん達は、一緒に皇太子がいるから革命を起こす可能性もあるわね。
あの王は、なんとかしたいわ。
住んでいる人に迷惑をかけずに王の交代が理想よね。
皇太子の人物像がわからないから微妙だけど。
何か意見ない？」

「王の交代は賛成。できれば1発ぶん殴りたい。」海。
「ジリーの好きなようにしていいけど。」ジーン。
「意見なし。」ポー。
「ない。」ブラン。

う～ん。やっぱり海と相談して進めればいいかな。

「海、グリーさんたちの行動を把握している？」
「いや、聖と一緒に離れてから会っていない。」

「そっか。グリーさんの所へ行こうと思うけど初対面のジリーで。
聖は国に帰って、婚約者の私と仲間達と一緒に旅をしているという

ことで。」
「了解。」

「ジーン、ポーは魔法を使えるの？」
「ああ、ただし自分の属性のものだけな。」ジーン。
「うん。」ポー。

「そっか、私だけ使えないのね。
じゃあ、皆にお願いしたときはよろしくね。」
そばに来てくれて皆は、うなずいてくれています。

「お父様とお母様に挨拶してきますので、戻ったら行きましょう。」
と、お父様の執務室へ転移。

「お父様、いってまいります。」
「ジリー、お前は我の娘だ。何かあれば駆けつける。気をつけて行って来い。」

「はい、お父様も気をつけて。」他の国の動向も気がかりです。何か保険をかけていきたいですね。

部屋へ戻って
「ブラン、この国に何かあれば知らせてくれるようにできない？」
「ん？ヴェント、仲間にこの国周辺を見張るように指示できるな。」

「はい、何かあれば連絡するように伝えておきます。」

「ヴェント、ありがとう。」

「なぁ、いまさらだけど魔王って悪じゃないのか？
俺からは、ただの親としか見えてないし。」海。

「他の国の王族は知らないけど、魔王は国王として優秀で良い人物ね。
他の国で自分たちと違うと迫害された人を保護して国ができている。
多分戦争すれば強いと思うけど、平和主義で防衛のみ。
ちょっと見た目が違うだけなのに・・・。」

「神さんに魔王は悪かって聞いたときに、会って判断せいって言われた。
これが答えなんだろうな。」へぇ、そんなこと聞いてたんだ。

「ジーン、ポー、私達って心話できるの？」
““できる。””わっ、びっくりした。

「ブランは、できるのわかっているし。」
“他のものもな。”
“そうね。”

「問題は、海。できるようにして。」
「強制かい。」

「できないとは言わないわよね？」
“これでいいのか？”
“やっぱりできるんじゃない。グリーさんたちに会っても、問題

なしね。”

「海、ゴルア王国のグリーさんの森の家に行きましょう。そこに戻っているかも。」

「そうだな。王都よりはいいだろうし。」

「ブランが一緒だから結界を抜けれた理由になるしね。海は、聖が帰った報告をと。聖がグリーさんを気にしてたからとでも言えばいいかな。」

「それでいいんじゃないかな。」

「じゃあ、行きましょうか。海、魔法でグリーさんの家の前へ転移して。」

「了解。」

ーゴルア国ー

返事とともにグリーさんの家の前に到着。

海がノックしました。ん、静かね。

「グリューネさん、いらっしゃいませんか？海です。」

海の声が届いたと同時に扉が開きました。

私、海、ジーン、ポーの喉元へ槍や剣がつきつけられました。

王都の騎士のようですね。

さて、グリーさんはどうなったかね。

まさか、ここの結界が破られているとは思わなかったわ。

おとなしく捕まってみるのもありね。

“皆おとなしく捕まって、状況が知りたいから。”皆に呼びかけ

ました。

“怪我はしないように体の強化を忘れずにね。”

55　森の魔女の家

＜ジリー＞

ーゴルア国ー

返事とともにグリーさんの家の前に到着。
海がノックしました。ん、静かね。

「グリューネさん、いらっしゃいませんか？」

海の声が届いたと同時に扉が開きました。
私、海、ジーン、ポーの喉元へ槍や剣がつきつけられました。
王都の騎士のようですね。

さて、グリーさんはどこかしら？
まさか、ここの結界が破られているとは思わなかったわ。
おとなしく捕まってみるのもありね。

“皆おとなしく捕まって、状況が知りたいから。”皆に呼びかけました。

「なんでこんなところにガキがいるんだ？」一人の騎士がつぶやきました。

そういえば１０歳児３人に海だもんね。
海の見た目は、この世界では２０歳未満かな？

「グリューネさんは、いらっしゃらないのですか？」海が訊ねま

した。
一応保護者役をしてもらわないと困ります。
「お前たちは、何をしにここへ来たんだ。」尋問開始？
「親の薬をいただきに来ました。この子たちの子守も兼ねてますが。」
子守？まぁいいけど。
「何かあったんですか？」
「森の魔女を王の命により捕らえに来ている。」
「ここはグリューネさんが許可した人しか入れないと聞いていたのですが。」
「そんなものは、知らん。」
「？」おかしいですね。
「なぜグリューネさんを捕らえるのですか？」
「何か国宝を強奪して逃走したそうだ。」なんのこと？
「あの、薬がないと親の病気が治らなくて困るのですが、どうしたらいいですか？」
「他の薬師のところへ行け。」ひどい、まぁ正論？
「そうですか、　薬師を探しに行きます。槍と剣を離してください。」あぶないんだから。
「すまん。帰っていいぞ。」せっかく捕まってみたのに意味がなかったみたいです。

「おい、ちょっと待て。おまえ名前は？」別の騎士です。
「うみと言います。」？。
「カイとヒジリという名前に聞き覚えはないか？」なぜ私達の名前を知っている？
「いえ、ないですが、その名前がなにか？」
「森の魔女と一緒に手配されている。」
「何かしたのですか。」
「森の魔女の助手で魔術師だそうだ。」
「そうなんですか。そろそろ失礼します。」
その場から離れて町に向かって歩きました。
グリーさんの家からかなり離れてから森の奥深くへ行き先を変えて進みました。
人が来ない場所へ到着してから、結界を発動させて腰を下ろしました。
「ねぇ海、変よね。」
「ああ、なぜ俺たちの名前が知られているんだ？」
「私は、グリーさんと暮らしていたからありえる。でも、海との繋がりは知られていない。」
「二人そろっては、城へ助けに行った時だけだね。」
「あの中の誰かがスパイということかしら？
それとも牢に何かしかけてあったか？でも、結界のことが変ね。」
「スパイだと思う。その人が結界を無効にしたかも。」

「そんなことできるの？」
「グリューネさんが、権限を与えていればできると思う。」
「グリーさん大丈夫かしら？スパイがいるってわかっていればいいけど。」
「俺は、顔が知られているから変えないとな。そうだ、ブランも姿か色変えた方がいいな。」
「私は鳥にするさ。ジリーの肩にいればいいだろう。」ブルーの小鳥になって肩へ。きれ～。
「さて、グリーさんがどこにいるか知りたいんだけど。誰か調べにいけない？」精霊の皆に話かけました。
「私とアクアが仲間に聞いてきます。少々時間をください。」ヴェント。
「ヴェント、アクアお願い。」

56　スパイは誰？

＜ジリー＞

ーゴルア国ー

「ジーン、ポー、食料取りに行こう。いつものね。」猪と鹿と兎もどきがおいしいのよね。

「「ＯＫ」」

「おいジリー、俺も。」

「海は、ブランとお留守番。ヴェントたちが帰ったら聞いておいて。後、料理担当ね。」

だって、海の料理はおいしいもの。私が作ると微妙。

大猟でした。予定より大きい獲物になってしまいました。

人が来ない場所だから・・・、くまもどき。

「海、お願い。」丸投げです

「へぇ、なかなかすごいね。結界の外でさばいてくる。」

「ブラン、連絡あった？」

「まだだ。」そうだよね。

私たちが、食料の調達に行っている間に家が建っていました。

さすが規格外ってとこね。普通の人ではできないですので。

海の作った食事が終わるころに、ヴェントとアクアが、戻ってきました。

「遅くなりました。」
「もどりました。」
「どうだった？」気になります。
「王都を中心にして、この森と反対側にあるドゥーブルと言う貴族の館に滞在中です。
町の様子は、変わりありませんが、城から手配されているのは聖と海です。
それとブラン様も。ギルドにも要請されているようです。」
ちょっと待って、おかしくない？何故手配されているのが、私達なのかしら？
根本的に何かが変ね。ブランまで入っているし。
「なぜ、俺たちだけが手配されているんだ？どう考えてもおかしい。
ブランについては、グリューネさん以外疑問を持たないだろう？
迂闊に動けないな。聖はいないから問題ないし、ブランも鳥になっているからいい。
問題は俺か。」海も、私と同じ意見のようですね。
「ドゥーブルと言う貴族の館に偵察に行くしかなんじゃない？」
「ああ、あやつの所か。」
「ブラン。知ってるの？」
「聖にこの世界に来た時に、森の魔女と貴族の老人とどちらがいいかと選択させたやつだ。」
「今は、誰を信用していいかわからないわね。」

「俺とナイトになったブランとそこに行くのがいいんじゃないか？しっぽを出すかもしれないし。俺たちなら逃げ切れるしな。ジリーは携帯で見てればいいさ。」

「そうね、こっちのことを知られたくないわね。ブランお願いできるかしら？」

「ああ。」

「じゃあ、ブラン場所わかるんだよな。転移頼んでいいか？」

「海、そばに。」海がブランに近づいたらそのまま消えました。

海から受け取った携帯で「0」を押しました。画面が知らない場所を映し出しました。

ドゥーブルと言う貴族の館ですね。声も聞こえます。

海が扉をノックして、誰かが開けてブランと中へ入りました。携帯の画像も屋敷の中に変わりました。会議室のような所に案内されて席につきました。

すぐに前回助けたメンバーがやってきて席につきました。

「聖は、どうしたんだい？」挨拶の後にグリーさんが、海に尋ねました。

「はい、国に戻りました。」

「あんたは戻らないのかい。」

「ええ、他の国に婚約者がいますので、その国で結婚して暮す予定ですよ。」

「それはおめでとう。」
「ありがとうございます。ところで、なぜ僕たちだけが手配されているのですか？
ギルドにも要請されていますし。」
「それは、私が依頼したんだよ。」
「はぁ？」

「勇者を捕まえるためにね。」
「聖も俺も勇者じゃないんですけど。」

「ふん、私がそれで騙せるとでも？聖が勇者だろう。
今、お前が座っている座席は魔法が解除されるようになっている。
髪も瞳も変わっていないから違うとわかる。聖が座れないのは残念だ。
聖の居場所を言いなさい。」
「そう言われても、聖は国に帰っていないのですが。
グリューネさんと会うまで、この国でひどい目に合ったからもう来ないですよ。」

「呼ぶことはできるのでは。」
「無理ですね。家族が許さないでしょうね。」

「では、呼ぶまでここから出ることはできないよ。」

海が、鎖を巻かれて拘束されました。

57　海キレる？

＜ジリー＞

ーゴルア王国ー

海！

「ジリー、落ち着け。海は聖を誘き出す人質だ。無茶なことはしないだろう。
あの拘束は、魔法用だ。海は、この世界でジリーの次に魔力がある魔術師だ。
魔術関係の拘束は簡単に外せる。わざと捕まっているんだろう。
私は、あれに捕らえられると脱出できないので先に逃げてきたがな。」
ブランが戻ってきて説明してくれました。

「海に考えがあるとしたら、私はどう動けばいいかね。
まさかグリーさんが・・・。」

携帯の画面が動きました。
海が、どこかの個室に連れて行かれました。

「まったく、来るんじゃなかったな。聖に頼まれて助けたら罠かよ。
さっさと婚約者の所に行けば良かったな。」海が誰かに話しているみたいね。

「それは、すまなかったな。」ん？リーコスさんの声かな。

「しかし、この国最低だね。勇者って捕まえるものか？それに偽者まで用意するか？」
「そうだな。俺もそう思う。」

「いったい何をしたいんだ？」
「さぁ？命令されて動いているだけだからな。
グリューネが敵に回ったら敵わないし、逃げられないな。」どこまで本当でしょうか。

「なんだぁ、それ。」
「この世界で5本の指に入る魔術師なんだぜ。」

「ふ～ん。」
「そうだ、お前ここから逃げるのは無理だからな。
その鎖は魔法を無効にして、この部屋は強力な魔術用の結界が張ってある。」
そうなんだ。海なら問題ないと思う。グリーさんより上だから。

「それより、なぜ聖なんだ？あいつ勇者じゃないぜ。
それと俺が死んだとしても、国から出ることはないんだけどな。
ついでに言っておくけど、俺を助けにくるとしたら婚約者だ。」
そうね、聖は死んでいるんだから無理よね。私は行けるけど。

「一応話はしておくが・・・。俺にはわからん。」

リーコスさんは、部屋から出ていったようです。

『ジリー、まだ動くなよ。しばらくここにいるから、気になるなら携帯で確認してくれ。』

海が、日本語で話ました。誰に聞かれても問題ないですね。
この国何がしたいんでしょうね。勇者を捕まえる？意のままに操る？
世界征服かな？まさかね。
あらっ？部屋に誰か入ってきました。元魔術師長？
「不自由はないかね？」
「この鎖がめちゃくちゃ邪魔だけど？」当たり前ですね。
「しかたがないだろう。精霊に逃がされたら困る。」
「聖みたいに好かれていればだろう？俺は関係ないだろ。」
「聖が助けに来たら、精霊も手助けするんでは？」
「聖が来ることは無いから、それは無いよ。助けに来るとしたら俺の婚約者。」
またまた、同じ会話。全員とするのかしら？
「なんで勇者が必要なんだ？相手に納得してもらって偽者をしてもう方が簡単だろ？」
「力がないではないか。勇者なら精霊を使役でき、魔力も巨大。」
「捕まえるという時点で、味方はしてもらえないんじゃないか？」
「それでも話をすれば、わかってもらえる。」
「無理やりでは、話をする以前の問題だろ。あ～あ。」
「そんな訳はない。」

「貴様いいかげんにしろ。」海が、護衛の騎士に殴られて椅子から落ちた。

海の目が怖い・・・。

『ふ～ん、大人しくしているの止めた。ここから出て城壊してくる。』

あ～あ、きれちゃったわね。

海は、鎖に巻かれたまま扉に向かって歩き、扉を蹴破りました。

これって魔法も魔術も関係ないわね。部屋にいた人たちは、唖然として見送ってました。

そのまま外へ出て魔術でどこかへ転移しました。

見たことのある場所です。お城の牢？画面が、揺れています。いつの間にか鎖は外したみたい。

“ジリー、ここで地震起こして倒壊させるからね。

小さな揺れを数回でインターバルを取りながら段々強くしていくから、誰もいなくなったら教えて。

それから倒壊させる。”

“よくわからないけど了解。”

「皆、海が城を壊すみたい。もし、まだ中にいる人がいたら外へ移動させてくれる？

ただし、牢の中にいる人は縄で拘束して外へね。いいかな？」

「「「「「「いいよ。」」」」」」

携帯の画面は、牢の海を移している。頭の上から瓦礫が落ちてき

ているけど大丈夫なのかな？

「ブラン、城に人の気配がないか調べて。」

ブランが消えて、１０分程度して戻ってきました。

「誰もいないぞ。」

「ありがとう。」

“海、誰もいないって。”

“サンキュウ。”

魔術に力を入れたみたいね。上から落ちてくる速度が変わった。

また、場所が変わったみたい。今度は、召喚された場所？

“聖、ここもな。”

“はい、はい。”

“皆、今度は神殿の中にいる人を移動させて。”

“は～い。”誰かが代表で答えてくれたみたいです。

「ブラン、今度は神殿の確認をお願い。」

また、ブランが消えました。１０分後に戻ってきました。

「ジリー、いいぞ。」

“海、いいよ。”

“ありがと。”ここも倒壊。

またまた、移動したようです。さきほどの館に戻ってきました。
会議室に立って、また先ほどの行動を始めました。

あっ、グリーさんも入ってきました。
魔術対決？揺れが止まっています。海が不利な気がする。
だって、城と神殿でかなり魔力使った後じゃない？

58　ジリーｖｓグリューネ？

＜ジリー＞

ーゴルア王国ー

「ブラン、鳥になって。それとさっきの館の外へ送って。クレアル、私の目を元に戻して。」

館の前に転移して入り口を魔術で破壊。そのまま中へ。

“ブラン、海のいる場所へ案内して。”出てきた騎士は無視。魔術の結界で私とブランに手出しはできない。

部屋へ入った瞬間に海が倒れました。

海を取り押さえようとした騎士を壁へふっ飛ばしました。

海を抱きかかえて・・・無理、引きずって。

グリーさんが、攻撃の魔術を使ってきました。

げっ、急いで海にも結界を発動。

見たことある人たちもわらわらと出てきました。

飛び掛ってくることもなく、傍観するつもりかしら？

飛び掛ってきても結界に弾かれるだけね。

「何者？」グリーさん。

「私？この海の婚約者だけど。」

「くっ、魔族か。」蔑みか。やっぱり魔族って嫌われてるのね。

「それが何？」恩人だと思っていたのに・・・、最初から勇者と思っていた訳ね。

「謝ってもらえるのかしら？」

「ふん、魔族に謝るなんて、ありえないね。勇者さえいれば、ジオ国なんて存在しなくなるさ。」

勇者を捕らえて魔王を倒せってこと？おおっ、ファンタジーの王道ですね。

ただ、魔王はその勇者の父親なんですけど。神様は、この国をなんとかしたいのかしら？

「なぜ、ジオ国が嫌われているのかしら？不思議ね。」

「魔族は、野蛮で殺し合いに明け暮れているではないか。他の国から人を攫っている。」

「殺し合い？そんなもの無いわよ。自給自足で他の国より平和だけど？そんな野蛮な国なら他の国を攻めて戦争にでもなっていると思うわよ。お父様なんて防衛の魔術しか使ってないし、前任の魔王も仕掛けてないはず。

それに人を攫う？逆よ、人の国で虐げられた人が、逃げてきているのよ。碌なこと言われてないわね。なぜ、デマの方が信じられているのかしら？

だいたい、そんな風に言われている魔族相手にこの海が婚約するとでも？私は、聖と会っていないけど、反対されていないわよ。」同一人物だもん。

なんか、この年（１０歳）で長々と語ってしまった。恥ずかしい。
わかってもらえないんだろうなぁ。

話をしている間も攻撃していたのかな？
グリーさんの顔色が悪くなってきている。
私の魔力は底なしだから使っていても気にならないし。

さて、そろそろ私たちは退散しましょう。
遠巻きに取り囲んでいる人たちを眺めました。
それから、海とブランと一緒に魔術でこの屋敷の外、王都の外れという順に転移しました。
魔術を追跡されて、戻る家が知られるのを防ぐため、直接帰れません。

“皆、ジーンたちのいる家に帰るわよ。”
“は～い。”

海の体重を魔術で５０分の１ぐらいにして、森へ向かって歩きました。
ある程度歩いてから、ブランにジーンたちのいる家へ転移してもらいました。

「ただいま～。」

59　グリューネの葛藤

＜グリューネ＞

魔族の少女の話を聞き、私は迷っている。
事実なのかどうか、海という青年が魔族側にいる限り事実かもと揺れている。
でも、今までの考えも容易く捨てられない。

聖との出会いは、ナイトが連れてきたからだ。
この時点で普通でないとわかった。
なぜなら、ナイトが普通の犬ではなく、精霊に近い存在だろうと考えていたから。

この森の家周辺に魔術で結界を張ってある。
この結界は、私よりも魔力のあるものが破壊するか、精霊の魔法でしか通れない。
ナイトは、しばしばここへ訪れている。ナイトの通過を拒否しても。
これによってナイトが精霊に近い存在だろうと。

そのナイトがいつも行動を供にしている。懐いているのか、ナイトより上位なのか。
可能性として勇者ではないかと思った。

聖は、この世界をよくわかっていない。これは、チャンスでもある。
この国の物語は、ジオ国について魔王は悪と書いてある。
読めばわかるから、私からは何も言わない。

いつか、ジオ国を滅ぼすことが私の夢。
幼い頃の友達が、家族とジオ国に行って戻ってこない。
大人たちは、ジオ国で殺されたと噂していた。
あの国は野蛮で行ったら殺され、人を攫って奴隷にしていると。

私は、前王に抜擢されて宮廷魔術師になった。
貴族中心の宮廷で平民の私は、王へ恩を返すために努力した。
が、長になってすぐに王は亡くなり、現王とは対立が重なり追放された。
前王からジオ国について聞くことはなく、現王からはジオ国への侵略を聞いた。
はっきり言えば、ジオ国だけではなくすべての国を傘下にするとのこと。
ジオ国の件だけは、意見が一致していたのだ。

聖とは、しばらく一緒に暮らしてみて勇者だと断定できた。
結界は見えるし、魔術も普通に使える。精霊を使って魔法も。
普通の人ではありえない。

宮廷魔術師が、勇者が現れていなくなったと言ったときは違うかもと思った。
嫌がっている勇者が気の毒だとも。
そのときは、王と宰相にざまあみろという感情が勝っていたからだ。

ジオ国への拒否反応が、王都へ行ったときに再度噴出してきた。
あの偽勇者については、すぐにわかり魔術師長と勇者の捕獲について話し合った。
聖なら必ず来てくれると。魔術師長を通じて王と宰相もぐるになって。

リーコスは、どちらかと言うと反対だったと思うが強制したらしたがってくれた。
皇太子は王とは違い民を思っているが、ジオ国に関しては私と近く協力してくれた。

聖が、従兄弟の海を連れて助けにきてくれた。
実際、海という青年は魔法を使える聖のつきそいだったのではと思う。
なぜ、従兄弟がこの国にいるのか不思議だった。

集合の予定場所へ聖も海と来てくれたが、国へ帰ると言いそのまま行ってしまった。
ここで引き止めるはずであったので予定が変わってしまった。

ただ、国へ帰ると行ってもそんなことができるはずがない。
しばらくはこの国にいるだろうと、王へ連絡し国とギルドへ手配させた。
私の家の可能性もあるのでそちらへも。

罠にかかって、海とナイトがやってきた。
聖ではなくて残念だが、従兄弟の危機に助けにくるだろうと捕らえた。
海は、帰ってこないと言い、リーコスからもその伝言を聞いた。
だが、信じられない。勇者なら帰れないはずだ。

海が、この館を逃げ出したが、戻ってきた。
館を壊そうとしたのでさせないように攻撃した。

大したこともなく勝てて捕らえようとした所に魔族の少女が現れた。

婚約者だと？なぜ、魔族なんかと？魔族へ攻撃を続けても全く効果がない。
歯牙にもかけられていないというべきか。
魔族の少女が、海と共に消えた。追いかけても無駄だろう。
確実に私よりも上位だ。あの少女の親は、魔王だろう。
国すべてに防御か。私は、森のある部分だけだったのだが。
これで海、聖に手を出すことはできなくなったな。
勇者が、家族のジオ国を攻める訳がないとなるのか。
考えれば考えるほどわからなくなる。
私はどうすればいいのだろうか。

60　リーコス奮闘す

＜リーコス＞

ふぅ、なんだかなぁ、これでグリューネがわかってくれるといいが。

俺と聖は、ほんの短い時間だけど師弟関係なんだよな。
かわいい弟子に罠なんてとんでもないぜ。
表立って反対できない師匠で不甲斐ない。

本当は、グリューネって悪い奴じゃないんだ。
聖をかわいがっていたのも気に入っていたからで、利用するためじゃないはず・・・。

なぜ、ジオ国となると人が変わるのかわからん。
俺もこの国で育ったが、ジオ国にそこまで悪いイメージはない。
絵本については、思うところもあるが。

今回俺が、グリューネの言うがままだったのは、やっぱり信じているからかな。
長年の友人だ、俺が見捨てたら誰もいなくなるだろう？
ジオ国さえ絡まなければ問題ないんだし。

皇太子、元宮廷魔術師長、宮廷魔術師、グリューネ。
高貴な者と宮廷の魔術師が、ジオ国に良い印象を持っていない？
いや、憎んでいるか。なんでだろうか？
共通するのもは、城？神殿？いつからだっけ？

まぁ、せっかくもらった機会だ、グリューネたちにジオ国について説明しよっか。
海の婚約者の魔族の嬢ちゃんよりは、信用してもらえるだろう。
詳しく知っているわけじゃないが、嬢ちゃんの話に間違いないことくらいは知ってる。

さて、会議室へ皆に集まってもらった。

「まず、魔族の嬢ちゃんが言ったことは間違いないからな。
もちろん、すべてが完璧ですばらしい国という訳ではない。
良いやつも悪いやつもいるが、魔王は民のために政治を行っている。
他の国へ戦を仕掛けてもいない。」

「なぜ、そんなことが言えるのだ？」偽勇者か。

「おいおい、俺の立場というか仕事知っているだろう？
ギルドマスターだぞ。他の国の情報を一番知らないといけないんだが。
ギルドマスターの会合もあるから話は聞こえてくる。
特にきな臭い話には注意している。現在要注意の国を挙げるならこの国だな。」

「リーコス、おまえはジオ国が憎くないのか？」グリューネ・・・。

「なぜ憎いのか、それがわからない。なぜそう思っているんだ？
他国の中の一つとしての認識しか普通ないぞ。
ああ、見た目は悪いか？それを気にする奴もいるかな。」

「子供のころ友達がジオ国へ行って戻ってこない。」
「はぁ？家族で他の国に引っ越したら戻ってくるわけないだろ？ジオ国じゃなくても・・・。」
「理由はわからないが、憎い。」元勇者。
「同じだな。」元魔術師長。
「・・・わからないが憎く感じる。」皇太子。
「なんか、ジオ国を憎むように操られている気がしないか？いつからそうなったかわかるか？」
「前王は、ジオ国について何も言われなかった。亡くなってからだと思う。」グリューネ。
「殿下はいかがですか？」
「おじい様がいらっしゃる頃は、ジオ国へ行ってみたいと言った記憶がある。そのこと自体を今まで思い出せなかった。記憶に違和感を感じる。」
「城か神殿で何かされたことになる。グリューネ、そんな魔術あるのか？」
「魔術では、私達相手に何もできんだろう。薬草と言葉を幾度と繰り返すかか？」
「城か神殿となると、多数にできる神殿か。」皇太子。
「私は、前王が亡くなってから、数ヶ月で城から出た。その間でか。
となると、前王の葬儀とその後の祈りが怪しいか？」

「それは、王族と魔術師で行われた祈りのことですか？
確か、亡くなった王がお好きな香を焚いてましたよね。」偽勇者。
「そうだった、話の内容とかは全く記憶していないな。」元魔術師長。
おうおう、完全に誰かに操られているってことじゃないか。
いったい誰が何のために？

61　皇太子と元騎士

＜レスト（皇太子）＞

私は、レスト・バーシル・ゴルア。
現在のところは、ゴルア国の王位第一継承者でもある。
父である王と対立しているので先のことはわからないが。

私は、なぜジオ国を憎んでいたのだろう。
この館の主である元騎士ビヤル・ドゥーブルは、幼いころの師である。
現在は隠居しているが、今でも尊敬している。

そのビヤルも今回の私を止めようとしなかった。
呆れられているのかもしれない。
ビヤルからジオ国について何も聞いたことがない。
いや、魔王は魔術だけでなく剣の腕も良いと聞いたか。
そんなことも忘れていた。他に聞いていても忘れているのだろうか。

ギルドマスターのリーコスという者の話を聞いてからジオ国への憎しみが
薄れてきたように思う。
今、何故だろうと考えている時点で憎しみの感情が自分の中からではなく、
外から思い込まされていたという事実がはっきりした。
何者かに操られていたと考えて動かねば。

まずは、海という青年と魔族の少女に詫びねばならないな。
操られていたとはいえ、助けてもらったにも関わらず罠にかけたの

だから。
まぁ、助けてもらうという行為自体が罠ではあったが。
ここにいる者で事実を見極めねばならない。
誰が敵で誰が味方か。

＜ビヤル（元騎士）＞

やっと皆というか、おかしかった者たちの目が覚めたようだ。
ジオ国について見習えるべき良き国だと教えていた皇太子が変なのはすぐ気付いた。
が、言っても無駄なこともわかっていたので見守ることにしていた。

海という青年については、申訳ないと思ったが、もしもの際には助ける予定で。
まぁ、ナイトが一緒だったので問題ないだろうとも思っていたが。
ナイトは、犬だが不思議なことに信頼できる。

今回、操られていることがはっきりしたのは、海と婚約者である魔族の少女のおかげだ。
話が事実なことを私だけではなく、リーコスも知っていて話は早かった。
あと、操られ方が表のみで深層心理まで及んでいなかったおかげだろう。
グリューネが思ったより深くまで掛かっていたようだが。
これは、さきほどグリューネが言っていた友の引越しに絡んだ悪意の噂のせいだろう。
やはり、魔族の見た目を悪く言う者も少なくないからか。

さてと、ここはわしが仕切らねばならぬのか。

本来ならグリューネか皇太子だか、操られていた本人たちでは話の道がずれる。
リーコスでは、皇太子と元魔術師長の反発が予想される。

「レスト殿、前王がお好きな香とは？」
「そんなものはない。聞いたこともないぞ。おばあさまならともかく。」

「ユーチェ殿（偽勇者）、どちらでその話を聞かれましたか？」
「？その話の記憶はあるのですが、誰とか場面が思い浮かばないです。」

「これも記憶操作の一つと考えるべきでしょう。
グリューネの記憶は、どうなっている？」

「神殿の一室で行われた前王の葬儀とその後の祈りの記憶がない。行われたという話のみだ。」

「レスト殿、この葬儀と祈りはどなたの主催ですか？王でしょうか？」
「いや違うだろう。神殿からだったと思う。これもあやふやな気がする。」

「ふむ、集めるところから記憶操作されている？徹底されていますね。
ジオ国を憎んでメリットのある人物なんているのでしょうか？
他国の内の一つでしかないと思いますが。」
手がかりが何もないように感じる。たいしたものだ。

「何もわからない状態なのでこのまま操られている振りでどうか

な。」
リーコスの意見はもっともだ。
「操られている振りはできますか？」４人の顔を見てみた。
４人から頷くという返事が返ってきました。
「ひとまず、城へ勇者が現れなかったと連絡してください。」
わしと、リーコス以外を中心に動いてもらわねば。

62

＜ジリー＞

ーゴルア国ー

森の家に戻ってジーンたちに海をベッドへ運んでもらいました。
そして話をするために居間のテーブルへ。

「何か変としか言えないわね。ジオ国を倒したいってことはわかった。
それと、事実の把握もできていないこともね。誰が何のために？
ただの侵略なのか、誰かが目的を持って動いているのかどうかね。
侵略ならできないから問題なしね。」お父様だけでも楽勝と。

「皆はどう思う？」しまった、聞いても返事ない。

海以外は、手伝ってくれるけど人の争いにはノータッチよね。
相談は、海が起きてからね。他にも相談できる人欲しいな～。

「聖、ジオ国の結界が弱くなってきていると仲間から連絡がきました。」

「えっ、ヴェント、本当？戻らなきゃ。
私は、一度お父様のところへ行きます。ジーンとポーは、つきあって。
ブランは海のそばにいて、海が目覚めて体調が戻ってからジオ国へ連れてきて。」

「わかった。早く行け。」ブラン。
ジーンたちは頷いてくれました。精霊の皆も私に着いてきてくれます。

―ジオ国―

ジオ国に入ったら城のお父様の執務室へ直接飛ぶ予定でした。
が、ジオ国へ入ると同時に魔力への干渉を感じ、ジオ国内へ入るだけにしました。
また、干渉されないように魔力の放出を小さくする方法があります。
けれども、それは魔力を使うことになりそうなのでパスですね。
精霊の皆に頼んで魔力の放出をわからないようにしてもらいました。

ジオ国へ入ると同時に結界が消えました。

もちろんそのままにできません。
お父様がジオ国を覆っている結界と同じものに、半透明の色を入れて誰が見てもわかるような結界で覆いました。
これは、お父様以外の人物が結界を張ったとわかるようにするためです。

お父様が王である限り結界が消えるはずがありません。意識がなくても魔力が放出されるからです。
そうなると魔力が無くなるような事態に陥ったか、遮断されるようなことがあったかですね。
いったい何があったのでしょうか？
とにかくお父様とお母様に合流して尋ねるのが一番でしょう。

城内の様子を伺うとお父様とお母様の気配が地下牢？

62（後書き）

更新が遅くなり申訳ありません。＋短い・・・すみません。
次回の更新は、ちょっと目先を変えて違うお話（短編）になりそうです。
先日見た夢が気になり話にまとめたいなぁと。

63

＜ジリー＞

ージオ国ー

「ヴェント、地下牢の様子を調べに行ってくれない？」

「わかりました。少々お待ちください。」返事と同時にヴェントが消えました。

ヴェントの報告を待ってから行動です。
お父様とお母様の様子が気になります。

確か、地下牢って魔力を遮断してあったはず。
なぜなら、ジオ国に住む人は基本的に魔力が強いので魔術が得意。
他の国と同じ牢では脱獄が簡単なため。

だから、お父様も魔力が遮断されて結界が途切れたのね。

「ジリー、どうした？」

「ん？」私が黙って考え込んでいたからジーンが声を掛けてきました。

「今、どうしようかなって考えていたの。
ヴェントが戻ってきてから行動開始の予定ね。
そうそう、ジーンの家ってこの国とクハラム国の間の山よね？
お父様とお母様を助け出したら、ジーンの家に匿って欲しいけど、

駄目かな？そう長くのつもりはないけど。」

「別にかまわないけど、人間が住める家にはなってない。」

「じゃあ、ジーンの家の空いてる場所に家を建てさせて。
ジーンの家なら安心なんだもん。いつも会っていた場所の近くでしょ？」

「ああ、場所ならどれだけでもある。
安心というか、許可のないものは入れないな。ポー、場所は近いか？」

「我らなら近いが、人には近いと言えないな。
先ほどの家の方が近いと言えるだろう。」

なんですって？ジーンったら、どんな耳していたのよ。
いつも呼んだらすぐ来てくれてたのに。

「ジーン、いつも私が呼んだら来てくれてたけど、どうして？」

「ん、ジリーの声は、呼べばどこでも聞こえる。移動は転移魔法。」

「なんで聞こえるの？」

「精霊たちも気づいていると思うが、ジリーの声には魔法が混じっている。
呼ぶ相手に直接聞こえる魔法だろう。」

へっ？いまさらなんですが、なんてチートな。

というか私、魔法使えてるじゃん。と、喜んでる場合ではないですね。

「ジーン、家の話は無かったことにして。先ほどの家を使うわ。」

「ああ、それがいいだろう。結界を張ればいい。」そうしましょう。

「ただいま、戻りました。」ヴェントが戻ってきました。

「おかえり、様子はどう？」

「ジリーのご両親は牢の中でしたが、他に誰もいないようでした。ただ、お二人とも眠られているのか動かれませんでした。」

「ヴェント、ありがとう。地下牢は、魔術が使えないようになっているのよ。皆に申訳ないけど、一緒に行って助けてくれないかしら？」

「ジリー、聞くまでもない。手助けするために来ている。」ジーンの返事と同時に他の皆も頷いてくれました。

「ありがとう。ひとまず、父と母をこの場所へ移動させたいかな。いつもなら皆と転移だけど、地下牢は魔術が使えないので転移できない。私をそこへ移動させて欲しい。で、様子をみて二人を連れてここへ。後、声に出さないで心話のみでお願いね。何か罠があると困るから。じゃあ、行きましょう。お願いね。」

私のお願いの言葉が終わると、地下牢へ移動していました。
ヴェントの後について行くと牢の中にお父様とお母様が倒れていました。

ヴェントに牢のカギを開けてもらって二人のそばへ。
お父様に触れてみると冷たく、脈がない？なぜ？
お母様は？お父様と同じで体温がなく、脈もない！

お父様！お母様！

63（後書き）

また、間が…。ぼちぼち更新します。
別の話も進みませんのでこの話が完結してからにします。

64　ジオ国にて

＜ジリー＞

―ジオ国―

“ジリー。ひとまず移動しよう”
いつの間にかジーンが私の隣に来て、肩に手をかけて言いました。

“ごめん、取り乱していた。二人も一緒に移動させて。”

“了解。皆、頼む。”ジーンが皆に伝えてくれました。
すると先ほどの場所へ戻りました。

ここからゴルア王国の家へ皆と転移すれば良いのですが、
今の私では、動揺が大きく危険です。

「さっきの家へ転移「ちょっと待て。」」ジーンが。

「ジリー、ここから離れていいのか。」強い口調のジーン。

「精霊たちもジリーの望み通りに手伝う。
今、ジリーが転移したらどうなるか、わかっているな？」

あ、動揺しすぎて考えていなかった。私、魔王代理だ。
ジオ国から出たら結界が・・・。

地下牢も魔術が使えなくなるとわかっていたのに考えていなかった。

「結界が消えてないけど、皆がフォローしてくれたの？」
「ポーが残っていたのに気づいていなかったのか。」
ジーンに言われて初めて知りました。うっかりしすぎです。
「ポー、ありがとう。助かった。」ポーが頷いてくれました。
「ジーン、助言ありがとう。私は、ここに残らないといけない。二人の状態は普通ではないし、私ではわからないから手をうてない。海ならわかるような気がする。ごめん、誰か二人を海の元へ。そして、二人をお願いと伝えて。」
「あっ、クレアル。私の髪と瞳を海と同じにしてくれる？終わったら、海のそばへ戻って。こちらに付いて来てくれてありがとう。」
「いいえ。海の望みですから。お二人と海の元へ行き、説明してきます。」
「お願いね。」
クレアルと一緒にお父様とお母様が消えました。
無事を祈ることしかできないのが辛い。
でも、お父様に恥ずかしくない魔王代理として行動しなくては。全く状況がわからない。ゴルア王国の件といい無関係ではないだろう。
ん、ちょっとは冷静になれたかな？海がいれば相談できるんだけ

ど。
かなり、頼りにしていることが実感されますね。
さて、ジオ国で私を助けてくれるような人は・・・。
あらら、あまりつきあいないみたい？
もう、城へ直接乗込んでみようかな？
髪と瞳の色から人族としかわからないよね？
「直接、城へ乗込もうと思うけど、一緒に行く人～。」
考えても何もできないので、変なテンションでもしかたがないですよね？
皆さすがに引いてる？
「ご一緒させてもらいます。」あら？めずらしく代表発言がフラム（火）。
「フラム、よろしくね。いろいろとお願いさせてもらうことになるけど。」
「ふふっ、もちろん対応させてもらいます。」えっ、私何かした？
「フラム？何か、テンションへん？」
「今度こそ私の出番かと。ヴェントとアクアばかりでしたので。
転生されてから何もさせていただいていませんもの。
最初に知り合ったからといって優遇しすぎですわ。」
「ねぇ、たぶん僕とリュミ（光）の出番だと思うよ。城の中なんだから。

見えなくするんでしょ？」オプス（闇）。

「皆、ありがとうね。皆の得意分野が、私はわからないの。それぞれの判断で助けてもらえるとうれしい。」

皆を伺えば、頷いてくれました。

「さて、今回の出番は精霊たちに任せて、私はポーと帰るから。何かあったら呼べ。飛んでくるから。」

飛んでくる？まさか龍の姿で？まぁいいっか。

「ジーン、ポー、ありがとうね。

冗談ぬきで戦闘とかやばくなったら本当に呼ぶからお願い。」

「ああ、危機になる前に呼べ。間に合わなければ話にならない。」

「うん、わかった。」

65　ジオ国の城へ

＜ジリー＞

―ジオ国―

城へ乗り込むのはいいけど、どこへ転移するかね。
私の部屋、お父様の部屋、執務室は、マークされているはず。
あっ、医療室がいいわね。他の部屋へ移動もしやすいし。
会議室と謁見の間と同じ建物だし。

「さてと、城へ乗り込もうと思います。
オプスとリュミは、人から見えなくしてね。フラムは、私の魔力を隠して。
ティエラは、私の魔力が途切れた時に結界の維持をお願い。
アクアとヴェントは、警護ね。皆、よろしく。」

「「「「「「はい。」」」」」」

「じゃあ、城の医療室へ転移します。皆、そばに来て。」
医療室だから人がいるかも、でも、まぁ良いか、見えないし。

医療室へ。
誰もいませんね。静かです。
罠の魔術も感じません。いったいどうなんでしょうか？
さっさと見て回りましょう。

“フラム、部屋から出たり入ったりするのに魔術使うけど、他の人に感知されないのよね？”

“はい、ジリーに魔法をかけていますので大丈夫です。”

“皆、あちこち移動するから付いて来てね。”

医療室の部屋から扉を開けずに魔術で通り抜けて廊下へ出ました。

人がいませんね。

でも、人の気配が感じる謁見の間に行くとしましょう。

扉を開けず、通り抜けてびっくり。ここは、満員電車かって。

ゆっくりと通り抜けて良かった。さすがにぶっかったら見えなくても気づくよね。

で、これはなんだろう？集会？

ざわつきぐあいから操られていないことがわかってほっとした。

まぁ、一緒に待ちますか。この位置は、まずいので壁の中にいるとしましょう。

深窓？のお嬢様だった私に知り合いはいないから人探しもなくひま～。

いつも他国へお勉強に行っていたからこの国にいなかったのが原因と。

この国の人は、私を病弱だと思っているのかも。

直接関わっていた家庭教師とかは、皆ご高齢だったなぁ。

これは、お父様の陰謀のような気もするけど。

で、先日田舎に帰られたし、身のまわりについては、出歩くために自分でやっていたし・・・。

一時、自分の世界に入っていたら周りが静かになっていた。

ん？見覚えのある顔？

ああ、お父様に似ているのね。お父様の異母弟のブラッドかな。

「皆、集まってもらったのは、王がご乱心なされて防御の結界を壊された。
それに気づかれた、こちらのブラッド様が結界を修復されたので安心して欲しい。
そこで暫定的にブラッド様に王になっていただこうと思う。」
と、話していた側近？が周りを見渡した。

「何か意見のあるものはいるか？」

いやいや、常識的につっこみ所はめちゃくちゃあるだろう。
結界維持してるの私だし・・・、皆に協力してもらってだけど。
まぁ、この状態で言える人はいないだろう。この時点で決定事項の連絡だろうし。

宰相とかお父様の側近が見当たらないしなぁ。

お父様の弟ならこの国での力は、私、お父様についで三番か。
この世界でなら海が入るから四番目と。今は一番と思っているだろうけど。

邪魔な者は、隔離したか殺したかな？

“アクア、仲間に頼んでこの城に捕らわれているものがいないか調べて。
それと私が行くまで操られないようにフォローしてもらえるようにしてくれない？”
水の精霊にお願いするのが一番でしょう。
“は～い。ちょっといってきます。”

「あの～、王様はどうなったのでしょうか？それと王妃様、皇太子様はどうされているのですか？」
あらら、チャレンジーな女官さんが・・・。

「王と王妃は地下牢で、皇太子は他国で療養中だ。」
知らなかったわ、私は療養中なんだ。お父様かお母様が言ったんでしょうね。

「では、皇太子様が戻られるまではブラッド様が王様代理ということですね。」
女官さん、満面の笑みで言って大丈夫？

「そういうことになる。」うわ～っ、嫌そうに言ってる。

「他になければ解散とする。ブラッド様を今後陛下とお呼びするように。」
ふ～ん、陛下代理が正しいと思うけど。

陛下代理と側近が出てから、集まった人たちも出て行きました。
おや、さっきの女官さんと騎士さんたちが医療室に入っていきましたね。
ちょっと付いて行こうかしら。

「さっきの何？えらそうに腰巾着ごときが。」
えっ？怖～っ。女官さん。周りの騎士さんたちは笑ってるけど。

私はというと医療室の片隅にて盗み聞きと。味方だったら嬉しいな～と。

“ヴェント、さっきの陛下代理のそばで話を聞いていて教えて。”

“了解しました。”

「シシィ、そんなことはどうでも良い。王と王妃を助け出さないと。

乱心ってどこから出てきたんだ？不意打ちでやられるような王ではないはずだが？

ところで誰か皇太子はどこか知っているか？隠れるように連絡した方がいいと思うが。」

若手騎士代表って感じね。皆若いわねぇ。２０～３０代くらいね。

「ギル。皇太子に関しては情報がないから逆に安全だと思うわよ。下手に探す方が危ないわ。第一、年と性別しか知らないのよ。」

あれ？そうだっけ？転移で動くから廊下でも会ってないか。

影が城にいたはずなんだけど？

「そうか、じゃあ、王と王妃を陛下代理たちに気づかれずに助け出す方法を考えよう。

地下牢と言っていたが、そこは信じていいだろう。地下牢は魔術が使えないからな。

王を閉じ込めるには最適な場所になる。助けるには魔術が使えず困るがな。

おい、参謀、あとよろしく。」

「俺？ギルが決めるんじゃないのかよ。」

「無理、俺はまとめるのと戦うのが専門。作戦はアルに任せる。」

「はいはい。確認だけど、ここにいるメンバーだけでやるんだよな？
ここにいる奴は、信用できるが、諸事情で参加できない奴は、事前に教えてくれ。
親類縁者関係は仕方がないからな。明日の朝までに頼む。」

「これで解散とする。皆、仕事に戻れ。」
ギルの号令で解散となり、一人アルと呼ばれる人を除いて出て行った。

「さて、お嬢ちゃんは何者かな。」
げっ、こちらを向いて話しかけてきました。

６５　ジオ国の城へ（後書き）

すみません。一月以上も間が・・・。

66　ジオ国の城にて

＜ジリー＞

―ジオ国―

“オプス、リュミ、見えてるって～。”

“そうみたいですね。

他の人には見えてないようでしたので、この方が特別でしょう。

誰かの加護があるのではないでしょうか？”

“彼から見えるようにして。”

““はい。””

「あなたは、加護持ち？」

「いいえ、少々勘がいいだけだと思います。

実際、見えていたからではなく、そんな気がしたからですので。」

「そう、さっきの返事だけど敵じゃないと思うわよ。」

「そうでしょうね。初めまして、ジリーさま。」

「よくわかったわね。」

「お姿を拝見すればわかります。髪と瞳の色は違いますが、王妃さまに似ておいでですので。

ところで今回のことは、どこまでご存知でしょうか？」

「あなたたちとほとんど同じよ。この国に戻ったと同時に結界がとぎれたの。
だから、ひとまず結界を復活させて、その後でお父様とお母様を助け出したわ。
ただ、、体温がなく、脈もなかったから、話しができていないわ。
そのうえ、治療法がわからないから、フィアンセに任せたわ。こんなところね。」

「はい？こんなところね、じゃないですよ。結界はジリーさまだったんですか？
それにすでに王と王妃を助け済みとは。なんなんですか、あなたは？」

「ん？規格外？」

「それにフィアンセって発表されてませんよね。」

「あら、まだだったかしら？お父様とお母様の許可は出てるけど。」

「突っ込むところが満載で訳がわからなくなってきました。
どうせ、明日にならないと情報も集まりませんので今日は休んでください。」

いつの間にか外は真っ暗。まもなく深夜。
忙しい一日だったとしか言えないわね。明日なら海と話ができるだろうし。

「ここのベット借りたいけどいいかしら？」

「はぁ？部屋に戻って・・・は、駄目ですね。どうぞ。
食事はこちらに用意させていただきます。」

「ありがとう。町へ食べに行く予定だったから助かるわ。」

「深窓の・・・、病弱・・・。」

なんか言ってるわね。名前聞いてないけどアルって呼べば良いか。

“オプス、リュミ、見えなくしてね。”

““はい。””

「アル、情報収集に行ってくるから。じゃあね。」
伝えたらさっさと壁を通り抜けて廊下へ。

陛下代理は、どうせ執務室にいるだろうから行くとしましょうか。

ヴェントも待っているだろうしね。

“ヴェント、いる？”

“はい、中にいます。”

“扉付近に誰もいないかしら”

“大丈夫です。”

確認して入ることにしました。満員電車は、もうないと思いつつ。
入って片隅へ移動。中には、陛下代理と側近がいました。

“ヴェント、この二人は何を話していたの？”

“はい、結界の復旧を誰がやったのか不思議がっていました。”

そうよね。自分がやったって言ったんだから、気になるわよね。

「陛下、結界の件はともかく、王と王妃はいかがされますか？地下牢で陛下自らが入り口を塞がれましたので誰も出入りできませんが。」

「放っておけ。特殊な薬を飲ませてある。死んでいるようなものだ。私より上位の魔術師はいないから助けることはできない。」

「それでしたら問題はございませんね。皇太子はどうしますか？」

「ふん、病弱な娘一人で何ができるというのだ。捨て置け。もう、下がれ。」

「はっ。」側近は部屋から出て行きました。

残った陛下代理は、懐から鏡らしきものを取り出しました。何かぶつぶつ唱えると鏡が輝き始めました。

「セレン殿。こちらはうまくいきました。そちらはいかがですか。」

「予定外のことが起こってしまって、現状は変わっていないですね。城と神殿が地震で壊されました。何か腑に落ちない地震でした。」

鏡から声が聞こえてきました。携帯もどきの魔具のようです。

へぇ、なかなかできる人がいるんですね。

？聞き捨てならない話も聞こえました。
城と神殿の地震ってゴルア王国のことですね。やっぱり繋がりありですか。

「そうですか。そちらが動かれるときに連絡をください。
そうそう、セレン殿の薬はさすがですね。無味無臭で効果は絶大。
いつかお教えいただきたく思います。」

「いえいえ、ブラッド殿の魔術こそ。洗脳の際には助かりました。
ただ、まだ勇者を捕まえていないので何とも言えませんが、
勇者をこちらがわに引き込む良い方法だったと思います。
進展がありましたら、連絡させていただきます。」

意味がわからない話も聞こえてきましたね。
なんでジオ国を敵にすれば勇者を味方に引き込めるんだろう？
まぁ、いいか。医療室に戻ることにしましょう。

医療室に戻るとアルが仁王立ちで腕を組んで待っていました。
もしかしてお小言？説教ってスタイルですね。
私って一応魔王代理のはずなんだけど。

「ジリーさま、どちらへ行かれていたんですか？」
姿見せていないのに・・・、本当に勘？

「執務室ですけど、それが何か？」

「全く、ジリーさまは何をお考えですか？」

「ちゃんと情報収集って言って出たじゃない。」

「言い逃げで、ですよね。止める間もなかったではないですか。」

うっ、ばれてますか。

「陛下代理について知りたかったから、しかたがないでしょ。」

「気持ちはわかりますが・・・。

とにかく、こちらで食事をすませてお休みください。」

「は～い。」

用意された食事をして、ベッドに横になると同時に眠りについた。

６６　ジオ国の城にて（後書き）

次回７月１３日０時に更新します～。

67　ジオ国の城にて

＜ジリー＞

―ジオ国―

♪海は広いな～、大きいな～。♪

ああ、携帯か。

「もしもし、おはよう、海。気分はどう？」

「ああ、大丈夫だ。そっちこそ大丈夫か？」クレアルに聞いたのかな。

「うん。お父様とお母様はどう？治せる？」

「ああ、問題ない。知識にある薬草を魔術で加工したものだ。数代前の勇者がらみのものだ。よく知っていたな。」

「作ったの、ゴルア王国の王族だと思うわ。」

「それなら有りだ。勇者関係のものがあるだろうから。子孫かもしれないな。」

「ふ～ん。で、どれくらいかかりそう？」

「午前中に意識が戻って、午後には動けるだろう。」

「じゃあ、明日の朝こちらへ来れそう？」

「問題ない。」

「お父様に医療室に来てと伝えて。

ただ、お父様と海の魔力を隠した状態で来てね。
ブランとクレアルがいるから大丈夫よね？」
「俺ができるから問題ない。」
「わかった。待ってるね。」
「じゃ、明日。」

さすが賢者？。良かった、でも、なんだかずるいと思う私は間違ってない！

さて、大きな心配ごとは無くなったと。
次は、陛下代理が何をしたいかね。
民のためってことなら、お父様は引退して私と旅に出るって言うだろうし。
そうなら良いなって希望的観測。

“皆、おはよう。引き続きお願いね。”
“”“”“”おはようございます。”””””
“アクア、捕らえられている人っていたのかしら？”
“はい、拘束されて牢に入れられていたよ。”
“後で案内お願いね。”
“は～い。”

コンコン、ノックの音の後にアルが食事を持って入ってきました。
「ジリーさま、おはようございます。食事をどうぞ。」
「ありがとう。いただきます。」

「ジリーさま、食べながら聞いてください。まもなく昨日のメンバーがここに来ます。
味方にならない者もいるかもしれませんので姿は見せないで下さい。
それと王と王妃が助け出された話もさせていただきます。誰とは言いませんので。」
「了解。ところでアルの仕事って何？」

「医師です。で、この部屋をいただいています。」
「あれ？おじいちゃん先生は？」

「ジリーさま専属で先日引退されましたよ。」
お父様・・・。

「ところで今回のクーデターって何が目的だと思う？」
「それなんですが、よくわからないのです。
あの陛下代理は、権力志向はありますが、身の程を知った人物と思っていましたので。」

「宰相と側近を助け出せばわかるかもね。」
「そうですね。今回の打ち合わせは、そちらの予定です。」

「他のメンバーはいつ来るの？」
「まもなくだと思います。仕事が始まる前に集まる予定です。」

食事が終ってしばらくするとノックの音が聞こえました。

「アル、おはよう。」
「おはよう、シシィ。ギルは？」

「皆と一緒に来ると思うわよ。」

「そっか。」
「よぉ。」ノックもなく扉が開き騎士たちが入ってきました。
「ノックぐらいしろ、まずい時どうするんだ？」
「扉を開かなくしているだろうが。」
「まぁな。」
「さて、アル作戦は？」
「ああ、考えてない。」
「はぁ？なんだと。」
「まずは、情報。調べたことを順に話せ。ギルが皆から聞いているならギルな。」
「あの時間からでは、調べても知れている。宰相と王の側近が反逆罪で捕らえられた。
皆、話もできず連絡も取れず浮き足ったまま、相手の動き待ちって。」
「こちらからの報告。王と王妃はすでに助け出されている。
情報提供者は、暗殺の可能性があるから教えられない。」
「ちょっと待て。そんな話信用できるか。提供者を言え。」
「言うつもりはない。信用できないならそれでかまわない。」
ちょっと、喧嘩させたい訳じゃないけど。
「ちょっと仲間割れしてどうするのよ。ギル、拗ねている場合じゃないでしょう。
まったく、自分にはなんでも話してもらえるとでも思っているのかしら？

アル、もう少し、王と王妃の情報ないの？」
「ああ、薬か魔術で意識不明。情報者の知り合いが治療中。俺が診たかったというのが本音。教えてもらったのは、以上。」

「そっか、誰も知らないから手が出せないってことね。」
「ああ、俺を拘束して聞き出そうとしても、それ以上知らないから無駄になる。
たぶん、情報提供者を聞き出しても、顔を知らないから無駄だろうなぁ。」

「なんか不思議な話になってない？」
「そっか？で、現在ここにいるメンバーはこちら側ってことでいいのか？」

「ああ、皆、陛下代理側の身内もいない。」
「それじゃあ、今日の予定だが、宰相と王の側近の居場所・状況を探ってくれ。」

「妥当だな。今日は、解散。」ギルの号令で本人も一緒に部屋から出て行きました。

６７　ジオ国の城にて（後書き）

次回更新　７月２０日０時

68　ジオ国の城にて

＜ジリー＞

―ジオ国―

アルと二人になると、

「さて、ジリーさま、本日のご予定を教えていただけますか。」

ちょっと怖いんですけど。

「宰相と側近のいる牢に行きますけど、それが何か？」

「そうですか、場所をご存知なんですね。誰か護衛を連れていって下さい。」

「え～っ、足手まとい。」

「・・・、それでも楯くらいにはなるでしょう。」

「・・・、専属の護衛を呼ぶわ。」ジーンに来てもらいましょう。

“ジーン、私の元へ魔力を消して来て。”ふぅ、声には出さず叫んでみました。

「ジリー、呼んだか？」呼んで３０秒・・・、医療室にジーンが現れました。

「うん、ちょっと護衛をお願い、一人だと出してもらえないみたいだから。」

「ジリーさま、そちらが専属の護衛ですか？」

「そう。国境に住んでいる友人で、実力はお父様のお墨付き。」

「そうですか、ジーンさまも規格外に当たる方ですね。」
「おまえは、眷属の子孫のようだな。大きな力は感じれないが、わずかに血を感じる。」

「へぇ、世の中狭いね。やっぱり、勘じゃなかったのか。」
「ちょ、っと、待って下さい。ジーンさまは、何者ですか？」

「すでに気づいていると思うが。」
「やはりそうですか。」

「もう、話は夜ゆっくりでいいじゃない。ポーも呼ぶから。
ジーン、アクアと牢に行くから付いてきて。姿は見えなくしてね。」

「ジリー、見えなくはできないぞ。」
「あっ、ごめん。こっちでできるか聞いてみる。」

“オプス、リュミ、ジーンと二人見えなくできる？”
“一緒に行動するなら大丈夫です。”

「アル、行ってくる。」
「お気をつけて。」

“アクア、案内よろしくね。”
“は～い、ついてきてください。”

廊下に出て、アクアについて、階段を下りたり上がったり。
お仕事中の人が部屋から突然出てきたり、女官さん達がおしゃべりしながら歩いていたり、
自分の住むお城なんだけど物珍しくてきょろきょろしちゃいました。

もちろん、人にぶつからないように気をつけました。
牢が近づいてきたのか、騎士が多くなってきました。
正騎士かな？近衛騎士？よくわからない。興味なかったらスルーしていた過去・・・。
廊下の突き当たりに頑丈そうな扉があり、その前に騎士４名。
多いのか少ないのかわかりませんが、さっさと通り抜けしましょうか。
魔術のかかった扉だったみたいですが、上位の魔術師だと問題なく通れてしまいます。
だから、私もジーンも問題なしと。
アクアの案内で宰相と側近２名がいる牢の前へ来ました。
この牢付近に魔術の気配はありません。扉だけで大丈夫だと思われ、いや、思うか。
三人は、少々疲労しているようですが、怪我とかはなさそうです。
誰もここに入れないけど、食事はどうなっているのかしら？
アルに用意してもらって持って来たほうがいいわね。
「宰相、状況を説明しなさい。」
「はっ、理由はわかりませんが、ブラッドのクーデターです。
飲み物に何か入っていたのか、王と王妃が倒れました。
そこへブラッドが来て私たちを捕らえました。
私たちは王たちとは別々に拘束され、場所が違うため状況がわかりません。」
「ジリーさま、王と王妃はご無事でしょうか？」

側近の一人から声がかけられました。見えないはずですが・・・。三人とも私だとわかっているようですね。

「二人は助け出してフィアンセに任せてあります。ところで宰相たちは、どうしますか？今助け出すこともできますが？」

「そうですね。何もわからない状態ですので、おとなしくして相手の出方みたいですね。ブラッドは戦争をしかけるつもりはないようですし、二日ほどこのままでも良いかと思います。」

「わかりました。食事はどうしますか？ここには誰も入ってこれないのでしょ？」

「そうです。困っています。」

「そうね、今晩アルと食事を持ってきます。アルに皆の体調をチェックしてもらいましょう。」

「アルとは医療室のですか？」

「そうです。」アルって有名人？

「次期宰相にと思っています。ジリーさまの片腕にするつもりです。」

「宰相ね、わかったわ。王になってもらっても良いから、それも考えて。」

ギルという騎士から参謀と言われていたわね。

国から離れることができなし、王なんて面倒なだけですよね。

「それでは。」
「「「はっ。」」」
“皆、医療室に転移するから近くへ。”
医療室へ戻ってきました。
アルが、怪我人の治療中でしたが、姿を消しているので問題なし。
治療が終って連絡を入れたら、皆で町へ遊びに行きましょう。
おーい、そんなことしている場合かって、脳内会議をしましたが・・・。
明日、お父様が来てからでいいっかって結論に。
私、１０歳だし・・・と。

６８　ジオ国の城にて（後書き）

次回更新　７月２７日０時

69　ジオ国の町へ

＜ジリー＞

ージオ国ー

「ジリーさま、お待たせいたしました。」
アルは、怪我人の治療が終り、患者が出て行ったのを確認して私に言いました。

「宰相たち三人だけど、疲労と食事が問題ね。
それで、夜に食事を用意して持って行くのと、健康状態を見て欲しい。」

「わかりました。消化の良い食事を手配しておきます。健康状態はどちらで？」
「牢へ一緒に行きましょう。2～3日牢にいる予定だそうなので。」

「そうですか。では、ジリーさま、夜まではどうされるのですか？」
「この国の城下は、行ったことがないので散策してきます。昼食と夕食もね。」

「そうですか、ジーンさまもご一緒ですね。ジーンさま、ジリーさまをよろしくお願いします。」
ジーンがうなずきました。

“皆、転移するからそばに来てね。”

町外れに転移しました。

「オプス、リュミ、見えなくなる魔法の解除お願いね。フラムは、引き続きお願い。ジーンも引き続き魔力を消していてね。さぁ、皆で遊びに行きましょう。」

転移先が城下町からかなり離れた場所だったので、お小遣いになる薬草を収集してから
城下町に向かって歩き始めました。
ちょっと離れすぎの場所だったけど、私達二人ですから問題なしです。
魔術を使ってスピードアップして歩けばあっという間に到着。

薬草を薬屋さんに持って行く。

「いらっしゃい。お嬢ちゃんたちお母さんのお使いかな。」
人の良さそうなおっちゃんです。

「違うよ。これを売りに来たの。」ちょっと子供っぽく返事をしてみました。

「おおっ、お嬢ちゃんたち、えらいな。なかなか状態がいいよ。よ～し、ちょっとだけおまけしてあげよう。」

「ありがとう、おにいちゃん。」お約束ですよね？
ふふっ、昼食と夕食代にプラスお土産代までゲット。

お腹が空いたのでご飯ご飯と。あちこちから良い匂いが漂ってきます。
屋台があるみたいなので、そちらで済ませるのもありですね。

「ジーン、お店と屋台どっちが良い？」
「どちらでも。」
「じゃあ、昼は屋台で食べ歩きしましょう。」
「うむ。」

串焼きもどきがおいしそう～。ジーンの分二つと私の一つ購入。おいしい～。ジーンの食べるスピードが早いわ。次は何にしようかしら。
じゃがバターもどきを発見。これも三つ。うん、満足。
飲み物とデザート代わりにお菓子を食べつつ、散策。
思っていたより人が多いわね。

ここにいる人達ってお城の様子知っているのかしら？
ちょっと聞いてみようかしら？

「お姉さん、そのピンクの頂戴。」飴かなぁ？
「はい、どうぞ。」

「お姉さん、結界の色が変わったよね。何で？」
「そうね、私は知らないけど。
お城から明日の午後広場に集まるようにとおふれがあったわね。
そこで聞けるんじゃないかしら。」

「そういえば。お姉さんありがとう。」怪しまれないうちに離れました。

へぇ、王の交代を明日の午後に発表予定かな？
明日の朝、お父様と合流するから伝えなきゃ。

あても無くあちこちと散策をしていたら、見たことのある人物が前方から歩いてきました。
ギルと呼ばれていた人と一緒にいた人の二人です。見回り？かな。
どうしようかな？近づくべきか近づかないべきか。
暇だから後をどうどうとつけることにしましょう。

“ジーン、この二人の後をついて行くよ。”
“うむ。”

見回りなら問題ないでしょう。
ふ～ん、この二人もてるみたいですね。常に女性から声を掛けられています。
さすがに仕事中だからか手を振るだけですが。

あら？私達の後をつける人が数人いますね。
へぇ、一応優秀なのかしら？前の二人も気づいた感じです。
通りから一本道を外れて、人気のない場所の方へ進んでいます。
私達もついていってますよ。おもしろそうだもの。

前の二人が、人のいない広い場所で足を止めました。
後から6名ほどのザ・悪者が登場しました。

間に私達二人、・・・目に入っているのかなぁ。
か、入っているけどお互いに相手側の仲間と思っているか。子供二人ありえないか。
ちょっと横にどいていましょう。ジーンは後をついてきている。

「俺たちに何か用か？」ギル。
「死んでもらう。」悪者。ありきたりだなぁ、で負けるんだろう、

お約束よね。

嘘、ありえない、ギル弱い・・・。もう一人は、まぁまぁだけど。ギルは、もう一人の後で守られているって。このままだと時間の問題かなぁ。

しかたがないなぁ、はい、悪者皆拘束と。ついでにリーダー以外は眠ってもらいましょう。

でも、ギルって確か戦うのが専門って、アルに参謀を押し付けていたけど？

これで戦うの専門って言えるのか？アルよりは強いだけ？

「キース、何かしたのか？」ギルが、もう一人に聞いています。

「いえ、勝手に。ギルは違うよな。」

「まぁ、いいか。おい、誰に頼まれた。」ギルが悪者へ。

「知るか、金をもらって頼まれただけだ。」あっさり白状しています。悪あがきしてほしいです。

あんなことやそんなことをしてほしいかも。

「おーい、そこの嬢ちゃんたち。そんなわくわくした目で見られても何もないよ。」キース。

「そこのおじちゃん弱いね。」ふふん。事実を言ってみました。

「ぐっ。」ギル。

「騎士さまって強いと思っていたんだけど。」私。

「嬢ちゃん、このおじちゃん弱く見えたかもしれないけど、正騎士では一番だよ。」

「？」一番弱い？

「今朝、ちょっとあってね。魔術にかかっているんだよ。」キース、子供にも丁寧ね。
あら、本当にそうね。気がつかなかったわ。解除しましょう。

「今もそうなの？」ギルへ聞いてみる。
「おおっ？魔術が解けている。ひょっとして嬢ちゃんか？」ニーって笑ってみる。

「ありがとうな。もしかして、これもか。」と悪者を見る。
親指立ててみる。ちょっとやってみたかったから。

「嬢ちゃん、どこの子だい。」キース。
「う～んと、今の保護者はアル！」一応間違ってないわよね。
そうそう邪魔な悪者リーダーも眠らせておきました。

「げっ。まさかな。同名なだけさっ。」ギル。
「お城で医者をしているアルフォードのことか？」キース。
名前、アルじゃなかったんだ。

「うん。」
ギルが、頭を抱えてしゃがみこみ、キースは、爆笑。

「これからどうするんだ？」とキースが聞いてきました。
「え～っと、夕食を取ってから、お城のアルのとこに行くの。」

「じゃあ、俺たちも食事するから、一緒にお城も行こうか？」キース。
「うん。」

「おい、キース。また、アルに馬鹿にされるのか、俺。」ギル。
「相変わらず仲がいいなぁ。あれはじゃれてるって言うんだ。お前の反応が面白いから、からかわれているだけさ。そんなことより、これどうするんだ。」キース。

「どうせ、犯人は腰巾着さ。こいつらは何も知らされていないだろう、城の牢に入れても殺されるだろうし、どうするか。」
ああ、あれか、口封じ。

「ひとまず、騎士の詰所の牢に入れておくか。」キース。
「そうするか。誰か呼ぶか。」ギル。

しばらくすると騎士らしき人が４名こちらにきました。

「隊長、お呼びですか？」騎士の一人が、ギルに敬礼して話かけました。

「ああ、俺を襲ってきた。牢に放り込んでおけ。それから城への連絡は不要だ。」
「了解しました。」

悪者が引っ立てられました。

「またせたな。何か食べたいものでもあるか？」立ち直ったギルが聞いてきました。
「お勧めの店でいいよ～。」

ギルとキースのお勧めのお店へ。
この世界の普通の食堂で、いかついおっさんが店長でした。

ファミリー向けではなく、働く人のためのお店で、私たち二人はちょっと場違いって感じかな。
味は、お勧めだけあっておいしく、話すこともなく、食べるのに集中させてもらいました。

皆が食べ終わって、自分とジーンの食事代をギルに渡そうとしたら
「おいおい、子供に支払わせる訳ないだろう、大人しく奢られておきな。」

あまり年齢差ないのですが、それに私の方が稼ごうと思ったら高収入になるんだけど。
「ありがとう。」ひとまずお礼ですね。

「さて、お城へ行こうか。」キース。
「そういえば、名前はなんていうんだ?」ギル。

「こっちがジーンで、私がジリー。」髪と瞳が違うけど、正体がわかったらすごい。
「俺がギルで、こっちがキースな。」知ってるけど、うなずいておきました。
ちょっとキースが挙動不審者になっていたけど疑われているんだろう。
ギルは、やっぱり気づかず。大丈夫か、隊長!周りが助けなくてはと思っているのかも。
キースはギルのフォロー役だったりして。

６９　ジオ国の町へ（後書き）

次回更新　８月３日０時

70　ジオ国　再び城へ

＜ジリー＞

ージオ国ー

少々暗くなってきた頃に城下町からお城へ戻ってきました。
お城が近づいてきたら、キースにフードを被せられ背負われました。
で、ジーンの手を引いています。う～ん、わかってやってますかね。

「キース、何してんだ。そんなに子供好きだったか？」
「・・・、やっぱりギルですね。アルフォードにからかわれてください。」

「なんでだ？」
「・・・。ふぅ。医療室で説明します。」

ギルとキースが声を掛けられたら返しながら城へ入り、医療室へ到着しました。
途中、その子達は？って聞かれたら迷子とか、適当な返事をしながら。

「アル、ただいま。」一応挨拶。
「・・・、なんでギルとキースがいるんだ？」

「町で会ったからついて歩いたからかな？」私。
「キース、ジリーさまを。」アル。キースが降ろしてくれました。

「へぇ、ジリーっていいとこの子だったんだ。見えねぇ。」ギル。

「「・・・。」」アルとキースからじっとりと睨まれています。
「さて、二人とも睨むのはそれくらいで。ギルは天然だから。」私。
「「はっ。」」
“ヴェント。牢に行って今朝の三人以外がいたら連絡くれない？”
“はい、わかりました。”ヴェントが移動しました。
「キース、説明は？」ギル。
「アルフォード、どうする？」キース。
「はぁ、ギル、この国の皇太子の名前と特徴は？」アル。
「名前はジリーさま、１０歳で女の子、王妃似で黒髪で赤い瞳だろ。」ギル。
「では、このジリーさまの特徴は？」アル。
「王妃さまに似ている女の子で、名前がジリーさま？髪と瞳が違うが？」ギル。
「ジリーさま、色については何かされてますよね。」キース。
「現在、何があるかわからないこの国へ入るのに、そのままはありえませんね。」私。
「まじか、俺鈍い？キース早く教えろよ。皇太子のジリーさま、話し方が？」ギル。
「もちろん、相手、場所を選んでいます。アル、キース、あとでギルを好きにしなさい。」私。
「「はっ。」」アル&キース。

びくっとするギル。

「そんなことよりも、アル、用意できていますか？」私。

「はい、できています。」アル。

「まずは食事を届けたいと思います。この二人は信用できますか？」私。

「はい、大丈夫です。」アル。

「では、手伝ってもらいましょう。」私。

「キース、そっちにある食事をこっちへ持ってきてくれ。ギルは、この診察器具を持っていてくれ。ジリーさま、この位置でよろしいですか？」アル。

「そうね、キースはもっと近くへ。ジーン、最後までつきあってね。」

“ヴェント、今からそっちへ行くけど問題ない？”

“大丈夫です。”

じゃあ、転移しましょう。

牢の前の通路へ転移しました。

「フィード宰相。遅くなりました。」アル。

「げっ、父上。」ギル。

「叔父上。」キース

世の中狭いですね。アルは次期宰相と言われてたから顔見知りと

は思っていたけど、
二人は、側近の身内だった訳ね。さてと、さっさ鍵を開けて食事をしてもらいましょう。
“ヴェント、鍵を開けてくれる？”
“はい、わかりました。”返事とともに鍵が開きました。
「さぁ、食事にしましょう。」
キースが、三人の前に食事の準備を始めました。スープ、サラダ、パンですね。
食事と診察が終ると宰相に話しかけられました。
「ジリーさま、陛下のご容態はいかがでしょうか？」
「もう大丈夫です。動けるそうですので。」明日、戻ることを言うか言わないか。
「そうですか。ほっといたしました。陛下あってのジオ国ですから。」
「ねぇ、陛下代理が民のための政治ができるなら、このまま変わっても良いと思う。
宰相とそこの二人がついていれば大丈夫な気もするけど。アルどう思う？」
「ジリーさま、少々人望がなさすぎる気がしますが。」
「それなら現在皇太子の私は、人に知られてないから人望ゼロよ。」
「ジリーさま、そういう問題だけではありません。ジオ国は、力

の強いものが王になるのです。」
宰相が参戦してきました。

「お父様の次に陛下代理が一番だから問題ないのでは？」
私と海は、チートだから強い順に入ること自体ＮＧな気もするし、お父様よりも・・・だから。

「ジリーさまが入っておりませんが。」アル。
「私と婚約者は、規格外ですから除外するべきでしょう。」わかって言ってますね。

「陛下がお戻りになってからの相談でよろしいのでは？
それよりもこれからいかがいたしましょうか。」側近の一人、ギルの父。

「お父様が戻るまで、宰相とアルでどうするか決めて欲しい。
それと、明日の昼に城から発表があるとのことだけど、どう思う？」

７０　ジオ国　再び城へ（後書き）

次回更新　８月１０日０時

71　ジオ国　城にて

＜ジリー＞

ージオ国ー

「ジリーさま、その話はどちらで聞かれましたか？」アル。

「昼に城下町を散策していたときに屋台のお姉さんからです。」私。

「明日発表ならば、昨日私達に話した陛下のご乱心と陛下代理の件でしょう。結構早い対応ですね。事前に決めていたスケジュールでしょうか？」キース。

「しかし、陛下代理と腰巾着だけで立てた計画だとは思えない。他に何かご存知ではありませんか？ジリーさま。」フィード宰相。

「そう言えば、父に飲ませた薬は、ゴルア王国王弟に用意してもらったみたい。で、その王の弟は、勇者の子孫だろうって。」私。

「うわっ、陛下代理嵌められてるって。」ギル・・・、ギルパパに小突かれてる。

「ギルフォードの言うとおりでしょう。あの国の魔国嫌いは異常です。この国を弱体化させるために立てた計画としか思えません。

ただ、陛下代理といえど簡単にゴルア王国の王族にしてやられるとは考えられないのですが。」アル。

「ふむ、薬を使って操られていることも考えられる。ひとまず、陛下にお戻りいただき、陛下代理と腰巾着殿に退場していただきましょう。」宰相。

「明日の発表はいかがいたしましょう。」アル。

「陛下代理の発表は、阻止しなくてはならない。発表内容を差替えるように。」宰相。

「はっ。ジリーさまの婚約発表にでも差替えましょう。婚約者について教えてください。」アル。

アルの最後のセリフはこっちを向いて言った。なんか引っかかる言い方だなぁ。まぁ、いいけど。

「はい、はい。」私。

「では、本日はこれで失礼させていただきます。明日は、朝に食事をお持ちいたします。」アル。

“ヴェント、医療室に人がいないか確認お願い。”

“ジリー、大丈夫です。”すぐに返事がありました。

「アル、ギル、キース、私のそばへ。」皆がそろったのを確認して転移。

「さて、今日はこれで解散と。

発表内容の原稿は今日中に作るから、明日差替え頼むな。」アル。
「了解。」キース。
「じゃあ、明日な。」ギル。
二人が帰ったので、アル、私、ジーンの三人になりました。
「さてと、ポーを呼びますか。」私。
“ポー、聞こえたら来て～。”ジーンの時と同じく、声に出さずに叫んでみました。
「呼んだ？」ポー登場。
「うん、呼んだよ。ねぇ、ポー、この人ってポーの眷属？」私。
「そう。能力は、感知レベル、魔力は多い。この国でなければ1番。魔法で普通に固定されてる。」
「この国だったら？」好奇心で聞いてみました。
「ジリー、海、王の次。」ポー。
あらら、陛下代理を抜いちゃいました。次期陛下にアルがなってもいいじゃん。
本気で皇太子辞めたいって思ってます。
「ねぇ、何のために？」私。
「たぶん、眷属が子孫が無事に育つように。
血が薄くなっている今なら問題ない、当時は人よりも龍の方に引きづられたと思う。」ポー。
「その魔法は、外すことはできるのだろうか？」アル。

「たぶん、海なら。ジリー？」ポー。
「海なら知っていそうね。というより外せる気がする。話は通しておくわ。」
知識があるうえに魔法使えるから。
「それと魔法を外すと容姿変わる。」ポー。
「えっ？」私。
「龍の血に引っ張られると思う。、髪と瞳の色が変わる程度。」ポー。
ポーの容姿に近づくのかな。
「アル。それでもいい？」私。
「お願いします。」アル。
「ジリー、問題がなければ帰る。」ジーン。
「ジーン、長くつきあわせてごめん。ありがとうね。
ポーもありがとう。また、何かあったら呼ぶからお願い。」私。
「わかった。」ジーンは返事をしてから数秒で帰り、ポーはうなずいてそのまま帰った。

71　ジオ国　城にて（後書き）

次回更新　8月17日0時

72　ジオ国　城にて

＜ジリー＞

ージオ国ー

「さて、ジリーさま、婚約者のことを教えてください。」アルが書くものを用意して聞いてきました。

「発表に必要な項目を言ってもらえれば答えます。」私。

「では、名前、年齢、種、国と立場からお願いします。」アル。

「名前は、黒宮海。年齢２４歳。種は人。髪は茶色で瞳はブルー。出身は、地球上の日本。

ゴルア王国の召喚者で勇者の親戚かな。」私。

おっ、アル絶句中かな。手が止まってるし。

「ジリーさま、召喚者って・・・。勇者の親戚ってなんですか。」アル。

「そのままだけど、何か問題？」私。

「問題あります。そんなことを口外すれば、ゴルア王国から横槍が入ります。」アル。

「なぜ？あそこの召喚はかなり問題があるわよ。召喚された者への扱いが特にね。

召喚された者は、あそこへの義理も何もないわよ。迷惑なだけだし。

それと二度と召喚はできないわよ。魔方陣どころか建物も壊したから。」

海が破壊しましたから。

「はぁ、何故ご存知か理由はお聞きしません。が、公表は控えましょう。」アル。

「こちらは別に構わないけど。」私。

「では、気を取り直して、馴れ初めをお願いします。」アル。

「ふ～ん、そんなことが必要なの？」私。

「やはり、世の女性はそういうのがお好きですので。」アル。

「そうね。他国の大通りで体調を崩した私を助けてくれたのが海だったってことかしら？」私。

「なぜ疑問なんですか？」アル。

「海と会って前世を思い出したら、従兄弟だったからかしら？」私。

「もう、どこに突っ込んでいいのかわからなくなりました。まさか勇者ではないですよね。」アル。

「あら、良い勘してるわね。あの国から逃げ切った元勇者♪」私。アルなら話しても大丈夫だろうと話しちゃいました。

「冗談だったんですが・・・。これも公表なしで。」アル。疲れきってうなだれてます。

「適当にお願いね。」私。

「でも、どうやって逃げ切れたのですか。」アル。

「たまたま召喚された時に二人とも仮装してたからかしら。」私。

「仮装とは？」アル。

「そうね、私の場合は、白髪の老人の姿形でいたから殺されかけて逃げ出したわ。
海は、黒髪に黒い瞳の元の世界の女の子に扮装していたらしいわ。
実際には、髪も瞳も黒くなくて男だから捜しようがないわね。私は、生まれ変わっているし。」

「ジリーさまの規格外の理由がわかりました。
では、掲載事項ですが、ジリーさまの婚約発表と。
お相手について、名前は黒宮海、年齢は２４歳、種は人。
馴れ初めは、ジリー様が他国で体調を崩して困っていたところを助けられてと。
こんな感じでいかがですか？」アル。

「アル、ジオ国の王にならない？
私の身内がいなければ一番強いって条件も人望もクリアしているんだし。
はっきり言って、私は向いていないのよね。一般市民の感覚しかないから。
前世の記憶を思い出したからだと思うけど。お父様にも伝えておくから考えてね。
神に贔屓されている私と海が、国のトップっていうのは卑怯だとも思うのよね。」私

「考えてみたことがない話なので、すぐに返事はできかねます。
どちらかというと参謀向きだと思っていますし。」アル。

「それもそうだけど・・・。まぁ、この件が決着してからにしましょう。」私。

「時間も遅くなってきましたので、そろそろ失礼させていただき

ます。」アル。

「とくに話もないことだし、明日ギルとキースが来てからね。」

私。

「では、失礼いたします。」アルが部屋から出ていきました。

「皆、いろいろフォローありがとうね。」

アクアから教えてもらいましたが、さりげなくオプスとリュミが部屋の入口を隠してくれていたり、

フラムが私を中心に声が漏れなくしてくれていました。

気づかないところでもいろいろしてくれていそうですね。

73　ジオ国　引き続き城にて

＜ジリー＞

ージオ国ー

さてと、海と明日についての打ち合わせが必要ですね。携帯に電話しましょう。

「もしもし、海？体調どう？」私。

「ああ、大丈夫、問題なし。絶好調ってことで。王様と王妃様の二人もほぼ薬が抜けて元に戻っているからな。」海。

「良かった～、ありがとう。じゃあ、明日の朝に皆こちらにこれそう？」私。

「ああ、大丈夫だ。ただ、転移場所がわからないかな？」海。

「お父様に医療室へ転移してって伝えて。海はサポートで魔術を感知できないようにしてね。」私。

「了解。じゃあ、明日。おやすみ。」海。

「おやすみなさい。」私。

そうそう、お風呂と着替えは、皆に協力してもらって自分の部屋へ戻っています。

ー翌朝ー

外が明るくなってきたので目が覚めました。

「皆、おはよう～。」私。

「「「「「「ジリー、おはよう。」」」」」」

「今日の予定を発表します。というかフォローのお願いです。
ティエラには、引き続き結界のフォローを、フラムも引き続き私の魔力をわからなくしてね。
オプスとリュミは、お母様の姿を見えなくして、ヴェントとアクアは私の警護で。」私。

「「「「「「は～い。」」」」」」

後は、海達を待つだけね。アル達とどちらが早いかな？

「ジリー、おはよう。」海登場。
「おはよう、海。おはようございます。お父様、お母様。
お二人とも体の調子はいかがですか？」私。

「おはよう、ジリー。大丈夫ですよ」母。

「ジリー、おはよう。問題ない。さて、早速だが、現状を教えて欲しい。」父。

「はい、陛下代理のブラッドがジオ国の王弟に唆されたか操られて行ったのではないかと。
本日、国民に向けて発表がありますので、それを私の婚約発表と差替えを行う予定です。
宰相と側近二名は結界の張られた牢に入れられています。」

「ジオ国の王弟か。まぁ、そんなところだろう。ブラッドらしく

ないと思っていた。
婚約発表は、まだ早い。」父。
「お父様の許可もある決定事項なんですが。」私。
「わかっておるが・・・。」父。ちょっとへこんでますねぇ。
「お父様、往生際が悪いですよ。」私。
海は、発言もなく聞いているだけですね。まぁ、何も言えないかしら。
そういえばブランも一緒にいるけど他の人には見えなくしているのかな？
「わかった。」父。
「ところでお父様、この部屋の主アルは何者ですか？ポーの眷属だそうです。」私。
「ああ、王族から臣下に下った一族の者だ。」父。
「では、彼が次期国王というのもありですね。」私。
「まぁ、そうだな。前世が勇者でその力を持っている状態で、婚約者の海まで規格外では、
各国のバランスから考えても皇太子から外すことも考えないといけないかもしれない。
ただ、アルは、魔力が平凡すぎることか。ブラッドに全く及ばないのでは問題外だ。」父。
「それは問題ないです。アルの魔力は、私達、お父様を除けばこ

の世界で一番ですって。
何かの魔法にかかっているから海に外してもらえば良いそうです。」
「わかった、魔法を解除してから検討しよう。さて、ジリー宰相達をここへ連れてきてくれ。」父。
「わかりました。オプスとリュミはお母様をお願いね。フラム、魔力よろしく。」話終って牢へ転移。
ー牢ー
「おはようございます。」私。
「「「おはようございます、ジリーさま。」」」
「お父様が呼んでいますので、医療室へ転移します。もう少し近くへ寄って下さい。」
転移のできる範囲に皆が揃ったのを確認して医療室へ。
ー医療室ー
「陛下、ご無事な姿を拝見いたしまして安心いたしました。」宰相がひざまづき言いました。
側近二人もひざまづき頭を下げました。
「皆も無事でなによりだ。まずは、わかっていることがあれば報告を。」父。
「陛下と王妃様が倒れられてから、すぐに牢に入れられたため何もわからない状態です。

ジリーさまのお話でジオ国の王弟の暗躍であろうとは推測しております。
陛下が倒れれば結界の維持ができず、攻め込めると考えたのではないでしょうか。」宰相。

「やはり、ブラッドが操られていると皆思うのだな。
私と妃以外に命にかかわるものはいなかったか？」父。

「申し訳ありません。確認ができておりません。アルフォードが登城すればわかるかと。」
ギルの父の発言です。

“ジリー、誰かこの部屋へ近づいて来たよ。”アクア。
“アクア、誰かわかる？”私。

“ん、たくさん人がいた部屋で前にいた人かな。”アクア。
“ありがとう。”私。

74　ジオ国　引き続き城にて2

＜ジリー＞

ージオ国ー

「すみません、陛下代理か腰巾着が来たようです。
片隅に寄って静かにして下さい。見えなくしますので。」私。
腰巾着って言っても誰も反応しませんでした。

“海、よろしく。”私。海が魔法を使えることを知るのは身内だけでいいでしょう。
“了解。”海。

皆が場所を移動し、魔法で見えなくなると同時に扉が開きました。
入ってきたのは、腰巾着。何をするために来たのでしょうか？
医療室だから怪我?、は無いか。私たちがばれた?、も無いでしょう。
アルに用かしら。

「なんだ、アルフォードはまだか。」とかぶつぶつ言ってます。

トントン、ノックの音が聞こえました。

“ヴェント、誰かわかる?”私。
“はい、昨日遅くまで話ていた人です。”ヴェント。
私と海以外の名前は覚えないのかしら?

アルが来たようです。

ノック後、扉を開けて入ってきて、椅子に座っている腰巾着を見て顔をしかめました。

「ドベルニク様、朝早くから何か御用でしょうか。」アル。本当に嫌そうですね。

「良い話だ。」腰巾着。

「お断りいたします。」アル。何も聞かずに返事しています。

「まだ、何も言ってない。きさまを陛下の側近に推薦してやろうと言うのだ。

宰相の私からの推薦だ。ありがたく受けることだな。」ドベ。

「結構です。謹んでお断りいたします。私は一医師で結構です。」アル。

「なんだと、この私の推薦を断ると言うのか、この城から追い出されてもいいのだな。」ドベ。

「邪魔ですから、さっさと出て行ってください。」アル。

「ふん、そんなことを言えるのも今のうちだ。」ドベは、いきおいよく扉を開閉して出て行きました。

「ジリーさま、お待たせいたしました。」アル。

「おはよう。アル。」私。

“海、皆を見えるようにして。オプスとリュミは、引き続きお母様を見えなくしてね。”私。

皆の姿が見えたアルは、一瞬硬直しました。

無理はないですよね。自分の部屋にトップ４＋αがいるんですから。

「陛下、ご無事にお戻り何よりでございます。」　さすがアル、立ち直りが早い。

「アルもな。ところで此度のことで死者・怪我人はどの程度であった？」父。

「死者・怪我をした者どちらもおりません。
私たちは、突然集められてブラッドさまが王位に着くと言われただけです。
城内、城下の様子につきましては、まもなくギルバートとキースが来ますので報告させます。
皆様、食事の用意をいたしますのでしばらくこちらでお待ちください。」
とアルは部屋から出て行きました。

まもなく、カートを押してアルが戻ってきました。

皆が食事を終らせたのを確認してから、お父様が海を紹介しました。

「海、こちらへ。」お父様の言葉に海が私のそばからお父様の近くへ。

「この黒宮海をジリーの婚約者とした。本日、民へ発表することになる。」父。

「黒宮海と言います。よろしくお願いします。」海。

「ジリーさま、おめでとうございます。」宰相。
「「「おめでとうございます。」」」側近の二人&アル。

「ありがとうございます。お父様、嫌そうに言わないでください。」私。

“ジリー、きのうのひとたちきたよ。”アクア。

“アクア、ありがとうね。”私。

「ギルとキースが来たようです。アルお願い。」私の言葉にアルが扉を開けに行きました。

７４　ジオ国　引き続き城にて２（後書き）

来月の更新は土曜０時の予定です。
９／１０が目標。

75　ゴルア王国

＜レスト（皇太子）＞

ーゴルア王国ー

勇者が現れなかったという話をするために私たち４人は城へ向かった。
ビヤル（騎士）とリーコスは、別行動で情報収集することになった。
そして、瓦礫の山となった城と神殿を見て私たちは、唖然とすることとなった。

まわりを見渡して、呆然とする人はいても、助けを求める声は聞こえてこない。

「海がやったのでしょうね。」グリューネ。
「なぜ、わかるのですか？」レスト。

「さきほど対峙したときにもやろうとしていましたので。
こちらで力を使い果たしてくれたから私が楽勝できたのでしょう。
でなければ敵わなかった気がします。」グリューネ。

「そうですか。状況は、見たままなのでしょうが、一応聞きにいきましょうか。」レスト。
王に近いものを捕まえて聞くのが一番か。うわっ、王がいる・・・、無視は駄目か。

「陛下、ただいま戻りました。勇者ですが、現れませんでした。

ところで、これはどういうことなのでしょうか。」レスト。

「何、現れなかっただと。お前たちの作戦であろう。役に立たぬな。」王。

質問は無視か。人を貶めるのが好きな人だから、わかってはいたが。

「申し訳ありません。」ひとまず謝っておくのが無難だな。

王と側近がその場を離れ、宰相が残った。

「殿下、さきほどのご質問ですが、建物が揺れて避難が終わるのと同時に崩壊いたしました。

神殿も同じです。死者どころか怪我人もおりません。この二つの建物以外で揺れはありません。

まるで人がいないのを確認して行っているかのようです。

ひとまず、陛下を初め城に住んでいる者の住まいの手配で精一杯という状況です。」宰相。

「そうか。私にできることはあるのだろうか。」レスト。

「そうですね。城と神殿だけへの被害で他にはないのでとくにありません。

ただ、仮住まいがおちつき、城の再建の際にはご協力をお願いいたします。」宰相。

「わかった。」レストの返事を確認して宰相は王の後を追いました。

「さて、ここでは何もすることもありませんので私の館へ行きましょうか。」レスト。

城から少々離れた場所にあるレストの館へ、他の者の手を煩わすわけにもいかず徒歩で移動。

「思ったよりも、王も宰相も勇者への関心は低く感じますね。もし、黒幕ならば、あんな反応ではすまないですよね。」ユーチェ（偽勇者）。

「そうですね。いつもの王でしたね。それに神官長殿もですね。呆然と神殿を見ながら祈られてました。私たちに視線も向けませんでしたね。」

さすがよく見られてますね、イズーク（元魔術師長）。

「イズーク、気づいたのはそれだけか？」グリューネ（森の魔女）。

「はい？他にもありますか？グリューネ様。」イズーク。

そういえば、イズークはグリューネの弟子だったな。

「どこに雇われているのかわからなかったが、魔術師の一人が私達の動向を気にしていたぞ。

この館まで後をつけて来ていた。」グリューネ。

「すみません。気がつきませんでした。それでどこの者かわかってのでしょうか？」イズーク。

「気づかれぬように追跡の魔術をつけた。建物の中へ入ったら解除されるようにしてある。」

グリューネの話で驚いたが、この話で安心もした。

「グリューネ様、いつ追跡いたしましょうか？」イズーク。

「レスト殿下はいかがお考えでしょうか。」グリューネ。

「すぐに動いて相手に気づいていることを知られたくない。相手次第では、明日の昼に理由をつけて訪問するのがいいだろう。」レスト。

「では、そのようにいたしましょう。」グリューネ。

「さて、明日は忙しくなるだろうから、今日はゆっくり休んで英気を養って下さい。」レスト。

75　ゴルア王国（後書き）

すみません。予定は予定でした。二日遅れ＆短いのですが…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4332p/

勇者？誰のことですか？

2011年9月11日20時29分発行